神戸学院大学心理学研究

第 6 巻　第 2 号

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2024 年 3 月 発 行

神 戸 学 院 大 学 心 理 学 部

神戸学院大学心理学研究 第6巻 第2号　目次

研究報告

小学校における発達障害児の支援に関する研究のレビュー
——2006-2023——
神戸学院大学心理学研究科　岡本 光里 …… 69
神戸学院大学心理学部　村井 佳比子

支援者側から見た通級指導教室の役割と今後の課題について
神戸学院大学心理学研究科　關川 ひより …… 77
神戸学院大学心理学部　難波 愛
神戸学院大学心理学部　竹田 剛

摂食障害予防教育のさらなる発展に向けたシリアスゲーム活用の可能性
神戸学院大学心理学部　竹田 剛 …… 91

2023年度第1回心理学部学術講演会

刑務所の現状と今後について
松山刑務所所長　高野 洋一 …… 101

2023年度第2回心理学部学術講演会

経験の共有が協力行動に及ぼす影響
中国・河南大学教育学部講師　斉　芳珠 …… 115
逐次通訳：神戸学院大学心理学部准教授　毛　新華

2023年度卒業論文 題目一覧 …… 141

2023年度卒業論文 優秀論文要旨 …… 145

2023年度修士論文 要旨 …… 147

2023年度 活動報告 …… 163

神戸学院大学心理学研究 2024 年　第 6 巻 第 2 号　pp.69-76

研 究 報 告
Research Report
（査読なし）

小学校における発達障害児の支援に関する研究のレビュー ――2006-2023――

岡本 光里　神戸学院大学心理学研究科　　村井 佳比子　神戸学院大学心理学部

Review of research on support for children with developmental disabilities in elementary school: 2006-2023

Hikari Okamoto（*Graduate School of Psychology, Kobe Gakuin University*）
Keiko Murai（*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*）

本研究は，国内の小学校での発達障害児への支援に関する研究をレビューし，現状の把握と今後の支援について検討することを目的とした。2006 年から 2023 年に出版された小学校に在籍する発達障害児への支援に関する研究 37 篇を抽出し，研究を実施した場所，場所ごとの論文数の推移，研究の対象となった行動, それぞれについて検討した。その結果, 研究を実施した場所は専門機関が最も多く，小学校での研究に関しては，通常学級での研究が多いことがわかった。研究対象となった行動については,「対人行動」に関する行動が最も多く, 次いで「認知･学習」が多いことが示された。道城他（2008）では，日本における通常学級での研究が少ないこと，また，学業従事行動や学習行動，対人行動に関する研究が不足していることが指摘されているが，2006 年以降の研究ではこれらの課題に対して一定の成果がみられることが示唆された。一方，地域との連携に関する研究は見当たらず，今後の課題であることがわかった。

Key words: review of research，elementary school，children with developmental disabilities
キーワード：レビュー，小学校，発達障害児

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2024, Vol.6, No.2, pp.69-76

問題と目的

発達障害の早期発見と支援を目的として，2005 年に発達障害者支援法が施行され，さらに 2016 年の改定によって,「その支援が切れ目なく行われ，個々の発達障害の特性に対する理解を深め，適切な雇用機会や教育上の配慮を促進する」ことが明文化された（厚生労働省，2016）。現在では発達障害への理解が進み，特別支援学校や特別支援学級だけでなく，通常学級での支援など，さまざまな支援が提供されるようになってきている。

発達障害児・者に対する有効な支援の 1 つとして，応用行動分析（Applied Behavior Analysis，以下 ABA とする）が挙げられる。ABA による支援では，問題となる行動の前後に何が生じているかを把握し，その行動の機能を分析することで，適切な行動を増やすための具体的な支援を見出すことを目指している（鈴木・佐藤，2020）。ABA はエビデンスにもとづく支援方法として成果を上げており，個別支援に優れているとともに，最近ではクラス全体，学校全体への支援の成果が蓄積されてきている（山本・澁谷，2009）。道城他（2008）は，1990 年から 2005 年までの学校場面における発達障害児に対する ABA を用いた介入研究のレビューを行い，国内，海外，いずれにおいても「小学校」の「特別支援学級」の「授業」中に「個別」に行われた研究が多いこと，また,「通常学級」で行われた研究は海外の方が多く，通常学級に対する学級介入の必要性があることを報告している。また，須藤（2018）は，2012 年から 2017 年までの ABA を用いた ASD に関連する実践研究のレ

ビューを行い，支援実施者と教員や保護者のような関係者が連携して関わっていること，支援の場については，療育機関や障害者施設，自宅等が 70 パーセントを占めており，通常学級での支援は多くないことを報告している。

このように，ABA の専門家や保護者，教員の連携は広がりつつあるものの，日本ではまだ通常学級での支援は限定的であり，外部の療育機関を利用する等，保護者の努力に頼る部分が大きいと推測される。もちろん個々の特徴に合わせた個別支援は重要であるが，現在ではインクルーシブ教育システムの構築が推奨されており（文部科学省，2012），児童だけでなく教員も，障害の有無にかかわらず共に学び合う環境の構築が求められている。特に小学校時代は心身の発達にとって重要な時期であり，6 年間という長い教育期間の中でどのような支援を得ることができるかは，その後の社会適応や対人関係，人格形成に重要な影響をもたらすと考えられる。そこで本研究は，道城他（2008）のレビュー後の 2006 年から 2023 年までの，ABA による支援を含む国内の小学校での発達障害児への支援に関する研究をレビューすることで，支援の現状を把握するとともに，小学校での今後の支援について検討する手掛かりを得ることを目的とする。

方　法

調査時期

2023 年 12 月 1 日～ 7 日に調査を実施した。

手続き

国立情報学研究所の CiNii Research に登録されている論文について，道城他（2008）を参考に，4 つの国内雑誌「教育心理学研究」「行動分析学研究」「認知行動療法研究（行動療法研究）」「特殊教育学研究」を選定した。このうち，出版年が 2006 年から 2023 年の 17 年間の掲載論文に対し，「精神疾患の診断・統計マニュアル」第 4 版（DSM-IV; American Psychiatric Association, 1994 高橋他訳 1996）および第 5 版（DSM-5; American Psychiatric Association, 2013 日本精神神経学会監修 2014）における広汎性発達障害・神経発達障害のカテゴリーに含まれる「自閉性障害・自閉症スペクトラム障害」「注意欠如・多動性障害（ADHD）」「学習障害（LD）・限局性学習障害」について,「発達障害」「自閉症」「ADHD」「LD」をキーワードとして文献を検索した。なお，本研究では抽出された論文のうち，小学校に在籍する発達障害児への支援（介入研究・事例報告等）に関する研究を分析の対象とした。

結　果

本研究で採用した 4 つの学術雑誌において 4 つのキーワードで抽出した論文数を表 1 に示す。このうち，小学校に在籍する発達障害児への支援に関する研究は，全体で 37 篇であった（表 2）。

表 1
CiNii 文献検索結果

キーワード	発達障害	自閉症	ADHD	LD	合計	合計（重複等省く）	分析対象論文数
教育心理学研究	9	4	3	2	18	15	3
行動分析学研究	23	22	3	1	49	41	11
認知行動療法研究（行動療法研究）	19	13	2	1	35	28	8
特殊教育学研究	92	58	18	21	189	161	15

表 2

分析対象文献一覧

出版年	タイトル	著 者	雑誌名・巻・ページ	対 象	支援場所	標的行動
2006	不登校を示した高機能広汎性発達障害児への登校支援のための行動コンサルテーションの効果 ： トークン・エコノミー法と強化基準変更法を使った登校支援プログラム	奥田 健次	行動分析学研究，20（1），2-12	2名の高機能広汎性発達障害をもつ不登校児童とその保護者	大学の心理相談室・プレイルーム	登校や参加：学校活動への参加（登校渋りへの支援）
2006	母親との協力による視覚的プロンプトを用いた発達障害児への引き算の指導	道城 裕貴，松見 淳子	特殊教育研究，44（2），137-144	「自閉的行動を伴った広汎性発達障害」と診断された7歳2か月（プログラム開始時）の男児1名	自宅	認知・学習：引き算
2007	通常学級での授業参加に困難を示す児童への機能的アセスメントに基づいた支援	興津 富成，関戸 英紀	特殊教育研究，44（5），315-325	広汎性発達障害が疑われる小学校3年の男児	通常学級	学校生活：授業参加
2007	通常学級に在籍する発達障害児の他害的行動に対する行動支援 ： 対象児に対する個別的支援と校内支援体制の構築に関する検討	大久保 賢一，福永 顕，井上 雅彦	特殊教育研究，45（1），35-48	小学2年生の男児（他害的な問題行動を示す発達障害児）	通常学級	問題行動：他害的行動
2008	ある広汎性発達障害児の行動アセスメントにおけるシステム構造分析の試み(資料)	今井 正司，今井 千鶴子，嶋田 洋徳	認知行動療法研究，34（1），1-15	小学校1年生男児（7歳）	通常学級	問題行動：授業中の問題行動
2008	攻撃的行動を示す特定不能の広汎性発達障害の児童に対する機能的アセスメントを用いた介入(実践研究)	野口 美幸，飯島 啓太，野呂 文行	認知行動療法研究，34（2），163-173	特定不能の広汎性発達障害と診断され、攻撃的行動を示す7歳9か月の男児	通常学級	問題行動：攻撃的行動
2008	自閉症児におけるボードゲームを利用した社会的スキル訓練の効果（実践研究）	吉田 裕彦，井上 雅彦	認知行動療法研究，34（3），311-323	通常学級に通っている小学6年男児	通常学級	対人行動：集団遊び（社会的スキル）
2008	聴覚優位で書字運動に困難を示す発達障害児への漢字学習支援	青木 真純，勝二 博亮	特殊教育研究，46（3），193-200	書字運動に困難がみられた小学校3年生男児	通級指導教室	認知・学習：漢字書字
2009	自閉症傾向のみられる発達障害児における刺激等価性の枠組みを用いた感情語の指導	島宗 理，細畠 美弥子	行動分析学研究，23（2），143-158	障害児学級に在籍する、自閉症の傾向を持った2名の9歳男児	空き教室（障害児学級）	対人行動：感情語
2010	自閉症児における自己および他者視点の左右弁別の形成 ： 高次条件性弁別による分析と視点般化の検討	奥山 高光，井澤 信三	行動分析学研究，24（2），2-16	8歳の自閉症女児2名	大学	認知・学習：左右弁別の形成
2010	自閉症児の学校生活場面における報告言語行動と聞き手への接近行動の形成 ： シミュレーション指導場面の役割	本田 智寛，村中 智彦	行動分析学研究，25（1），42-64	小学校の特別支援学級に在籍する自閉症男児2名	特別支援学級	学校生活/対人行動：報告言語行動・聞き手への接近行動
2011	自閉性障害児における他者の視覚的注意の理解に関する応用行動分析的研究	渡辺 孝継，須藤 邦彦	教育心理学研究，59（1），100-110	1名の自閉性障害児（10歳）	大学の心理相談施設	対人行動：注意喚起行動・社会的行動
2011	自閉症スペクトラム障害の児童における援助行動の形成	須藤 邦彦	教育心理学研究，59（2），206-218	10歳の自閉症スペクトラム障害の児童2名	大学の行動訓練セッション	対人行動：援助行動
2011	相互依存型集団随伴性が通常学級集団の適応行動に及ぼす効果 ： 発達障害児の在籍する小規模学級における試み	福森 知宏	行動分析学研究，25（2），95-108	小学校5年生の児童9名(発達障害児1名を含む)	通常学級	学校生活/認知・学習：係活動・作文・発表
2011	二分脊椎症と特定不能の広汎性発達障害を伴う児童の排尿訓練 ： 課題分析に基づく指導事例(実践研究)	伊藤 久志，谷 晋二	認知行動療法研究，37（2），105-115	特定不能の広汎性発達障害を合併する二分脊椎症の男児（小学生10歳）	クリニックのカウンセリングルーム	日常・地域生活：導尿スキル
2011	特異的読字障害を示すLD児の視覚性語彙の形成に基づく読み指導に関する研究	後藤 隆章，熊澤 綾，赤塚 めぐみ，稲垣 真澄，小池 敏英	特殊教育研究，49（1），41-50	通級指導教室に通うLD児10名（2年～5年）	通級指導教室	認知・学習：視覚性語彙の形成（読み指導）
2012	広汎性発達障害児の書字反応の変容に及ぼす自己記録パッケージの効果	太田 研	認知行動療法研究，38（2），131-141	特定不能の広汎性発達障害との診断を受けていた男児（小6）	心理教育相談所・自宅	認知・学習：書字反応の正反応率・自己記録の正確性
2012	広汎性発達障害児に対するビデオ映像を用いたネガティブ感情とその原因説明の指導	雨貝 太郎，園山 繁樹	特殊教育研究，50（2），151-160	広汎性発達障害の診断を受けた10歳の男児1名	大学のプレイルーム	対人行動：感情語の表出
2012	活動移行時に激しい行動問題を示す自閉症児に対する先行子操作と結果操作による介入	林 周一郎，井澤 信三	特殊教育研究，50（1），45-54	小学校の特別支援学級に在籍する知的障害を併せ持つ自閉症男児9歳	大学付属センターの指導室	問題行動：自傷行動・他傷行動・暴言・泣き叫ぶ
2013	発達障害児の「登校しぶり」への包括的支援	園山 勇雄，宇野 宏幸	特殊教育研究，51（1），51-61	小学6年生の発達障害児とその母親	大学・学校の相談室	登校や参加：登校しぶり
2013	広汎性発達障害児が示す暴力・暴言・物壊しの低減を目指した自己記録を中心とした介入パッケージ	小笠原 恵，未永 統	特殊教育研究，51（2），147-156	他者に対する暴力・暴言や物壊し行動を頻繁に示す広汎性発達障害児1名（小1）	大学	問題行動：暴力・暴言
2013	自閉症スペクトラム障害児における「なぞなぞ」参加行動の形成に関する一事例検討	松下 浩之，園山 繁樹	特殊教育研究，51（2），157-167	小学校通常学級2年の広汎性発達障害男児	大学のプレイルーム	学校生活：自発的な解答行動の形成
2014	発達障害児へのセルフモニタリングを取り入れた社会的スキル訓練 ： 短期維持効果の検討	半田 健	認知行動療法研究，40（3），177-187	発達障害のある小学1年生児童	大学相談機関	対人行動：働きかけ・その応答・上手な聞き方
2014	通常学級に在籍する自閉性スペクトラム障害児に対する社会的スキル訓練 ： 般化効果・維持効果に焦点を当てて	岡島 純子，谷 晋二，鈴木 伸一	認知行動療法研究，40（3），201-211	公立小学校の通常学級5学年に在籍する自閉性障害と診断された男児	小学校の教育相談室	対人行動：上手な聞き方・共感・会話への入り方・会話の維持の仕方
2015	広汎性発達障害児に対するサイコロトーク場面における発話促進の指導	雨貝 太郎，園山 繁樹	特殊教育研究，53（1），47-55	広汎性発達障害の診断を受けた11歳の男児1名	大学のプレイルーム	対人行動：聞く行動・話す行動（発話促進）
2015	自閉症児に対する会話の修復機能としての明確化要求の発達支援 ―明確化要求の表出タイプの出現順序、共同行為ルーティンの役割、明確化要求の表出と欲求意図理解との機能連関に焦点を当てて―	吉井 勘人，仲野 真史，長崎 勤	特殊教育研究，53（1），1-13	小学校特別支援学級在籍の自閉症男児	大学のプレイルーム	対人行動：明確化要求の表出
2016	プロンプトによる教師の注目の増加が通常学級に在籍する自閉症スペクトラム障害のある児童の授業参加に及ぼす効果	庭山 和貴，松見 淳子	行動分析学研究，31（1），55-62	小学1年生の担任教師と、自閉症スペクトラム障害のある小学1年生女児	通常学級	問題行動：離席行動
2016	通級指導教室における平仮名の書字に困難を示すLD児に対する支援の検討――エラーパターンに沿った数量的な判読性の評価基準を活かした支援の効果から――	須藤 邦彦，宮野 玲子	行動分析学研究，31（1），15-29	平仮名の書字に困難を示し、かつ書字活動への動機づけが著しく低下してしまっている小学校通常学級第1学年のLD児1名と支援者（長期研修派遣教員）1名	通級指導教室	認知・学習：文字を正しく記す反応・書字割合
2016	自閉症スペクトラム児における他者の欲求意図理解にいたる過程 ―日常的文脈における欲求質問獲得の支援を通して―	野澤 和恵，藤平 未来，小野里 美帆	特殊教育研究，54（3），189-197	自閉症スペクトラム障害のある8歳6か月児	自宅	対人行動：欲求質問獲得
2017	自閉症スペクトラム障害児に対する作文の自己調整方略学習（SRSD）モデルを用いた小集団介入	丹治 敬之，横田 朋子	教育心理学研究，65（4），526-541	特別支援学級に在籍する小学3，4年生の自閉症スペクトラム障害（ASD）児童6名	特別支援学級	認知・学習：作文
2017	自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害のある児童に対する家庭学習場面における課題従事行動に及ぼす教示と自己記録の効果	永冨 大舗，上村 裕章	行動分析学研究，31（2），144-152	自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害のある小学校2年生男児	自宅	認知・学習：課題従事時間・非課題従事行動生起率
2017	広汎性発達障害児に対する機能的アセスメントに基づいた唾吐きの低減を目指した支援 ―生活の向上に着目して―	服部 真侑，関戸 英紀	特殊教育研究，55（1），25-35	広汎性発達障害と診断された小学校特別支援学級2年に在籍する男児	特別支援学級	問題行動：唾吐きの低減
2018	通常学級における学級全体への支援と個別支援の組合せ――発達障害・知的障害児童を含む学級全児童の学習準備行動への効果――	岩本 佳世，野呂 文行	行動分析学研究，32（2），138-152	小学5年生3学級の全児童102名（発達障害・知的障害児童7名を含む）	通常学級	学校生活：学習準備行動
2018	自閉症スペクトラム障害児への4コマ漫画を使用した報告言語行動訓練――感情語の表出を対象に――	富田 悠香，菅佐原 洋	行動分析学研究，32（2），110-126	自閉症スペクトラム障害児4名（生活年齢11歳）	大学のプレイセラピー室	対人行動：感情語の表出
2021	発達障害のある児童の漢字の読みに対する刺激ペアリング手続きを用いた遠隔地学習支援の効果	野田 航，石塚 祐香，石川 菜津美，宮崎 優，山本 淳一	認知行動療法研究，47（2），93-105	発達障害のある児童2名（小6，小3）	自宅	認知・学習：漢字の読み
2021	自閉症スペクトラム障害のある小学生が感情の調整方略を仲間とともに考える小集団指導	岬 和希，丹治 敬之	特殊教育研究，59（2），105-119	情動調整が困難な自閉症スペクトラム障害の小学6年生3名	大学のプレイルーム	対人行動：情動調整方略
2022	発達障害の診断のある児童への小学校社会科における刺激ペアリング手続きの効果の検討――都道府県の名称及び漢字表記、形状・位置における刺激間関係の形成について――	佐藤 亮太朗	行動分析学研究，36（2），159-167	発達障害の診断のある小学4年男児	自宅	認知・学習：都道府県名の漢字表記・形状・位置

研究を実施した場所について

抽出した 37 篇の文献について，須藤（2018）を参考に，研究を実施した場所を「専門機関（大学や療育機関等）」「小学校（通常学級・特別支援学級・通級教室）」「自宅」に分類した（図 1）。研究を実施した場所が複数ある場合は，重複してカウントした。その結果，「専門機関（大学や療育機関等）」が 17 篇と最も多く，その次に「小学校（通常学級・特別支援学級・通級教室）」が 15 篇，「自宅」は 6 篇であった。「小学校」については，教室別に分類すると，「通常学級」が最も多く 8 篇，「特別支援学級」は 4 篇，「通級指導教室」は 3 篇であった。

これらの論文の出版年をもとに，3 年ごとの出版数の推移を図 2 に示す。2006 年から 2008 年には「通常学級」で行われた研究が 5 篇と多かった。2009 年から 2011 年では，「専門機関」での研究が 4 篇と多くなり，2012 年から 2014 年には「専門機関」で行われた研究が 8 篇と最も多かった。2015 年以降は，「専門機関」で行われた研究は減少していた。その他の年代では，それぞれの場所で行われた研究に大きな差は見られず，ほぼ横ばいという結果であった。

研究の対象となった行動（標的行動）について

研究の対象となった行動について，須藤（2018）を参考に，「対人行動（コミュニケーション，遊び等）」「問題行動（自傷，他害等）」「認知・学習（学習スキル，弁別スキル等）」「学校生活（授業への参加や役割分担等）」「日常・地域生活（身辺自立，買い物等）」「登校や参加（登下校，入室行動等）」の 6 つに分類した（表 3）。なお，須藤（2018）と同様に，1 つの研究論文で複数の項目に該当する標的行動を対象としている場合は，重複して分類した。また，近年「問題行動」は「チャレンジング行動」と表現されるようになってきており，個人の問題ではなく，環境との相互作用の中で生じるものであるという考えが広がってきているが（井上，2020），本研究では先行研究における表現を踏襲し，「問題行動」と表記することとした。

分類の結果，最も多かったのは「対人行動」13 篇で，「専門機関」での研究が最も多く，他者への援助行動の形成（須藤，2011），発話行動の促進（雨貝・園山，2015）といった，会話のスキルを身につけるための支援とともに，コミュニケーションの基盤となる感情語表出行動の形成（島宗・細畠，2009）や小集団での感情調整のトレーニング（岬・丹治，2021）に

図 1
研究を実施した場所

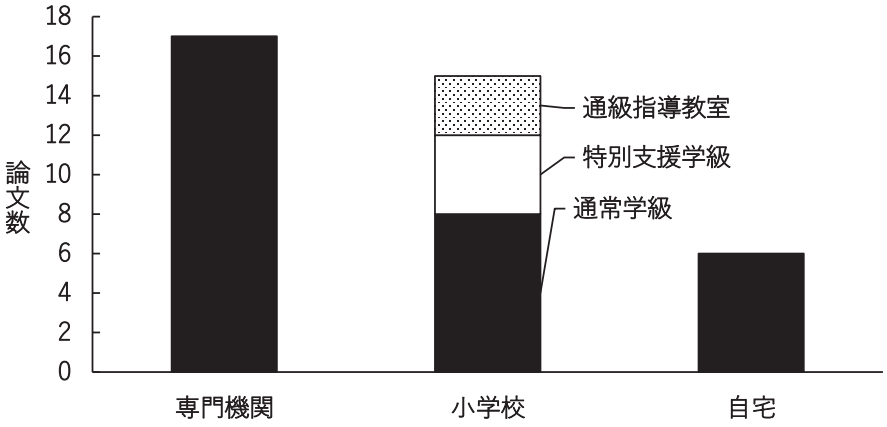
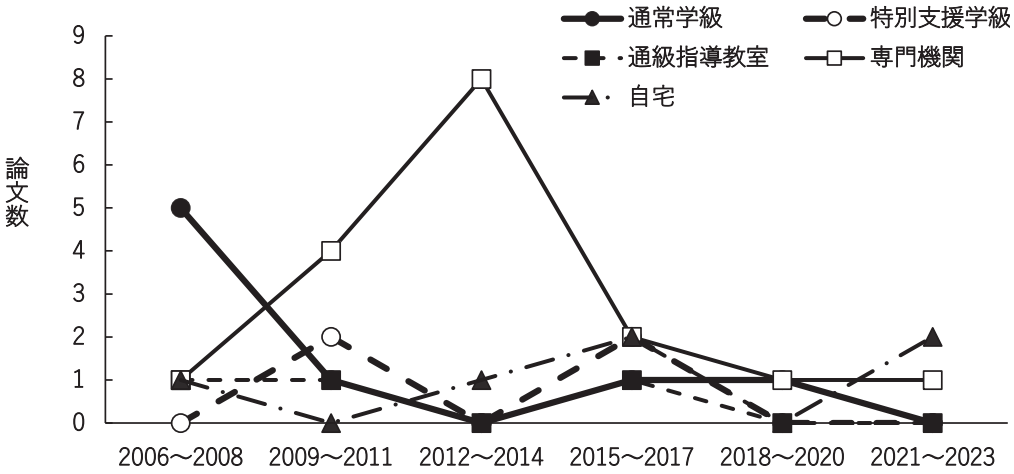


図 2
研究を実施した場所ごとの論文数の推移



関する研究がみられた。

次に多かったのは「認知・学習」11 篇であった。研究が実施された場所としては「自宅」4 篇が最も多く，次に「通級指導教室」3 篇，「専門機関」2 篇であった。自宅において実施されたものとしては，引き算（道城・松見，2006），課題従事時間（永冨・上村，2017），漢字の読み（野田他，2021）等があり，家庭での学習支援に関する研究であった。通級指導教室において実施されたものとしては，漢字書字（青木・勝二，2008），読み指導（後藤他，2011），文字を正しく記す反応の形成（須藤･宮野，2016）であり，いずれも LD 児等の学習困難を有する児童を対象とした研究であった。専門機関において実施されたものは，自己および他者視点での左右弁別の形成（奥山･井澤，2010）と，書字反応の正誤を自己記録する行動の形成を専門機関での指導のもとに自宅で実施するという，新たなパッケージの開発を目指した研究（太田，2012）で，いずれも指導法の開発に関する研究であった。

「問題行動」を対象とした研究は 7 篇で，「通常学級」での研究が 4 篇，「専門機関」2 篇，「特別支援学級」1 篇であった。通常学級での研究としては，友人への乱暴や友人の物を故意に壊すといった攻撃的行動（野口他，2008），授業中の離席行動（庭山・松見，2016）等，授業や学校生活での適応の問題に関する内容であった。一方，専門機関での研究は，自傷や他害，泣き叫ぶといった強度の行動障害を対象とした研究（林・井澤，2012）と，暴力や暴言等に対する介入パッケージの開発（小笠原・末永，2013）があり，通常学級内で扱うことが難しい強度の行動障害や，指導法の開発に関する研究であった。また，「特別支援学級」での研究は，対象児の唾を吐くという行動をきっかけに，支援学級の児童間で唾を吐き合うという行動がエスカレートしたことを対象とした研究であった。

「学校生活」を対象とした研究は 5 篇で，「通常学級」で実施された研究 3 篇，「特別支援学級」1 篇，「専門機関」1 篇であった。通常学級での研究としては，授業や清掃活動等，学校生活の中で，並ぶ，挨拶をする，仲間と協力するといった，適切な社会的行動の生起を目的とした研究（興津・関戸，2007），係活動や朝の会の活動への参加等を目標とした研究（福森，2011），学習準備行動の形成（岩本・野呂，2018）があり，いずれもクラス全体に働きかけることで，対象児の行動変容を目指すといった内容であった。「特別支援学級」で実施された研究は，朝の会での自発的な発話を促進するために，実際の朝の会と同様の疑似環境を準備し，そこで支援を行うというシミュレーション指導の有効性を検討するもので（本田・村中，2010），「専門機関」で実施された研究は，学校での「なぞなぞ遊び」に興味はあるものの参加が難しい発達障害児を対象とした，個別の支援（松下･園山，2013）であった。

「登校や参加」を対象とした研究は 2 篇で，不登校状態にあった児童の授業参加への支援（奥田，2006）や登校しぶりを示している児童を対象とした，母子関係の再調整や学校へのコンサルテーション等，包括的な支援（圓山･宇野，2013）に関する研究であった。

「日常・地域生活」を対象とした研究は専門機関で行われた研究 1 篇であり，導尿スキル（伊藤・谷，2011）といった日常生活に欠かせないスキルに関する研究であった。

考　察

本研究は，国内の小学校での発達障害児への支援に関する研究をレビューし，現状の把握と今後の支援について検討することを目的とした。道城他（2008）を参考に，2006 年から 2023 年に出版された小学校に在籍する発達障害児への支援に関する研究 37 篇を抽出し，研究を実施した場所，研究を実施した場所ごとの論文数の推移，研究の対象となった行動，それぞれについて検討した。その結果，研究を実施した場所は大学等の専門機関が最も多く，2009 年から 2014 年にかけて増加していることが示された。小学校での研究に限定すると，通常学級での研究が，通級指導教室や特別支援学級よりも多いことがわかった。研究対象となった行動については，対人行動に関する行動が最も多く，次いで認知・学習が多いことが示された。道城他（2008）では，日本における通常学級での研究が少ないこと，また，学業従事行動や学習行動，対人行動に関する研究が不足してい

表 3
研究の対象となった行動

	通常学級	特別支援学級	通級指導教室	専門機関	自宅	合計
対人行動	1	2	0	9	1	13
認知・学習	1	1	3	2	4	11
問題行動	4	1	0	2	0	7
学校生活	3	1	0	1	0	5
登校や参加	0	0	0	2	0	2
日常・地域生活	0	0	0	1	0	1

ることが指摘されているが，2006 年以降の研究では小学校での通常学級での研究，および，認知・学習を対象とした研究が多いことがわかった。

時系列でみると，2006 年から 2008 年の研究を実施した場所は「通常学級」が最も多くなっており，内容としては友人への乱暴や授業中の離席行動等の授業や学校生活での適応の問題に対し，対象児童に対する個別介入とともに，友人や学級といった集団への介入を併用する研究がみられた。たとえば興津・関戸（2007）は，授業中に立ち歩く，唾を出す等の行動がみられる小学 3 年生の児童に対し，トークンエコノミーシステムとクラスワイド社会的スキルトレーニング（Classwide Social Skills Training，以下 CSST とする）の介入パッケージを用いた支援の妥当性を検討している。トークンエコノミーシステムでは，対象児に望ましい行動が生起した際，即座に賞賛するとともに支援ツールにスタンプを捺し，このスタンプが一定数たまると対象児が求める遊び等を獲得できるようにして，望ましい行動を強化している。CSST では，対象児を含むクラス全体で「整列」「お礼の言い方」「話の聴き方・意見の言い方」「共同作業」といった社会的スキルの獲得を目指し，対象児を含む児童が望ましい行動をした場合に相互に賞賛し合うと同時に，問題となる行動をしても，大きな声で注意したり叩いたりといった不適切な反応が生じないよう指導している。その結果，対象児の問題行動はほぼみられなくなったという。通常学級での研究では 2009 年以降も同様に，通常学級に在籍する発達障害児および，その可能性がある児童を対象として，個別と集団双方に働きかける支援に関する研究が継続して行われている（e.g. 岩本・野呂，2018）。道城他（2008）では，日本における通常学級での研究の必要性が指摘されていたが，2005 年に発達障害者支援法が施行され，グレーゾーンの児童と呼ばれる通常学級に在籍する発達障害の可能性がある特別な教育的支援を必要とする児童に関する調査（文部科学省，2012）が行われたことで，2006 年から 2008 年に通常学級での研究が促進されたと考えられる。

2009 年から 2011 年，2012 年から 2014 年にかけては「専門機関」で行われた研究が増加し，通常学級での研究が減少している。専門機関での研究の対象となった行動は「対人行動」が最も多く，新たな支援方法の開発等に関する研究がみられた。たとえば松下・園山（2013）は，「なぞなぞ」遊びに興味はあるが適切な参加が難しい小学 2 年の自閉症スペクトラム障害児に対し，単になぞなぞに正解することを指導するのではなく，「なぞなぞ」遊びへの参加行動を形成することで，正解でなくても解答し，一緒に楽しむといった社会的スキルが向上したと報告している。なぞなぞに解答するには比喩や言葉遊びを理解していることが必要であり，自閉症スペクトラム障害児には困難な課題であるため，「なぞなぞ」を使用した研究はほとんどみられない。このように専門機関では新たな方法や，困難な課題に対する基礎研究等が行われており，2015 年以降は自閉症スペクトラム障害児が苦手とする感情理解や感情調整方略に関する研究（e.g. 岬・丹治，2021）が行われている。

一方，標的行動について，道城他（2008）では，学業従事行動や学習行動を標的とした介入や SST などの社会的行動を対象とした介入を行う必要性が提起されている。本研究では，「対人行動」の次に「認知・学習」に関する研究が多いことが示され，道城他（2008）の問題提起に対して，その後の研究に一定の成果があったことがうかがえる。「認知・学習」に関する研究の支援場所としては「自宅」が多く，次いで「通級指導教室」「専門機関」であった。通常学級では，クラス全体の人数が多く，その児童一人ひとりに対して適切な支援を提供することは難しいため，自宅や専門機関，通級指導教室が多いと考えられる。「自宅」での研究については，4 篇のうち 3 篇が 2017 年から 2022 年の間に行われている。近年，家庭訪問型の支援が注目されており，日常生活場面で支援を行うことで，子どもの行動上の問題の減少とともに，子どもに対する母親の育児ストレスの改善に効果があることが報告されている（松本他，2021）。松本他（2021）は，発達障害児をもつ家族，特に子育ての中心的役割をもつ母親の精神的健康状態に配慮した支援の必要性を指摘しており，今後，家庭・学校，さらに地域社会との連携を強化し，養育者が孤立しない環境整備が必要になると考えられる。

以上のことから，2006 年以降，小学校での通常学級での研究，および，認知・学習を対象とした研究が増加し，現在，さらに新たな支援方法の開発が続いていることがわかった。一方，支援方法は多様化し，学校と専門機関，家庭との連携は広がっているものの，地域や発達障害児以外の児童の保護者の理解や協力等についての研究は見当たらなかった。今後，さらなる研究と実践が求められる。

利益相反

本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

American Psychiatric Association (1994). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders* (4th ed). (DSM-IV). American Psychiatric Publishing.
（高橋 三郎・大野 裕・染谷 俊幸（訳）（1996）. DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院）

American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic*

and Statistical Manual of Mental Disorders (5th ed.). (DSM-5). American Psychiatric Publishing.
（日本精神神経学会（監修）（2014）．DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院）

雨貝 太郎・園山 繁樹（2015）．広汎性発達障害児に対するサイコロトーク場面における発話促進の指導　特殊教育学研究，*53*(1)，47-55．https://doi.org/10.6033/tokkyou.53.47

青木 真純・勝二 博亮（2008）．聴覚優位で書字運動に困難を示す発達障害児への漢字学習支援　特殊教育学研究，*46*(3)，193-200．https://doi.org/10.6033/tokkyou.46.193

道城 裕貴・松見 淳子（2006）．母親との協力による視覚的プロンプトを用いた発達障害児への引き算の指導　特殊教育学研究，*44*(2)，137-144．https://doi.org/10.6033/tokkyou.44.137

道城 裕貴・野田 航・山王丸 誠（2008）．学校場面における発達障害児に対する応用行動分析を用いた介入研究のレビュー――1990-2005――　行動分析学研究，*22*，4-16．https://doi.org/10.24456/jjba.22.1_4

後藤 隆章・熊澤 綾・赤塚 めぐみ・稲垣 真澄・小池 敏英（2011）．特異的読字障害を示す LD 児の視覚性語彙の形成に基づく読み指導に関する研究――未指導文の読みの改善を含めた検討――　特殊教育学研究，*49*(1)，41-50．https://doi.org/10.6033/tokkyou.49.41

本田 智寛・村中 智彦（2010）．自閉症児の学校生活場面における報告言語行動と聞き手への接近行動の形成――シミュレーション指導場面の役割――　行動分析学研究，*25*(1)，42-64．https://doi.org/10.24456/jjba.25.1_42

伊藤 久志・谷 晋二（2011）．二分脊椎症と特定不能の広汎性発達障害を伴う児童の排尿訓練――課題分析に基づく指導事例（実践研究）――　認知行動療法研究，*37*(2)，105-115．https://doi.org/10.24468/jjbt.37.2_105

井上 雅彦（2020）．強度行動障害への理解とエビデンスに基づく支援　Retrieved January 5, 2024 from https://www.masahiko-inoue.com/challenging-behavior

岩本 佳世・野呂 文行（2018）．通常学級における学級全体への支援と個別支援の組合せ――発達障害・知的障害児童を含む学級全児童の学習準備行動への効果――　行動分析学研究，*32*(2)，138-152．https://doi.org/10.24456/jjba.32.2_138

厚生労働省（2005）．発達障害者支援施策について　Retrieved September 4, 2023 from https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000128829.pdf

圓山 勇雄・宇野 宏幸（2013）．発達障害児の「登校しぶり」への包括的支援　特殊教育学研究，*51*(1)，51-61．https://doi.org/10.6033/tokkyou.51.51

松本 好・榎本 大貴・井上 雅彦（2021）．行動上の問題を示す自閉スペクトラム症の疑いのある幼児をもつ母親への家庭訪問支援 自閉症スペクトラム研究，*18*，61-67．https://doi.org/10.32220/japanacademyofas.18.2_61

松下 浩之・園山 繁樹（2013）．自閉症スペクトラム障害児における「なぞなぞ」参加行動の形成に関する一事例検討　特殊教育学研究，*51*(2)，157-167．https://doi.org/10.6033/tokkyou.51.157

岬 和希・丹治 敬之（2021）．自閉症スペクトラム障害のある小学生が感情の調整方略を仲間とともに考える小集団指導　特殊教育学研究，*59*(2)，105-119．https://doi.org/10.6033/tokkyou.59.105

文部科学省（2012）．共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進　Retrieved December 1, 2023 from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm

永冨 大舗・上村 裕章（2017）．自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害のある児童に対する家庭学習場面における課題従事行動に及ぼす教示と自己記録の効果　行動分析学研究，*31*(2)，144-152．https://doi.org/10.24456/jjba.31.2_144

庭山 和貴・松見 淳子（2016）．プロンプトによる教師の注目の増加が通常学級に在籍する自閉症スペクトラム障害のある児童の授業参加に及ぼす効果　行動分析学研究，*31*(1)，55-62．https://doi.org/10.24456/jjba.31.1_55

野田 航・石塚 祐香・石川 菜津美・宮崎 優・山本 淳一（2021）．発達障害のある児童の漢字の読みに対する刺激ペアリング手続きを用いた遠隔地学習支援の効果　認知行動療法研究，*47*(2)，93-105．https://doi.org/10.24468/jjbct.20-019

野口 美幸・飯島 啓太・野呂 文行（2008）．攻撃的行動を示す特定不能の広汎性発達障害の児童に対する機能的アセスメントを用いた介入 (実践研究）　認知行動療法研究，*34*(2)，163-173．https://doi.org/10.24468/jjbt.34.2_163

小笠原 恵・末永 統（2013）．広汎性発達障害児が示す暴力・暴言・物壊しの低減を目指した自己記録を中心とした介入パッケージ　特殊教育学研究，*51*(2)，147-156．https://doi.org/10.6033/tokkyou.51.147

興津 富成・関戸 英紀（2007）．通常学級での授業参加に困難を示す児童への機能的アセスメントに基づいた支援　特殊教育学研究，*44*(5)，315-325．https://doi.org/10.6033/tokkyou.44.315

奥田 健次（2006）．不登校を示した高機能広汎性発達障害児への登校支援のための行動コンサルテーションの効果――トークン・エコノミー法

と強化基準変更法を使った登校支援プログラム――　行動分析学研究，*20*(1)，2-12．https://doi.org/10.24456/jjba.20.1_2

奥山 高光・井澤 信三（2010）．自閉症児における自己および他者視点の左右弁別の形成：高次条件性弁別による分析と視点般化の検討　行動分析学研究，*24*(2)，2-16．https://doi.org/10.24456/jjba.24.2_2

太田 研（2012）．広汎性発達障害児の書字反応の変容に及ぼす自己記録パッケージの効果　認知行動療法研究，*38*(2)，131-141．https://doi.org/10.24468/jjbt.38.2_131

島宗 理・細畠 美弥子（2009）．自閉症傾向のみられる発達障害児における刺激等価性の枠組みを用いた感情語の指導　行動分析学研究，*23*(2)，143-158．https://doi.org/10.24456/jjba.23.2_143

須藤 邦彦（2011）．自閉症スペクトラム障害の児童における援助行動の形成――援助事態を明確にする“準備行動”と援助行動をセットにして――　教育心理学研究，*59*(2)，206-218．https://doi.org/10.5926/jjep.59.206

須藤 邦彦（2018）．わが国の自閉症スペクトラム障害における応用行動分析学をベースにした実践研究の展望――2012 年から 2017 年――　教育心理学年報，*57*，171-178．https://doi.org/10.5926/arepj.57.171

須藤 邦彦・宮野 玲子（2016）．通級指導教室における平仮名の書字に困難を示す LD 児に対する支援の検討――エラーパターンに沿った数量的な判読性の評価基準を活かした支援の効果から――　行動分析学研究，*31*(1)，15-29．https://doi.org/10.24456/jjba.31.1_15

鈴木 あやか・佐藤 愼二（2020）．適切な行動を増やし，問題となる行動を減少させる支援について――ABC 分析の考え方を取り入れたリーフレットの作成・活用を通して――　植草学園短期大学紀要，*21*，81-88．https://doi.org/10.24683/uekusat.21.0_81

山本 淳一・澁谷 尚樹（2009）．エビデンスにもとづいた発達障害支援――応用行動分析学の貢献――　行動分析学研究，*23*，46-70．https://doi.org/10.24456/jjba.23.1_46

―2024.1.10 受稿　2024.1.31 受理―

神戸学院大学心理学研究 2024 年　第 6 巻 第 2 号　pp.77-89

研 究 報 告
Research Report
（査読なし）

支援者側から見た通級指導教室の役割と今後の課題について

關川 ひより　神戸学院大学心理学研究科　　難波　愛　神戸学院大学心理学部
竹田　剛　神戸学院大学心理学部

The role and specific support measures of special needs classrooms in Kobe city: A perspective from teachers

Hiyori Sekikawa（*Graduate School of Psychology, Kobe Gakuin University*）
Ai Namba（*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*）
Tsuyoshi Takeda（*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*）

神戸市では，全国に先駆けて独自の通級指導教室体制で支援を行っている。しかし，神戸市の通級指導教室での支援内容についての研究はなされていない。本研究では，神戸市の通級指導教室での支援内容や役割，今後の課題について具体的・実証的に明らかにすることを目的とし，神戸市内の通級指導教員としての勤務経験を持つ 3 名を対象に，作成したインタビューガイドを用いて半構造化面接を実施した。その後, 逐語記録を作成し, KJ法を用いて整理, 分析を行った。本研究の結果, インタビューでの 5 つの質問に対して，ラベルからそれぞれ 5 ～ 7 のカテゴリーに分類することができた。通級指導教室では，生きづらさや障害特性に応じた支援がなされており,「そだちとこころの教室」では，自尊感情や自己効力感を育むための支援,「きこえとことばの教室」では，障害特性に応じた支援が重視されていることが示された。

Key words: special needs classrooms, language disorder, emotional disorder, Kobe city

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2024, Vol.6, No.2, pp.77-89

問題と目的

問題の背景

近年，義務教育段階の全児童生徒数は減少傾向にある一方で，特別指導教育を必要とする児童生徒数は増加傾向にある。平成 29 年度には，義務教育段階の全児童生徒数 989 万人に対して，特別支援学校：約 141,900 人（平成 19 年度の約 1.3 倍），特別支援学級：約 235,500 人（平成 19 年度の約 2.1 倍），通級による指導:約 109,000 人（平成 19 年度の約 2.4 倍）と，特別支援学級・通級による指導においては，平成 19 年度と比較して，2 倍以上もの子供たちが支援を必要としているのが現状である（文部科学省，2019）。

また，上記で最も増加が見られた通級による指導（以下，通級指導と記載）について，令和元年 5 月に文部科学省は国公私立小学校，中学校及び高等学校を対象に，通級指導を受けている児童生徒数の調査を行った。国公私立の小・中・高等学校において通級指導を受けている児童生徒数は 134,185 名（前年度 123,185）であり，11,090 名増加していた。障害種別では，言語障害が 937 名，自閉症が 1,460 名，情緒障害が 3,083 名，学習障害が 2,096 名，注意欠陥多動性障害（ADHD）が, 3,409 名の増加が見られた（文部科学省，2019）。

このように，知的障害だけではなく，情緒障害や学習障害といった様々な困難を抱える児童生徒の支援を行う通級指導の需要が高まっている。また，発達障害への社会の関心の高まりや研究が進んできて

いることも関係し，相談件数が急激に増加していることが挙げられ，言語や聴覚の困難の他に発達障害を併せ持つ場合も多いとされる（中尾他，2008）。

通級指導について

全国特別支援学級設置学校長協会（2012）によると，通級指導とは，大部分の授業を通常の学級で受けながら，一部，障害に応じた特別な指導を通級指導教室で受けることにより，障害による学習または生活上の困難を改善し，または克服するため，特別支援学校学指導要領の「自立活動」に相当する指導をいう。小学校，中学校，中等教育学校前期課程の通常の学級に在籍する比較的軽度の障害のある児童生徒に対し，その障害の状態に応じて，週に 1 時間～ 8 時間（単位時間）の範囲において特別の指導を行う教育形態である。また，学習障害と注意欠陥多動性障害者については，月に 1 時間～週 8 時間とされており，「特別の教育課程」による場合は，通級による指導を受けた授業を在籍する小・中学校等における教育課程の係る授業と「みなす」ことができるとしている。さらに，自立活動に加え，特に必要のあるときは，障害の状態に応じて各教科の内容を補充するための特別指導（教科指導の補充）を含むものとし，年間 35 単位時間から 280 単位時間までを標準とするとされている。ただし，学習障害者，注意欠陥多動性障害者については，年間 10 単位時間から 280 単位時間までを標準とするとされている。指導形態としては，児童生徒が在籍する学校において指導を受ける自校通級，他の学校に通級し指導を受ける他校通級，通級による指導の担当教員が該当する児童生徒のいる学校に赴き，または複数の学校を巡回して指導を行う巡回指導の 3 つの形態が取られている（全国特別支援学級設置学校長協会，2012）。

対象となる児童生徒は，言語障害，自閉症，情緒障害，弱視，難聴，学習障害，注意欠陥多動性障害，四肢不自由，病弱及び身体虚弱の児童生徒であり，通常の学級での学習におおむね参加でき，一部特別な指導を必要とする程度のものである（前川，2013）。平成 25 年 10 月 4 日に交付された 25 文科初第 756 号「障害のある児童生徒に対する早期からに一貫した支援について」において，通級指導の対象者について具体的に述べられている。表 1 に示す。

先行研究において，通級指導教室では，言語性学習障害に対して，教科書の写本や挿絵，フラッシュカードや絵カードなど視覚教材を用いた言語育成の支援が行われ，支援の結果，言語学習能力診断検査（ITPA 検査）において言語学習年齢が 1 歳 8 ヶ月伸びたということが明らかとなっている（多和田・平田，2008）。また，場面緘黙症の児童に対して，小集団でのコミュニケーションプログラムや運動，個別指導が行われ，指導当初には出来なかった口頭での返答ができるようになり，初めての活動でも説明を聞き，抵抗せず参加ができるようになったということも明らかとなっている。さらに，長田･稲葉（2022）では，自閉スペクトラム症の児童に対して，心理劇的アプローチを用いることで，集団生活への参加意欲の高揚や仲間意識の芽生えといった社会性の形成やこだわりの減少が見られるということも明らかとなっており，通級指導教室での支援は様々な困難を持つ児童生徒に対して非常に有意なものであるといえる。

神戸市の通級指導について

神戸市では，平成 5 年に学校教育法施行規則の一部改正により，通級指導が制度化される 30 年近く前の昭和 41 年に，言語障害通級指導教室を小学校に，昭和 46 年に幼稚園に，情緒障害通級指導教室を昭和 46 年に小中学校と全国に先駆けて設置し，神戸市独自の通級指導スタイルで通級指導を実施してきた（神戸市通級指導検討委員会，2018）。

現在では，「そだちとこころの教室」（自閉症・情緒障害）を 6 教室，「きこえとことばの教室」（言語障害・難聴）を 8 教室，計 14 教室が設置され，支援

表 1
通級指導教室対象者

障害の種類	障害の程度
言語障害者	口蓋裂，構音器官のまひ等気質的又は機能的な構音障害のある者，吃音等話言葉におけるリズムの障害のある者，話す，聞く等言語機能の基礎的事項に発達の遅れがある者，その他これに準じる者
自閉症者	自閉症またはそれに類する者
情緒障害者	主として心理的な要因による選択性かん黙等がある者
弱視者	拡大鏡等の使用によっても通常の文字，図形等の視覚による認識が困難な程度の者
難聴者	補聴器等の使用によっても通常の話声を理解することが困難な程度の者
学習障害者	全般的な知的発達には遅れはないが，聞く，話す，読む，書く，計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す者
注意欠陥多動性障害者	年齢又は発達に不釣り合いな注意力，又は衝動性･多動性が認められ，社会的な活動や学業の機能に支障をきたす者

前川 (2013) より作成。

が行われている。また，平成 30 年度には竜が台教室に高校通級の担当教員も配置されるようになり，幼稚園から高等学校までの幅広く切れ目のない支援体制が整えられている（神戸市通級指導検討委員会，2018）。神戸市の通級指導教室の設置場所について図 1 に示す。

国により対象とされている障害を持つ児童生徒だけではなく，学校に行きたがらない児童生徒や嫌なことがあると頭痛や腹痛を訴える児童生徒なども受け入れており，不安などから心理的な安定を図るための支援も行われており，間口を広くして児童生徒を支援している。

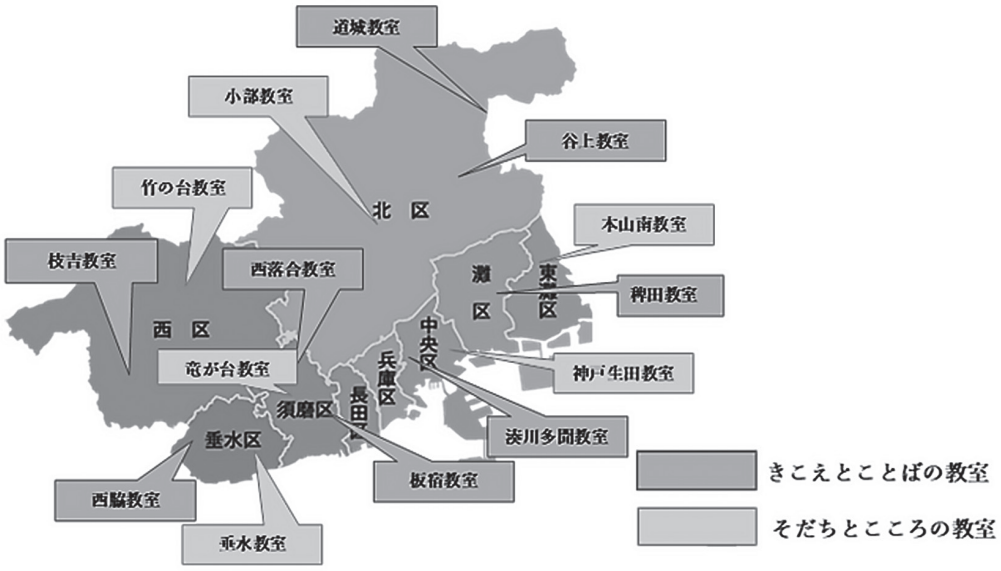
他県（政令指定都市）と比較すると，神戸市では，他県に比べて他校通級の割合が 82.3％と非常に高い。一方で，自校通級の割合は 17.1％と低く，巡回指導にいたっては，他県と同様非常に低い割合である（神戸市通級指導検討委員会，2018）。神戸市と他県との比較について表 2 に示す。

研究の目的

神戸市では，全国に先駆けて通級指導教室を設置し，独自の通級指導スタイルで幼稚園から高等学校まで幅広く切れ目のない支援を行ってきた。また，通級指導の対象ではない，心理的な困難を抱える児童生徒も受け入れており，間口を広くし支援を行っている。しかし，神戸市の通級指導についての概要や制度に関すること，その課題点についてはよく見られるものの，上記で述べたような特色を持つ神戸市による通級指導の具体的内容についての研究がなされていない。通級指導において先駆者である神戸市の通級指導について研究し，通級指導内容やその意義について明らかとし，また，新たな課題を見出すことで，さらに通級指導をより良いものとし，全国へ神戸市の特色を伝え，見本となるように改善できるのではないかと考える。

したがって本研究では，神戸市の通級指導教室で支援を行っている教員に対して，通級指導教室で実施される支援内容や事例について面接法を用いて聞き取りをすることで，通級指導の役割や今後改善が

図 1
神戸市の通級指導教室設置箇所



教育委員会事務局学校教育部特別支援教育課（2018）を参考に作成。

表 2
政令指定都市の自校通級・他校通級・巡回相談の状況（平成 29 年度）（％）

	都市名												
	神戸	仙台	さいたま	千葉	新潟	静岡	浜松	名古屋	京都	大阪	堺	岡山	広島
自校通級	17.1	40.7	21.2	22.8	32.0	17.8	34.3	74.4	69.1	35.2	71.9	16.6	29.8
他校通級	82.3	59.3	78.8	73.1	68.0	74.8	65.7	25.3	16.0	64.8	28.1	83.4	70.2
巡回指導	0.6	0.0	0.0	4.1	0.0	7.4	0.0	0.3	14.8	0.0	0.0	0.0	0.0

（札幌，川崎，横浜，相模原，北九州，福岡，熊本は県の総括集計としており，回答なし）　神戸市通級指導検討委員会（2018）より作成。

必要な課題について「現場の声」から具体的・実証的に明らかとすることを目的とする。

本研究の仮説は以下の通りである。

1. 神戸市の通級指導教室においてさまざまな困難を抱える児童生徒を支援するにあたり，教科指導や自立指導だけではなく，児童生徒の趣味や得意なことなども取り入れ，通級指導教室や教員に対する安心感につながる支援を行っているのではないか。
2. さまざまな困難を抱える児童生徒を支援するにあたり，児童生徒の学校や保護者，心理職との連携に難しさを感じる通級指導教員もいるのではないか。
3. 通級指導教室の今後の課題として，通級指導の需要の高まりから，教員の人員不足が挙げられるのではないか。

研究方法

調査対象者

神戸市内の通級指導教室の指導員として働いている教員 2 名（50 歳代女性，通級指導教員歴 8 年・50 歳代女性，通級指導教員 20 年以上），過去に働いていたことのある教員 1 名（50 歳代女性，通級指導教員 10 年）を調査対象者とした。

図 2
使用したインタビューガイド

インタビューガイド

イントロダクション

この研究では、通級指導に従事されている教員の方からお話を聞くことで、通級指導教室でどのような支援がなされているのかを明らかにし、そこから通級指導の役割や今後の課題について「現場の声」から検討することを目的としています。
ぜひ、貴重な話をお伺いできたらと思っております。

主要部分

（支援について）

1. 通級指導に従事されてどのくらい経ちますか？また指導員になったきっかけはどのようなものがありますか？

2. 通級指導には、障害を持っていたり、心の問題を抱えていたり様々な困りごとを抱えている児童生徒が通室していると思います。印象に残っている事例について、①その児童生徒が抱えていた問題②その問題についての見立て③支援内容④支援による変化以上の内容で話せる範囲で結構ですので具体的にお聞かせ下さい。

（事例1）
（事例2）
（事例3）

3. 支援の中で、児童生徒との関わり方や支援策を考える中で、教員の立場として課題やむずかしさはありましたか？または工夫や心がけていることはありますか？

4. 通級指導教室で支援を日々されている中で、通級指導がより良いものとなるように改善して欲しい点や課題となる点はありますか？

締めくくり

（役割）

5. 最後に、通級指導について様々なお話を聞かせて頂きましたが、このインタビューや今までの支援から通級指導教室の意義・役割とはどういうものであると思いますか？

調査方法

半構造化面接法によるインタビューを行い，逐語記録を作成した。

材料・装置

半構造化面接の際には，インタビューガイドを用いながら面接を進めた。また，面接時には，対象者の許可を得られた場合は録音するために録音機を用いた。使用したインタビューガイドを図 2 に示す。

分析方法

作成した逐語記録を川喜田（1967）を参考にし，KJ 法で整理し，通級指導教室の役割や現状，課題についてまとめていった。

倫理的配慮

本研究は，「神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員会」により承認を受けた（SP22 - 4）。インタビューの同意を得るため，「研究内容の説明と協力のご依頼」の書類を読んで頂き，研究内容やインタビューを行う理由を説明した。同意が得られた場合は，同意書（筆者用と協力者の控え）の「説明を受け，研究内容に同意する」という内容の文章にチェックマークを頂き，氏名とその日の日付けを記入してもらった。さらに，筆者・協力者の印鑑で割印を押し，片方の同意書は，対象者に保管するよう伝え，渡し，もう片方は筆者が保管した。また，調査実施で得られた音源ファイルには，個人情報は記載せず，難波研究室の鍵のかかるキャビネットで厳重に保管した。データはインターネット環境から切り離されたコンピューターの外部ハードディスクに保管し，研究終了後は速やかに廃棄した。

結　果

通級指導教室での支援事例

インタビューを通して，「そだちとこころの教室」での 5 つの事例，「きこえと言葉の教室」での 2 つの事例，計 7 つの事例から通級指導教室で実施されている支援について明らかにすることができた。以下の事例は，個人情報を削除し，記載している。

事例①（中学生）

他生徒からの嫌がらせによる学校への不適応から通室に至った。支援内容としては，活動を取り入れるというよりも，担当教員との会話を通して生徒の困りごとの改善や内面的な元気を取り戻していくということが話された。生徒との会話を中心とした支援を通して，生徒自身が自らの特性は，治るものではないため受けとめて生きて行かなければという心境の変化を生むことができたという。また，通室当初は，「自分は何もできない，何をしても無理だ。」といった自身に対する否定的な気持ちも強く，進路決定に対しても後ろ向きであったが，支援を続けていく中で，興味を持てる学科を見つけることができ，希望する進路先に進み，「自分として生きていく」という所を見つけ，卒業することができた。

〈事例についての小考察〉

通級指導教室は，カウンセリング教室ではないが，担当教員との対話を繰り返していくことで，生徒自らの力で，自身の特性を受け入れ，前を向いていくことができたと考えられた。

事例②（中学生）

強い不安による学校への不適応があり，それにより保健室登校を余儀なくされていたため，通室に至った。支援内容としては，通級指導教室での支援に生徒の趣味関連のものを多く取り入れ，生徒自身の好きなことで誰かの役に立つという経験をさせるという支援内容が語られた。このような生徒が好きなことを活かす支援を通して，生徒の内面的な部分はどんどん元気を取り戻し，最終的には，不適応を起こしていた学校の教員への感謝の気持ちを持つことができた。

〈事例についての小考察〉

生徒自身の好きなことを支援に活かし，さらに好きなことを活かして誰かの役に立つことで，人の役に立つという喜びが自己肯定感や自己効力感に繋がり，生徒の内面的な元気を取り戻すことができたと考えられた。

事例③（中学生）

強い自閉傾向による二次障害により通室に至った。支援内容としては，生徒が好きな絵を描くことや，製作も通級指導の時間に行っていたことが話された。また，他者との会話が苦手な生徒が，他者と話すという目標を立て，達成に向けて，話したい内容を書き起こし，言葉を選び，練習を行ったことも語られ，目標を達成できたと語られた。他者と話すという目標に対する支援が行われたことで，目標を達成できたという喜びを生徒は大いに感じることができたという。一方，医療・福祉的な支援が必要不可欠で，中学校を卒業した後も支援は必要であり，最終的には，卒業後も支援を受けられるよう福祉の方に繋いだということが話された。

〈事例についての小考察〉

本事例も生徒が好きなことを活かし喜びを感じられるような活動が行われていた。しかし，医療・福祉的な支援を必要にしている事例についても通級指導教室で受け入れられていることに対しては，担当教員の負担が大きいと考えられ，見直さなければならないのではないかと考えられた。

事例④（中学生）

中学校の雰囲気について行けず，その理由を教員のせいにする一方で，自身の周囲との違いに気づいたことから深く悩み，問題行動も増えて行き，通室に至った。支援内容としては，まずは生徒が好きなことを見つけ，それを長く続けていくことで達成感を得られる支援を行ったと語られた。その中で，生徒が好きで続けていくことができるものとして「工作」を見つけることができ，「工作」を用いた支援を行ったことで，自ら設計図を描き，一から組み立て，色付けまでを行い，飽きずに最後まで作り上げ，大きな達成感を得ることができたということが話された。工作を用いた支援を行って以降，生徒の悩みから生じていた問題行動は落ち着き，さらに，学校での問題を自身の特性があったからというように，自己理解ができるようになっていたと語られた。また，自己理解が進んだことから，友人とも遊びにいくことができ，卒業記念として作成したおもちゃを通級指導教室に来ている他児に使わせてあげたいと，今まで他者を思いやる余裕のなかった生徒が他者を思いやる言葉を発する様子も見られるようになったという。本事例の生徒は，最終的に好きなことを活かせる進路の選択を行い，卒業していくことができた。

〈事例についての小考察〉

生徒は自身の得意なことを見つけ，継続していくことで，達成感や自信を得ることができ，精神的は安定や自己理解に繋げることができたのではないかと考えられた。また，得意なことを見つけることは，今後の人生における決定にも大きく影響を与えていると考えられた。

事例⑤（中学生）

小学生の頃から通室していたが，中学校でも集団への不適応から不登校に陥り，通室の継続に至った。本事例の生徒は，卒業後の進路を「自身のしたいことを優先する」と決めたことから，高等学校への進学は優先しなかった。そのため，それに応じた支援を実施することとなった。自身のしたいことを優先し，進学を優先しないということに対して周囲から理解を得ることは難しく，まずは生徒自身の決定を受け入れ，応援していくことが支援に求められているとし，生徒自身の気持ちを尊重することに努めたと語られた。現在は，通級指導教室の活動時間では，卒業記念作品の製作を行っているという。また，不登校の子供たちが集まる趣味サークルを紹介し，卒業後の家庭以外での居場所ができるような繋がりを作ることの支援を行っていると話された。一方で，卒業後に勉強をしたくなった時や困った時の動き方や相談先について卒業までに伝えていくことも必要であり，今後行っていく支援として話された。現在は，中学校卒業後の生活リズムの組み立てを行い，新生活に備え，準備をしているという。

〈事例についての小考察〉

本事例は，卒業後の進路を自身のしたいことを優先し，進学は優先しないという一般的ではあまりない周囲からも理解を得にくい事例であると感じられた。一方で，一般的な型に当てはめることがその生徒にとっては，逆に苦しく生きづらさを感じ，自身の生き方を否定してしまうことに繋がっていたとも考えられた。そのため，生徒の気持ちと周囲の考え両方を理解し，尊重しながら生徒とその周囲との連携から支援を進めていく能力が教員に求められていると考えられた。

事例⑥（幼児）

難聴による，コミュニケーションの難しさ，語彙の少なさから通室に至った支援内容としては，児童の耳の特徴について伝えたり，幼児には聞こえないが一般的には聞こえている音を聞かせたりすることで，自身の耳を受け入れられるよう促していくことが語られた。また，言葉遊びやクイズ，しりとりなどの遊びの中で，聞き間違いや覚え間違っている言葉が出てきたら文字に起こして伝え，しっかり聞くことの意識付けを行い，間違っていると思うたびに書いて確認するという癖をつけるための支援も行っていることが話された。さらに，補聴器を着ける必要があったため，補聴器を自分の体の一部として大事に扱うことができるよう，補聴器に名前を付けて毎日手入れをし，感謝の気持ちを持って扱うことができるような意識付けを行っていたことも語られた。

〈事例についての小考察〉

難聴児に対するこのような支援を行うことで，自身の障害受容に繋がり，その特性を抱えながら集団に適応していくための術を身に付けていくことができたのではないかと考えられた。

事例⑦（幼児）

吃音により通室に至った。支援内容としては，教員との親密な関係性が築かれていたことから幼児自身が体の違和感や吃音の原因を知りたいと打ち明け，その気持ちを尊重し，吃音を専門とする医者との面会を両親と相談して決定した。また，対話の中で幼児がしたい活動を試行錯誤しながら行っていったことが語られた。自身の体への違和感やその原因を知りたかった幼児は，医者との面会を通して，自身は病気ではなく，そういった話のリズムであることを理解し，安心して学校にも通うことができていると話された。

〈事例についての小考察〉

吃音を抱えた幼児に対する支援を行うことで，難聴児の事例と同じように自身の障害を受け入れ，集団に適応していくための術を身に付けていくことができたのではないかと考えられた。また，自身の身体に対する疑問を支援者側が受け止め，医者を通し

て回答を得ることができたことから，安心感や支援者への信頼を築くことにも繋がったのではないかと考えられた。

質問項目のKJ法を用いた分類結果

インタビューで得られた質問に対する回答について，心理学を専門とする教員（第二著者）と第一著者の2人で話し合いKJ法を用いて分類を行った。

教員の通級指導に携わったきっかけについて，KJ法で分類した結果を表3に示す。「一般校での支援の難しさ」「大学院での学びを活かしたい」「心理学への興味」「通級指導への興味」「子育てしたスキルを活かしたい」という5つのカテゴリーに分類することができた。

次に，通級指教室での支援内容について，KJ法で分類した結果を表4に示す。「児童生徒の好きなことを用いた支援」「障害特性に応じた支援」「対話を通した支援」「障害受容の支援」「主体性の尊重」「卒業後の連携先の紹介」「学校や外部機関への繋ぎ」という7つのカテゴリーに分類することができた。

次に，教員の立場として通級指導での支援に関する難しさや工夫点について，KJ法で分類した結果を表5に示す。「学校現場との連携の難しさ」「生徒一人ひとりに合った支援を見つける難しさ」「連携を深めるための工夫」「生徒の生きて行く力を身に付けるための工夫」「生徒が好きなことを見つけるための工夫」という5つのカテゴリーに分類することができた。

次に，通級指導の体制に関する課題や改善点について，KJ法で分類した結果を表6に示す。「教室を利用する生徒の増加に対する教員の少なさ」「学校現場での理解の得にくさ」「卒業後の連携先が不明確」「教員の専門性」「通級指導（特に拠点校）を増やす」「学校現場の通級指導に関しての周知の不十分さ」の6つのカテゴリーに分類することができた。

最後に，通級指導教室の役割・意義について，KJ法で分類した結果を表7に示す。「生きづらさ・特性による二次障害で苦しむ子供たちへの支援」「自立活動を通して生きて行く力を養う場所」「学校生活への適応を支援する場所」「学校教員が支援していることに意義がある」「支援者自身の自己研鑽の場所」「学校や外部機関への連携や広報活動」の6つのカテゴリーに分類することができた。

表3
教員の通級指導に携わったきっかけ

カテゴリ	ラベル
一般校での支援の難しさ	務めていた中学校にしんどさが深い子がいた。 務めていた中学校に理解してあげられない子がいた。 家庭の問題から学校でトラブルを起こす生徒の担任をしていた時，周りの対応に矛盾を感じた。 しんどいんと毎日訴えてくる子とずっと放課後話をしたんだけれど，どう救っていいだろうって悩んでいた。 一対多の中で救えないと思った。 学校に行きづらい生徒の担任であるのに，その子が来る時間に授業が全部入ってるので会ってあげられない。 一般校だとなんとか助けたいなと思ってても時間的余裕ない。 何か集団を動かすってことも正しいけれども，個別に関わるって大事かなと思った。 生徒との関わりを大切にできる場所で働きたいと感じた。
大学院での学びを活かしたい	大学院で学んだことが一般校では使えないと感じた。 大学院で学んだ後，こだわりの強い生徒に対しての指導がすごくうまくいった。
心理学への興味	心理の勉強しようと思った。
通級指導への興味	知り合いに通級指導教室の存在を教えてもらい，興味を持った。
子育てしたスキルを活かしたい	個別に関わるとお母さんとの密着度も高くなる。家庭に一度入って子育てをして地域とのネットワークを作っていったスキルを生かされるのは通級指導教室かなと思った。 自分が子育てしてみて，一対一で絡むことがすごく大事だなと思った。

表 4
通級指導教室での支援内容

カテゴリー	ラベル
児童生徒の好きなことを用いた支援	趣味関連のものを取り入れる。 生徒と一緒に制作する。 大好きなものの絵を書く。 好きなものの製作をする。 書きたいこと（文章など）を書かせてみる 設計図から書き、のこぎりなどを作って工作をする 卒業記念の作品を作る。 プレゼントしたい絵を作成する。 漫画を1冊書き上げる。 青春の手伝い。
障害特性に応じた支援	話したい言葉をカードに書き出し，劇のようにシミュレーションする。 言葉遊び。 クイズを出し合う。 しりとり遊び。 音の数当て遊び。 あそびの中で聞き間違ってたり覚え間違っている言葉が出てきたら文字に起こして伝える。 しっかり聞くことの意識付け，それとちょっと間違ってるかなと思って書いてみる癖っていうのを入れます。 スモールステップで何かやって物にして，達成感に繋げよっていうことを提案。
対話を通した支援	本当に生徒が望んでるものを出させたいっていうのがすごくあったので，2人でやり取りをするっていう心のやり取り。 あんまりいろんな活動ゲームしたりとかせずに，ほとんどお話。 親子の悩みをそれぞれ聞く。
障害受容の支援	自分の耳を受け入れさせる。 補聴器の大切さを伝える。 その子の耳の特徴を伝える。 耳の構造がこうなっているからあなたにはこの音が聞こえないけれど，先生には聞こえると伝える，その音を実際に聞かせる。 補聴器を自分の体の一部として大事に扱うっていうことをさせる。
主体性の尊重	ゲームをするための備品を選んでもらう 生徒が悩んで出した答えを尊重してあげる。 一緒にアイデアを出しながらそれをする。 その子が決めた進路を応援する。
卒業後の連携先の紹介	支援が必要な生徒を福祉の方に繋げた。 今後，勉強したくなったり，困った時にどう動いたら良いのか，どこへ相談したら良いのかを伝えていく。
学校や外部機関への繋ぎ	趣味のサークルを紹介。 生徒と生徒の関係者が一緒に活動できるようお願いする。 両親と相談して，専門機関に相談を繋げる。

表 5
教員の立場として通級指導教室での支援に関する難しさや工夫点

カテゴリ	ラベル
学校現場との連携の難しさ	学校の先生が忙しいので連携が難しい。立ち話で帰らないと行けない学校とかもあり，十分に生徒についての話ができない。 通級に行っているから大丈夫だと思い，あまり協力的ではない先生もいる。
生徒一人ひとりに合った支援を見つける難しさ	全部やってきたことがストックにはならない。 やっぱり1人1人全員違う。違うからねこの子にとってのプラス材料を考えるのはすごく難しい。そこが見つけられたときにはすっと行くので，そこには苦労もあるんだけど大事なこと。
連携を深めるための工夫	その子の通級の日じゃなくても先生とお話したいって言って保護者だけ来られる日もあったりするが，保護者の状態を受け入れ，関わっていた。 保護者は子どものために一生懸命やってきているので保護者に対して否定はしない。 保護者からの電話は時間は区切って。電話やったら10分ねと伝えて。でも，必ずかけてきたときには，聞こうかなって思ったりして。 所属園，私，お母さん，家庭やね。その三者で私は連絡帳を交換している。 お母さんもちょっと家の様子を書いて，書かなくっても読むし，毎回これ行ってきましたって子供が担任に渡すんですよ。子供と担任が話すきっかけ，子供と保護者と先生が仲良くなるきっかけになる。 先生自身も通級ってこんなことしてるのっていうことも気付いてくださる。 その子がこんなことが苦手やってんなっていうふうにわかってくださる。保育室から出ていたのはいっぱい人がいるから嫌やったんやなとか，大きな音が嫌やったんかなとか，そんなことがわかってくる。ヒントになってくるから，それを集団の中で使ってもらう。
生徒の生きて行く力を身に付けるための工夫	やっぱり生きていく力をつけて行かなあかんので。そしたら私って僕ってこういう得意があるよね，これ好きだよねっていうところに行くのが一番やっぱりそう，いいんだって最終的には思えたかな。 ただ苦手に目を向けない。苦手は自分がある程度生きていけるとかこういう力あるよっていう納得があって，始めていられるものであって，そこがないのにそこばっかりいったら自尊心下がるばっかり。 いくらここでうまくいっても駄目だってこと。それが学校とか社会の中で生かせるようにしないといけない。っていうところがやっぱりすごく一番難しいところではある
生徒が好きなことを見つけるための工夫	絵を飾ることでそこに引っかかって，やってみたいって興味を持つ子もいる。やっぱり表現，コミュニケーションって言葉でやるのが苦手な子も多いから，そうなったときに絵がそういうツールになってる。

表 6
通級指導教室の体制に関する課題や改善点

カテゴリー	ラベル
教室を利用する生徒の増加に対する教員の少なさ	もうちょっと先生とか増えたらって思いますよね。 1人とじっくり関わることもを大事にしたい。13人の定数制であっても13人以上を担当しなければならないので、厳しいところがある。 中学校の教員自体の数が減っている中で，やっぱり特別支援って後回しにされてしまうのかなっていうふうに思ってしまうときもある。
学校現場での理解の得にくさ	理解を求める作業っていうのはすごくいるんだけど，それは一担当者だけじゃなくて，やっぱりもっと委員会であるとかもっと上の立場でもしてもらう必要があると思う。 生徒の求めるやりやすさをここで一緒やったりはできるんだけれど実際それを学校で使ってみましょうって言った時にハードルがある。 社会，学校でやってもらうっていうときにどれだけ理解してもらえるかっていうところにはまだまだしんどさがあるかな。
卒業後の連携先が不明確	医療であるとか福祉とかそういうところで，ここ出た子たちでも，通級のあるところに行く子はいいけど，そうじゃない子たちはどうやったらいいんだろうというのは探り探り。もっと明らかになったらいいなっていうふう思いますね。 いろんな機関との連携っていうところは自分で開拓して行かないとできないところがある。
教員の専門性	担当者の専門性。 どこの学校にもニーズがあるか言うたらそうでもないかもしれないので，逆に，通級行く子がいないからと専門性がある先生が全然違う仕事をしたりっていうのも違う。その辺りの整備はしていく必要がある。
通級指導教室（特に拠点校）を増やす	中学生が行ける教室も増えてきてはいるが，基本的には，拠点校を増やすべき。 自校通級だから行きにくいという子も居ると思うので，拠点校があって，選べるようにしたらいいかなって思う。 中学生が行ける場所が少なかったので，本当に遠い子来られない。
学校現場の通級指導に関しての周知の不十分さ	SCと通級の違いを知らない方がいることが実際まだまだある。だからここに繋げてくれる人が通級を理解してほしい。 通級と適応指導教室の違いを知らない方もいる。

表 7
通級指導教室の役割・意義

カテゴリー	ラベル
生きづらさ・特性による二次障害で苦しむ子供たちへの支援	その子が持ってる力がうまく使えなくてみんなしんどい。そのしんどさを1人で悩んで1人で考えてポジティブ思考できる子っていない。ポジティブの押し売りではなく，その子のポジティブに行けるようにする場かな。 今しんどいかもしれないけれど，考え方を変えたら良い。みたいな場なんかなというふうに思う。 二次的なことに対する場かなっていう気はするんですよ。 幼児さんのときでも，そのお母さんと一緒に考えるとか言う場なんかなって。 生きづらくない人は来ないと思っていて，生きづらさがすぐに解決される子も居るけども何年もかかる子も居るかなって。 集団の中ではどうしてもできない，うん，たくさんお相手にしている先生ができるんやったらそれでいいと思うんですけど，できないよっていうような関わりをしないと行けない場合にはやっぱ通級っていうものがあった方がいいのかな。
自立活動を通して生きて行く力を養う場所	通級指導というのは教員がする。やっぱり教育でないとね。自立活動なので。 生きていく力をつける。そこにもその本人の主体性がないと自立活動にはならない。 苦手を何とかしようっていうのも，本人がそうしたいと思ったらなんとかなる。だけど思ってないのに，あの指導してもそれは力にはならない感じはあるので，本人の今こうしたいああしたいっていうレベルとこの指導が合わないといけない。その子のこの発達していくの流れの今どこっていうとこと指導が合うって大事。 困ってる子供たちが生きていくお手伝いをする。強く生きていくお手伝いをするっていう役割だとは思います。
学校生活への適応を支援する場所	小学校では，言語や，ASD，ADHDへのアプローチが多いだから学校生活への適応で，多動な子には学校の先生とも相談しながらこうしたらうまくいくんじゃないかとかっていうね。 LDは課題がすごくあると思って，ここでどうやったら楽に勉強できるかっていうことを見つけたりするんだよね。 ベースはやっぱり私はここ止まり木やから。返すためのところ。医療機関は返すためのとこじゃない。 集団に帰すべきところだから，ここで満足したらいけないんですよ。ここで抱え込んだらいけない。 ここってやっぱり個別が中心なんですよ。なので，個別でねその子とどっぷり使うってことも良いんだけど，集団に帰すべきところだと思います。
学校の教員が支援していること自体に意義がある	教員がここでやっているということのメリットを先生たちを自覚してやっていくために勉強しないといけないしっていうのは思います。教員の先生がその現場に実際触れてて，それを知ってて，そこに返すためにいるっていう。そこを忘れてはいけない。 直接学校とか幼稚園の担任には言えなくっても，ここ中間地点だから言いやすいってこともあるからね，人を増やせばいいっていうことはない。けれど，守って行ってほしいと思うのは，学校の教員がやっているっていうところはやっぱり私は変えて欲しくない。
支援者自身の自己研鑽の場所	教育委員会の研修もあるけども，それだけでは十分ではないので、自分でいろんなところのネットワークを広げて勉強に行くっていうのは絶対必要ですね。 みんな先生なんだから所属校があるわけですよね。そこに行って今の集団の様子を必ず肌で感じること大事。そこがずれてくると，どのようにこの子を返していいかが見えなくなってしまう。 いろいろ勉強して，こういう方法がいいっていうのがあってもその子に合わなかったら違うと思うのでやっぱり1人1人に向き合って，その子に合ったことを一緒に考えてあげる。 今の子ってこんな感じなんだな，今の先生ってこういうことが大事に思ってるんだなということを感じているのはすごく大事かなと思う。
学校や外部機関への連携や広報活動	生徒指導の先生は繋げるっていうかね役割を果たしているからそこに行って，こういう役割をしますっていうことを全部喋りに行ってます。そういう何か広報活動じゃないけれども。してる先生としてない先生はいると思うけれども，そこをしっかり分かってもらわないことには，新しい支援にならないと思ってるから，自分の担当区は全部行く。 私がすべき仕事なのかわかんないけれども，例えば生徒指導の先生の集まりに行く。

考　察

通級指導教室に通室する子どもの特徴

本研究では，神戸市の通級指導教室での支援内容や役割，今後の課題について研究を行った。

本研究のインタビュー結果から，通級指導教室には，生徒自身の特性による集団生活への不適応やその特性による二次障害で苦しむ幼児や児童，生徒が通室していることが明らかとなった。「そだちとこころの教室」では，広汎性発達障害や強い自閉傾向，注意が持続しない，他者とのコミュニケーションが苦手などの特性を持ち，その特性による二次障害での苦しみや学校不適応，不登校をきっかけに児童生徒が通室していることが示された。一方，「きこえとことばの教室」では，難聴や吃音といった障害を持つ幼児や児童が，難聴によるコミュニケーションの難しさや語彙の少なさ，吃音による自身の身体への違和感をきっかけに通室していることが示された。「そだちとこころの教室」では，生きづらさや不安感，苦しさなどメンタル面での困難を抱えた児童生徒が通室している一方で，「きこえとことばの教室」では，難聴や吃音などの身体機能の障害を抱えた幼児や児童がその障害特性を抱えながら集団へ適応するために通室しているという点では各教室に通室する子どもの特徴に違いが見られた。

通級指導教室での支援

「そだちとこころの教室」では，児童生徒の好きなことや得意なことを活かし，それらを継続していくことで，児童生徒がやりがいを感じ，自尊感情や自己効力感を育んでいくことに重きを置いており，児童生徒の好きなことや得意なことで他者の役に立つ経験や継続したことによる達成感を味わうことで「心の元気を取り戻す」ための支援が行われていることが示された。一方，「きこえとことばの教室」では，障害特性に応じた支援に重きが置かれており，難聴や吃音といった特性を持つ幼児や児童に対して，自身の身体にはどのような特徴があり，どのようにしていけば集団生活へ適応していけるのかについて方法を見つけ，障害を受容していくための支援が行われていることが示された。また，読み書きなど障害特性により困難をきたしている部分について，改善するために遊びや会話を通した実践的な支援が行われていることについても示唆された。

以上から，「そだちとこころの教室」では，「きこえとことばの教室」でも同じような支援ももちろんされているが，集団生活へ適応していくというよりも，児童生徒の障害特性に応じて「自分らしさ」が何なのか見つけ，それを活かして生きづらさを改善し，自分らしく生きて行くための術を探すことを重視した支援が行われており，メンタル面への支援が重視されていると考えられた。「きこえとことばの教室」では，障害特性を受け入れ，それらと上手く付き合うための術を身に付けていくための練習場所であり，いずれは集団へ返すための「止まり木」のようであると考えられた。さらに，今回インタビューをさせていただいた教室は，幼児，小学生が利用する教室であったため，我が子の障害特性に対する不安感や悩みを抱える保護者への相談対応や，保護者・所属園との距離感の近い連携が主に中学生が在籍する「そだちとこころの教室」よりも重点的になされているのではないかと思われた。

最後に，「そだちとこころの教室」「きこえとことばの教室」での支援は，幼児や児童，生徒がしたいことや提案したことを尊重して支援に当たっており，また，卒業後の連携先や外部のサークル，学校や病院などへ繋いでおり，「連携」という点に共通性が見られた。

通級指導教室での支援に携わる教員の共通性

通級指導教室で支援に従事している教員は，一般校の一対多という状況では本当に支援を必要としている生徒を助けられないという悔しさや葛藤，もどかしさを感じ，そういった生徒を助けたいという思いで大学院に入り，心理学を学んだり，一対一の支援を行える場所に身を置いたりなど，「一対一で関わることを大切に支援したい」という強い信念を持っていることが共通点として示され，教育に対する「熱さ」を持っている方たちであると強く感じられた。また，一般の中学校や幼稚園で勤務していた経験から，実際の教育現場の状況を熟知しており，学校や園との連携に長けているという点で共通していると考えられた。

総　括

通級指導教室の役割としては，生きづらさや障害特性に応じた支援，学校へ適応していくための支援を行い，自立活動を通して生きていく力を身に付ける場所となることが挙げられた。さらに，教員自身がネットワークを広げたり，支援に必要な情報の収集や勉強をしたりするなど，支援のためにスキルや知識を磨いていることから，教員自身が自己研鑽することも役割の一つではないかと考える。

通級指導教室での支援の難しさとしては，学校現場との連携や一人ひとりに合った支援を見つけることが挙げられたが，教室で様々なことを幼児や児童，生徒にさせて得意なことを見つけたり，教室に掲示しているもので興味を抱かせたりと様々な工夫を支援の中に組み込んでいる。さらに，幼児や児童，生徒だけではなく，保護者の相談にも親身に応じたり，連絡帳を通して通級指導教室での様子を保護者や園に伝えたりする工夫がなされている。また，役割の部分で挙げられたように，幼児や児童，生徒が所属している学校に出向いて生徒指導の先生の会議に出

席したり，通級指導教室の役割について学校に話しにいったりすることで理解を得て連携を円滑にするためにも尽力していることが示された。

通級指導教室の体制に関する課題としては，通級指導教室を利用する生徒が増加したことに伴う教員の不足や自校通級だけではなく，自校以外での居場所を作るために拠点校を増やすことなどが挙げられた。また，合理的配慮が必要な児童生徒がいるにも関わらず，それについての理解や通級指導教室の役割についての知識が乏しい学校現場も実際にあるため，そういった学校現場へ理解を得る難しさも課題として指摘された。

生徒の増加で教員の負担が大きくなっているにも関わらず，生徒への支援だけではなく，児童生徒が所属している学校への説明，連携，卒業後の連携先の確保など全てを担当教員が担っており，あまりにも教員の負担が大きすぎると推測された。このような状況を改善するためには，専門性のある教員を増やしていくだけではなく，課題としても挙げられたように，専門性を持った教員がその専門性を活かせるように整備していくことが今後の改善点であると考えられた。

このように，教員の尽力だけでは改善できない課題が明らかとなった。通級指導教室の体制をより良くするためにも，通級指導教内での課題を改善していくだけではなく，通級指導教室との連携先が通級指導教室の役割や支援内容について正しく理解することも今後の課題として挙げられるのではないかと考えられた。

今後の課題・展望

本研究を通して，通級指導教室では，生きづらさや障害特性に応じた支援，学校へ適応していくための支援が行われていることが明らかとなった。また，「そだちとこころの教室」「きこえとことばの教室」それぞれの特徴や両教室の共通性についても明らかにすることができた。さらに，通級指導教室では，専門性を持った教員を増やすだけではなく，その専門性を活かせるよう整備していくことや通級指導教室の連携先が通級指導教室の役割や支援内容について正しく理解をしてもらえるよう働きかけていくことなどが今後の改善点であると明らかになった。

今回のインタビューによって明らかとなった支援事例は，「そだちとこころの教室」に通室していた中学生の事例と「きこえとことばの教室」に通室していた幼稚園児の事例であり，小学生の事例について調査することはできなかった。そのため，通級指導教室に通室する小学生の支援事例について明らかとし，中学生・幼稚園児との支援内容の違いや課題点について明らかにしていくことが今後の課題として浮かび上がった。

利益相反

本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

福島 哲夫（編）（2016）．臨床現場で役立つ質的研究法――臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで――　新曜社

川喜田 二郎（1967）．発想法――創造性開発のために―― 中公新書

神戸市通級指導検討委員会（2018）．神戸市通級指導の現状と課題 神戸市役所

教育委員会事務局学校教育部特別支援教育課（2018）．平成 30 年度神戸市の通級指導教室所在地一覧 神戸市教育委員会

前川 喜平（2013）．障害のある児童生徒等に対する早期からの一貫した支援について（通知）　文部科学省　Retrieved June 29, 2022 from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1340331.htm

文部科学省（2019）．令和元年度 通級による指導実施状況調査結果について　文部科学省 Retrieved June 29, 2022 from https://www.mext.go.jp/content/20200317-mxt_tokubetu01-000005538-02.pdf

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課（2019）．（参考）通級による指導の現状」文部科学省 Retrieved June 29, 2022 from https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/06/1414032_09.pdf

中尾 繁樹（2008）．神戸市発！特別な配慮の必要な子どもへの具体的指導内容と支援策　明治図書

長田 洋一・稲葉 みどり（2022）．自閉症スペクトラム児に対する心理劇的アプローチの成果と課題――通級指導教室で実践した 4 つの事例の総括――　愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻　教科開発学論集，*10*，37-46.

多和田 稔・平田 永哲（2008）．学習障害及びその周辺児と考えられる児童への読字・書字指導――通級指導教室での実践を通して―― 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，*1*，133-140.

全国特別支援学級設置学校長協会（編）（2012）．「特別支援学級」と「通級による指導」ハンドブック　東洋館出版社

―2024.1.11 受稿　2024.1.31 受理―

神戸学院大学心理学研究 2024 年　第 6 巻 第 2 号　pp.91-100

研 究 報 告
Research Report
（査読なし）

摂食障害予防教育のさらなる発展に向けたシリアスゲーム活用の可能性

竹田　剛　神戸学院大学心理学部

Serious games in eating disorder prevention: A new framework for engagement

Tsuyoshi Takeda（*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*）

摂食障害の予防教育として様々な取り組みが行われており，一定の有効性が確認されている。しかし好発期である青年期において依然として治療につながりにくい現状があることを考慮すると，予防教育参加者の主体的な参加をより高めるための新たな枠組み作りが必要である。海外におけるメンタルヘルスの向上にむけた取り組みとしてシリアスゲームの開発と活用があるが，これを踏まえ，本論ではまず摂食障害予防教育としてシリアスゲームを活用する可能性を検討した。続いてシリアスゲームを新たに開発する上で，既存の著名なボードゲームのメカニクスを概観しながら，予防教育を行う上で求められる内容を検討した。

Key words: eating disorders, prevention program, adolescents, serious games, board games
キーワード：摂食障害，予防教育，青年期，シリアスゲーム，ボードゲーム

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2024, Vol.6, No.2, pp.91-100

摂食障害予防教育をめぐる現状と問題

本邦の摂食障害患者数は過去 30 年で約 8 倍にまで増加し，関心を集めている。その結果，様々な生物―心理―社会的症状（低栄養状態ゆえの身体症状や抑うつ，対人関係の不和など）への理解が深まった。特に治療においては，2018 年度から認知行動療法の診療報酬算定が可能になるなど，臨床心理学に基づく知見の有効性が注目されている。一方で，摂食障害が疑われる女性の約 4 割は医療機関に受診しておらず，そもそも治療までも辿り着けていない患者が多い現状がある（鈴木他，2013）。この理由に本人やその周囲の人々の病識の乏しさや動機づけの低さが背景にある。例えば Konstantakopoulos et al.（2011）が病識に関する質問紙調査を行った結果，神経性やせ症患者の約 4 割が病気だとは捉えておらず，約半数が身体的治療を不要と回答した。加えて神経性やせ症・過食症のいずれも約 3 割が心理的治療を不要と回答し，「周囲の人が『あなたは自分の体重・体型・食にとらわれすぎだ』と考えているとしたら，あなたはどう思うか」という問いに対して約 6 割が「そう言う方が間違い」と回答した。特に治療への動機づけが低いといわれる神経性やせ症については，本人の体重回復への強い恐怖感や不安の高い性格傾向などの影響が示唆されている（e.g. 中里，2021）。未受診期間の長さは症状の悪化や予後不良につながることがあるため（American Psychiatry Association, 2013），摂食障害をめぐっては治療だけでなく予防の観点も重要である。

そこで，摂食障害の発症の経緯やその症状に関して，知識の提供や体験的ワークを行い，病識や動機づけの向上および偏った食行動とそれに関連する認知の修正を促し，必要に応じて治療に接続する，発症・慢性化予防教育が実践されている。その内容を大別すると，摂食障害に関する知識を提供することで予防的効果をねらう心理教育や，認知行動療法のワークを実践するもの，認知的不協和理論を応用したもの，メディアリテラシーの向上をはかるものなどに分類される（山蔦，2021）。これらは主に講義や書籍・視聴覚教材の枠組みで実施されている（三井，2017）。近年では，日本摂食障害協会や摂食障害全国支援セ

ンターが精力的に活動を行っている。日本摂食障害協会は 2016 年に一般社団法人となった組織で，患者およびその家族の支援の一環として啓発および予防活動や情報提供を行っている。例えば 2023 年の講演である『心身共に心地よく過ごすためには～いい気分で過ごすためにからだの外から内からできること～』という講演では，化粧を通して「心から魅力アップ」する方法を説明するに加えて，摂食障害の啓発およびストレスコーピングについて解説している。さらに年代ごとの発症・慢性化予防を考えるシリーズである『年齢別講習会』，摂食障害を抱える方が身近にいる方向けの『家族向け講習会』などを開催している。摂食障害全国支援センターは 2014 年に厚生労働省事業として設立された機関で，全国摂食障害対策連絡協議会の開催や支援拠点病院との連携を行うほか，情報ウェブサイトの運営や研修を通した啓発・予防活動を行っている。例えば情報ウェブサイトの『10 代のあなたへ』という特集記事では「成長期の極端なダイエットが身体とこころへ及ぼす影響」「思春期の課題」などの内容を通して，青年期向けに共感的かつ具体的なメッセージを発信している（摂食障害全国支援センター，2022）。これらの活動を主軸とし，各地の支援拠点病院が講演会を開催している [1]。さらに有志の団体も活動を行っており，例えば「摂食障害からの回復を後押しする対話と学び合いの場 TASTE」は『ボディーイメージについて話そう』というイベントを 2023 年に開催し，「摂食障害家族の会ポコ・ア・ポコ」は家族支援に向けた講演会を定期的に行っている。まさに全国で，医療従事者だけでなく当事者およびその家族が一丸となり，様々な観点から啓発・予防活動を行っている。

ただしこれらの取り組みについての効果は確認されているものの，何に対して作用しているかについての研究結果は一貫していない。例えば，Cororve Fingeret et al.（2006）はメタ分析を通して，予防的介入は知識の改善に対しては大きな効果を示す一方で，不適応的な摂食態度および行動の減少に対する効果は小さいことを示した。また身体的不満足感については，介入後は有意な効果量を有していたにも関わらず，フォローアップ時には効果は認められなかった。同様に Watson et al（2016）はメタ分析を通して，発症・維持因子であるダイエット行動の抑制効果はあるが，根本的な病理である身体不満足感の低減効果が弱いことを示した。本邦における取り組みでも同様で，例えば三井（2006）は女子大学生に対して 70-90 分の認知行動療法に基づく心理教育とワークを 3 回に渡って実施したところ，ダイエット行動ややせ願望についての低減効果はみられたものの，体型不満に対する効果は長続きしなかった。Enhanced Cognitive Behavior Therapy（摂食障害に対する認知行動療法）を予防教育として実施した山蔦（2021）も，一定の効果が得られたものの身体に関する他者評価不満足感は介入前後で有意な変化がみられなかったことを報告している。様々な予防活動を総括して生野（2008）は，「体重・体型へのこだわり」を減らすことは困難である旨を述べている。

もちろんこれらは予防教育なので，その効果研究の対象者には摂食障害発症リスクの低い者も含んでいるため，統計的に有意な結果を得ることがそもそも困難である（e.g. Huon et al. , 2000）。ただし一方で，受講者は摂食障害に関する知識を自我親和的に受けとめづらいという課題がある。そもそも予防教育という営みは，磯野（2022）を援用すると＜遠い＝経験＞すなわち「何らかの専門家が，その科学的，哲学的，また実際的目的を果たすために用いるような概念」を非専門家に伝えることであり，それは＜近い＝経験＞すなわち「自分や自分の仲間が見たり聞いたり考えたり想像したりすることを表現する際に，自然に無理なく使い，他人が同様に使った場合にもやはり容易に理解できるような概念」とは元々距離のあるものである。特に摂食障害は，罹患率が低いだけでなく，発症リスクが高まったとしても周囲に隠したり，あるいは症状を恥じたりするものであるため，より縁遠い概念として捉えられている可能性がある。実際に摂食障害予防教育のメタ分析を行なった Watson et al.（2016）は，得られた効果は intent-to-treat 分析においてはわずかな効果しか認められなかったか，そもそも効果がみられなかった結果から，参加者の関与度を高めることが必要である旨を訴えている。このことは単に知識を提供するだけの講義形式の枠組みでは効果が十分でないという指摘（生野他，2002）や，対話形式にもとづく予防教育の効果が注目されている（Stice & Shaw, 2004）こととも関連があるといえる。

以上より摂食障害に関する予防的知識を自分自身に引き付け主体的に考える機会を提供できる形式が実践において求められている。同様に摂食障害患者は，知識を得たとしても理解だけに留まり行動変容まで結び付きづらい傾向があるため（西園，2009），より体験的に理解を深められる形式が求められている。この問題点を克服すべく，様々な取り組みが近年行われている。例えば杉山・横山（2010）は，形式は講義形式に加えて参加者間でのロールプレイを行うという点では三井（2007）と同様だが，ダイエットややせ願望に直接アプローチするのではなく，参加者の対人関係上の自立の促進や自己肯定感の向上をねらいとした全 8 回のプログラムを作成し，摂食障害を特殊な問題として扱わず，現代においてしばしば起こりえる現象として支持的に扱う試みを行っ

1　例えば，静岡県摂食障害支援拠点病院や宮城県摂食障害支援拠点病院が 2023 年にそれぞれ市民公開講座を実施している。

ている。磯野（2022）はフィールドワークを通して，レトリックすなわち比喩表現を含む修辞技法を用いることで＜遠い＝経験＞であるはずの説明が対象者にとって実感しやすいものになることを論じているが[2]，摂食障害の予防教育においても，このレトリックのような何らかの仕掛けが必要であるといえる。

さらに摂食障害への対応には，発症から回復の経過において患者が体験する生物―心理―社会的な困難さや治療を通して得られる変容過程に関する主観的な語り（当事者性）を理解することも重要である。摂食障害へのブリーフセラピーの実践を論じたMcFarland（1995）は「（摂食障害に関して『診断する』営みや病因を探索すること，病状の深刻さを評価しようとすることは）臨床家を，そして必然的にクライエントをも問題と症状という窮地に追い込んだままにしておくものであり，それらのすべてが治療プロセスをきわめて非効率体なものにしている……治療を求めてきたクライエントの目標は覆い隠されてしまうばかりではなく……クライエントを『病人』の役割に固定してしまい自己評価の点では正反対の効果を及ぼす」（p.40）と指摘している。当事者らの回復過程の語りをまとめた中村（2011）も，当事者らの意識や行為を支配している「摂食障害」という認識システムから抜け出すために，そのことを自覚し，回復過程に関する語りを通して個人の自己定義権ないしは解釈権を復活させることが重要であると指摘している。

この点を考慮し，いくらかの講演会では当事者も医療従事者とともに登壇し，情報発信を行っている。例えば日本摂食障害協会の2023年のイベントである『メンタルヘルスデイ』において当事者が登壇し，「理解して応援して欲しい摂食障害」をテーマに討論を行った。そこでは「摂食障害について理解されないと感じたこと」などの経験談を募集し，専門家の意見を交えながらディスカッションを行っている。しかし全ての予防活動で当事者を含めた内容を組むことは困難であるし，そもそも医療者と当事者の間で十分良好なコミュニケーションが行われない場合があることも指摘されている（磯野，2012；香山，2009）。この点においても，橋渡しを行える仕掛けが求められている。

2　磯野（2022）は例として，心房細動患者に対して医療者がその疾患のリスクをどのようにレトリックを用いて伝えるかを説明している。心房細動によって引き起こされるリスクを患者自身が「自分ごと」として引き受けることを促すために，医療者は元プロ野球選手で心房細動を患っていた長嶋茂雄氏の名前を引用するという。医療者が「長嶋さんみたいに血栓ができる可能性があるので…」と直喩的なレトリックを用いることで，「『自分も彼のようになるかもしれない』という驚きを伴う発見を患者にもたらし，それがリスクの実感の種となる」（p.61）。

シリアスゲームがもつ可能性

近年，医学的予防教育において，ボードゲームの形式を用いたシリアスゲームが複数開発されている。シリアスゲームとは，エンターテイメント性を持ちながら社会の諸問題を解決することを目的としたゲームのことである。参加者はゲーム上で設定された役割を演じ，様々に発生する体験や判断を通して学びを得ることができる（上原他，2023）。

例えば『AntimicroGAME』（Karbownik et al., 2016）は双六の形式を取っており，医療従事者の立場から身体疾患の治療過程を体験できる。プレイヤーは患者の治療を担当する医師の役割であり，全員が「患者が病気の状態」を示すマスからスタートする。治療に用いる抗生物質は手札で表現され，適切な手札を持っているかどうかでコマが前進・後退し，模擬的に治療過程が表現される。「患者が健康の状態」に至るまでの道程には，基礎医学や薬理学に関するクイズカードに回答しなくてはならないマスがあり，正答できるかどうかで同様に駒が前進・後退を繰り返す。最終的には「健康」のマスまで辿り着けたプレイヤーが勝者となる。これに関する効果研究も行われており，医学部生を対象とするランダム化比較試験の結果，実施後の知識保有率が統制群より有意に高いことが示された。

栄養教育に関する『Kaledo』（Amaro et al., 2006）は，双六で表現された世界を旅しながら様々な料理カードを手札に引くシリアスゲームである。そこには料理を通して摂取されるカロリー量が示されており，プレイヤーは手札の増加に伴って体重の増加を模擬的に経験する。一方で運動カードを引くこともあり，それはゲーム内で体重を適切に減少させることにつながる。それらを通して最終的に各プレイヤーの年齢ごとに算出された適正体重の範囲を維持できた者が勝者となる。Amaro et al.（2006）は中学生を対象にクラスタランダム化比較試験を行い，栄養知識や毎週の野菜摂取量の有意な改善を示した。同様にViggiano et al.（2015）は中学生と高校生を対象にクラスタランダム化比較試験を行い，食習慣チェックリスト得点などの有意な改善を得た。

『The Pick-Klop game』（Khazaal et al., 2013）は喫煙のリスクを学ぶシリアスゲームで，喫煙者に罪悪感を抱かせない方法で喫煙と禁煙について知らせること，喫煙者が禁煙できるという効力感を高めること，減煙および禁煙のプロセスについて指導することなどを目的に開発された。プレイヤーは「質問マス」に止まるたびにカードを引き，そこには喫煙のリスクや禁煙にむけた予防的知識に関するクイズが書かれている。それに正しく回答すると得点が得られる。ゴールへの途中には「誘惑マス」が道を妨げており，そこで引かれるカード（様々な再発状況が提示される）が要求する得点を支払わないとそのマスを通過できない。最終的に最初にゴールに到達したプレイ

ヤーが勝者となる。喫煙者に対する RCT の結果，喫煙に対する態度尺度や喫煙に対する自己効力感，1 日当たりの喫煙量などで小～中程度の効果量がみられた。

本邦では吉田・井上（2008）が自閉スペクトラム症をもつ児童を対象に『SST ゲーム』を開発している。このゲームは盤上をサイコロで移動する際，「チャンスカード」マスに止まるとカードを引き，そこに書かれた社会的スキル，例えば「待ち合わせに遅れてしまったとき友達に『遅れてごめんね』という」などを他プレイヤーと行動リハーサルとして実践することを求められる。適切に行動できれば，プレイヤーと相手プレイヤーの双方に得点が加算され，最終的に獲得した得点数で勝敗が決まる。自閉スペクトラム症の診断をもつ小学 6 年生を対象に単一事例実験を行ったところ，社会的スキルについての担任からの評価が向上し，行動観察においても適切な行動が生起した。

上記のシリアスゲームのいずれも，心理教育の内容がボードゲーム上で何らかのストーリーや文脈を持った形で双六という形式に落とし込まれている。双六という形式は「『振り出し』と『あがり』の場を定め……出た目の数によって駒を進めて，早く『あがり』に到達したものを勝ちとする」（北原他，2000）という性質上，何らかのプロセスを模擬的に体験させる上で有益な形式であると考えられる。加えて注目すべきは，心理教育で表現しようとする要因が手札という形で表現されていることである。身体疾患の治療においても適正体重の維持においても，どの人も画一的に進展するわけではない。その個人差を表現するために，ランダムに配布される手札を導入しているわけである。またそれがネガティブ要因（料理カード）や資源（抗生物質や運動カード）など様々な属性を有していることも興味深い。

そして何より，これらはゲームを体験しながら学べるため，参加者の関心を惹くだけでなく，より主体的・体験的な機会となることが期待できる（Eichenberg & Schott, 2017）。このことは安全な環境下で，伝えたいメッセージを効果的に伝えることにもつながり，参加者間のコミュニケーションを促進することにもつながる（上原他，2023）。実際にシリアスゲームの活用に関するメタ分析の結果，知識に対しては大きな効果量をもち，行動に対しては小～中程度の効果量をもつことが示されている（Gauthier et al., 2018）。

そこで摂食障害予防教育にもシリアスゲームを利用することで，従来の形式よりもより主体的な参加が期待でき，また自身に引きつけての知識習得が期待できる。このことは，これまでの摂食障害予防教育実践における問題の解決となるといえる。この観点から鈴木（2017）は，摂食障害予防に向けて重要な知識をカルタによってゲーム化し，その効果を質的に確認している。ただしこの知識は栄養学的な観点が主となっており，摂食障害をめぐる状況を考慮すると，臨床心理学的および医学的な情報も加えて伝えることが求められているといえ，新たなシリアスゲームの開発が期待される。

摂食障害予防に向けたシリアスゲームに求められる形式と内容

ではこれらを参考に，摂食障害予防教育にはどのようなシリアスゲームが求められるのかを具体的に検討したい。

まず双六の形式とし，（a）摂食障害がどのように発症するのかについて，（b）摂食障害の症状や困難さについて，（c）治療・回復過程において重要となる要素について，患者が体験する困難さやその変容過程について模擬的に体験できる形で学べることが望ましい。これらは，先行するいくつかの予防教育でも重視されている要素である。例えば三井（2007）は摂食障害の発症要因として痩せ文化礼賛や過激なダイエットなどを取り上げ，それらが生物―心理―社会的に与える影響を講義形式で説明している。ただし（c）治療・回復過程において重要となる要素については，どのような治療的介入が行われるのかに関する概説も行っているものもあるが（e.g. Stice & Ragan, 2002），各自の予防教育が想定している発症要因に対する個別の介入を行っているものも多い。例えば三井（2007）は，メディアからのやせ礼賛主義を軽減し，体型不満ややせ願望など身体に関する非現実的な認知の修正を行い，身体と健康的に付き合う方法をボディーワークによって体験させている。杉山・横山（2010）は対人関係上の自立の促進や自己肯定感の向上をはかるため，自分と他者の関係性や境界のあり方をテーマとした参加者間でのカウンセリング・ロールプレイを行い，その取り組みに対して肯定的なフィードバックを受けることを通して，多くの健常群がそうであるように自分のあり方と「妥協」しながら生きることの体験を促している。これらを踏まえ，（c）については幅広い要素を取り入れることが適切であるといえる。

（a）～（c）に共通する要素は「症状の増減」である。そこでゲームの要素として，ひとつひとつの症状をカードで表現し，それを引いたり捨てたりする，つまり手札カードの増減で症状の増減を表現することができると考えられる。具体的には発症をスタートとし，各プレイヤーが回復というゴールに向かって治療や自己洞察の進展を経験する。その途上で症状が増悪するようなネガティブ要因（生物―心理―社会的症状の発現など）と出会うことで手札が増え，資源（専門家や重要な他者のサポートなど）と出会うことで手札が減る，と表現できるだろう。特に摂食障害は回復過程の内容だけでなく，症状の発現についても個人差が大きいことが示されている（e.g. 中

井他，2002）。症状が表現されたカードをランダムに引く手続きを加えることによって，プレイヤー間で累積される症状（カード）に幅を持たせることも可能となる。

続いて（a）摂食障害がどのように発症するのかについて，どのようにゲームで表現できるだろうか。摂食障害の発症にかかわる病前性格や先行刺激として，完全主義や低い自尊感情，あるいはメディアからのやせ礼賛主義などが関与していることが論じられている（切池，2009）。これを踏まえると，それらをゲーム開始時にプレイヤーごとに割り当てることが考えられる。例えば，「低い自尊感情」の特性をプレイヤーボード[3]で表現し，その特性に応じた症状（カード）の増え方を表現することができれば，病前性格がどのように症状の増悪に寄与しているのかについて，そして病前性格の違いが回復過程にどう影響していくのかについて理解を深めることができる。一方の先行刺激については，症状カードとは別にして，ゲーム開始時に配布されるカード[4]として表現することで，先行刺激が累積している状態から摂食障害症状が累積していく様子を表現できると考えられる。

ところで『AntimicroGAME』や『Kaledo』は，勝者と敗者が存在する「対戦ゲーム」の構造[5]をもつゲームである。ボードゲームのメカニクスを整理している Engelstein & Shalev（2020）は，「対戦ゲーム」とは，2 人以上のプレイヤーの中から，プレイを通して勝者が決定されるメカニクスである。特に勝者が決定されるという手続き上，誰が勝者なのかがより明瞭に示されることを好むプレイヤーが一定数いることを指摘している。確かに，本邦において流通しているボードゲームの多くは対戦ゲームであり，プレイヤーも白熱しやすい構造であるため，心理教育教材として採用しているものも多い（e.g. 山川 & 市瀬，2012；飯塚他，2016）。しかし「患者が体験する困難さやその変容過程を体験できる教材」において勝者と敗者が決定することは適切と言えるだろうか。開発されたシリアスゲームは摂食障害患者本人やその家族がプレイする可能性もあるが，ここで敗者となってしまうことで治療への動機づけを失っては教材としての意味を持たない。そもそも心理臨床学的観点から言っても，回復過程を歩むものに勝者も敗者もない。そのため，「対戦ゲーム」以外の構造をもつゲームメカニクスがこのシリアスゲームには適切であると考えられる。具体的には，「プレイヤーが共通の勝利条件を達成するためにアクションを調整するメカニクス」であり「プレイヤー全員が『一緒に』ゲームに勝つか負ける」（Engelstein & Shalev, 2020）「協力ゲーム」の構造を採用すれば，対戦ゲームがもつ弊害を解消することができ，同時に摂食障害患者の症状やパーソナリティの多様性をゲーム内で勝敗に関わらず許容できる。

では回復過程について「カードを捨てる」というメカニクスを基に，具体的にどのように表現できるだろうか。本ゲームが双六の形式を取るならば，症状が増える（症状カードを引く）マスと症状が減る（症状カードを捨てる）マスを置くことが適切と考えられる。摂食障害の症状は生物―心理―社会の多岐に渡っており，それらに対して医学身体的治療―心理的援助―社会福祉的支援・調整などの多職種連携に基づく治療をバランスよく実施することが求められている（吾郷他, 2005）。これを踏まえると，症状カードを引く・捨てるマスは生物―心理―社会の 3 種類を盛り込む必要があるといえる。具体的には，「身体的な症状が増えるマス」では摂食障害の代表的な身体症状が描かれたカードを引き，「心理的な症状が減るマス」では公認心理師によるカウンセリングを受けたというメタファーで心理症状のカードを捨てることができる，という形で症状の増減が表現できるだろう。また，先行する予防教育で行われる介入やセルフワークもカードを捨てる機会として実装できると，予防教育としてより充実するだろう。

ただしこれだけでは，各プレイヤー間の相互交流は皆無であり，プレイヤー間での協力は生じないと考えられる。ここで摂食障害治療の実際に目を向けると，専門家による多職種連携治療に加えて，自助グループの取り組みの重要性が指摘されている。そこでは当事者同士が自身の体験を話し合い，相互に支え合うことによって，専門家が介入することとは別種の大きな治療的効果が生まれる（野村，2008）。本教材においては，プレイヤーは摂食障害を抱える当事者の役割を体験することになるため，自助グループという構造をゲームに落とし込むことができる。例えばプレイヤーのコマ同士が盤上ですれ違うことが起きた時，そこで「自助グループ的な体験共有・支え合いが行われた」として症状カードを捨てるメカニクスを実装することで，プレイヤーの中に「いま誰とすれ違うべきか」「どうすればすれ違うことができるか」という意識が生じ，他プレイヤーの動向

3　プレイヤー全員が共通して扱うボードではなく，各プレイヤーごとに割り当てられる（配布される）ボードのこと。

4　この手法をとるゲームの例として『Dead of Winter』（Gilmour & Vega, 2015）がある。このゲームでは，プレイヤーはカードで表現される物資（食料や武器など）を様々な施設から探索することを求められるが，いくつかの物資は既に保有している状態から開始する。つまり開始時に配布されるカードと，ゲーム途中で引くカードの 2 種類に大別されている。本教材においては，先行刺激カードと症状カードを分けることで，先行刺激がない状態から症状は増えないこと，逆に後から先行刺激が増えるわけではないことを表現できる。

5　以下で，このようなボードゲームがもつ構造やルールなどの「ゲーム自体の構成要素」（Engelstein & Shalev, 2020）をまとめて「メカニクス」と表記する。

に目を配る動きが生じる可能性がある。そしてこのことが，自分だけではなく他のプレイヤーをどう支援できるかという目的性に繋がり，協力ゲームとしての基盤となると考えられる。

では最後に，このゲームのクリア条件をどのように設定すれば目的に適うだろうか。このシリアスゲームが摂食障害からの回復過程を体験する協力ゲームである以上，クリア条件は「全員の回復」となるだろう。では「摂食障害からの回復」とはどういった状態になることであろうか。実はこのことは一義的ではなく，「特定の回復モデルを相対化し，さまざまな場所でさまざまな形の＜回復＞が生まれる」(p.257)，つまり当事者の数だけ回復があると捉えられている（中村，2011)。そこで本教育としても「症状カードが全て無くなったら回復」と症状の有無にこだわるのではなく，ある程度幅を持たせた状態にまで達したら回復に近づいたとみなす（どうしてこれで回復と言えるのかを，各プレイヤーの解釈に委ねる）ことが現状に即していると考えられる。具体的には「プレイヤーの症状カードが 2 枚になったら回復」，「そこに全員が到達出来たらゲームクリア」とすれば適切に表現できているといえるだろう。

最後に，このシリアスゲームを摂食障害予防教育として実施する上で効果的な枠組みについても考えたい。摂食障害予防教育は一般的に，好発期である中学生・高校生，および大学生で実施されていることを考慮する必要がある。中学生・高校生の標準的な授業時間は 50 分であるので，ゲーム自体は 30 分程度で終わることが望ましい [6]。またプレイ時間が長くなり過ぎない範囲で，協力的相互交流が生じる人数を考えると，4 人プレイが適切だろう。

既存のボードゲームからの示唆

ところで近年，ボードゲーム市場が以前よりも賑わいを見せている。Ono（2023）によると，海外で開発されたボードゲームが邦訳された件数は年々増加し，2008 年はわずか 8 件程度であったが，2019 年から 2022 年では各年 220 件以上，2023 年も 196 件であった。併せて市場規模も拡大しており，2018 年の 105 億円から 2022 年には 112 億円に至ると試算されている（矢野経済研究所，2023)。ゲーム制作も盛んに行われており，制作者がブースを出展し展示･試遊･売買を行う大規模なイベントであるゲームマーケットは年 2 回行われており，2000 年には出店数 32 ブース・来場者約 400 人だったものが，2023 年度秋開催分だけでものべ 1,368 ブース・約 25,000 人にまで増加している。遊戯そのものが目的だとしても，膨大な種類がある既存のボードゲームの表現方法を参考にすることで，摂食障害予防教材としてのねらいを達成するうえで助けになるだろう。

まず「手札」の扱いについて検討する。プレイヤーが手札をどのように保持するかについて，秘匿するメカニクスと公開するメカニクスの 2 種類がある。前者はトランプゲームでいうババ抜きや大富豪のように，手札を他のプレイヤーから見えないようにするようにして保持する枠組みである。逆に後者は見えるように保持することで，協力ゲームである『Pandemic: A New Challenge』[7]（Leacock, 2013）や『Zombicide』（Guiton, Lullien, & Raoult, 2012）で採用されている。協力を積極的に行う上で，プレイヤー間で手札が共有されている方が，各プレイヤーの状況が相互に理解しやすくなり，より相互作用が生じるものと考えられる。

ではどのように手札を公開すればよいのか。上記のように相互作用の促進を目的とするのであれば，より他プレイヤーからも自分の現状がよりわかりやすく示せるような工夫を加えることが望ましい。具体的には，本件のシリアスゲームの手札は摂食障害症状を示しているので，生物―心理―社会の各ジャンルでどれだけ症状が積み重なっているのか（つまり，どれだけゲームクリア条件である「回復」から遠のいているのか，翻っていえば他プレイヤーの援助を必要としているのか）が確認しやすいように示されることが望まれる。その解決法として例えば，各プレイヤーに配られるプレイヤーボードに，症状カードを整理して並べられる領域をあらかじめ指定しておくことが考えられる。そうすると症状カードを多く持っているプレイヤーが誰なのかが一見して判別できる。このような方法で相互交流を促進しているゲームとして，プレイヤーボード上で各プレイヤーが農場を拡大していく『Agricola』（Rosenberg, 2007）があり，誰が小屋を多く建設しているのか，家畜を欲しているのは誰かが判別しやすくなっている。

さらなる「協力」を促進する工夫として，プレイヤー間でゲームの進み具合に不均衡が生じやすいような仕掛けを加えれば，あるプレイヤーは進んでいる部分を活かして他プレイヤーの欠けている部分を補おうとする動きが生じるかもしれない。これを生み出すメカニクスとして，プレイヤーごとに能力の異なるキャラクターを割り当てる協力ゲームは多くある（例えば『Pandemic: A New Challenge』（Leacock, 2013）　や『Nemesis』（Kwapiński, 2018），『T.I.M.E. Stories』（Chassenet & Rozoy, 2015））。本シリアスゲームでいえば，プレイヤーごとに摂食障害の発症にかかわる病前性格をゲーム開始時にプレイヤーごとに

6　その他，ルール説明に 10 分，感想シート記入に 5 分程度確保する必要がある。

7　厳密には，初心者向けのプレイ方法としてルール化されている。

割り当てることを検討している。症状カードの増減と併せて，ゲームの進み具合を左右する病前性格の違いもプレイヤーボード上で明示できればよいだろう。

そもそも，ゲームの目的やクリア条件をできるだけ単純かつ明快にすることも「協力」を促進する上で重要である。洞窟内の宝石のある位置まで協力して道をつないでいく『Saboteur』（Moyersoen, 2004），体内に侵入しようとするウイルスよりも免疫機能が勝るように協力して抗体を召喚してゆく『免疫レンジャー』（tanQ, 2020）などは，プレイヤーは初手で最善手にはたどり着けなかったとしても，「何をすればよいか分からない」という状況に陥ることは少なくなる。その点で，症状カードを規定数以下に減らすという目的は十分理解しやすいと考えられる。予防教育そのものが頻回に行われるわけではない点も考慮するとなお適切であるといえる。

なお本件のシリアスゲームの目的は，通常の双六，例えば『The Game of Life』（Klamer & Markham, 1960）のようにゴールのマスが決められていて，そのマスに到達することで達成されるものではない。実際の摂食障害の回復過程においても，回復しつつある（回復した）と当事者自身で捉えられるその時まで「自分は症状に振り回され続けている」「抜け出すことが難しい」という文脈の中にいる様子が語りの中から垣間見える（e.g. まさき，2013；中村，2014；道木，2023）。このことを鑑みると本件のシリアスゲームでも，『Monopoly』（Darrow & Magie, 1935）のようにゴールのマスを設けず，クリア条件が達成されるまで環状に循環するコースを回り続ける形式が適切であると考えられる。

加えてゲーム性を高める仕掛けとして，プレイヤーの思惑通りにゲームが進行しないように，イレギュラーな出来事が生じるメカニクスを実装することもできる。例えば，無人島での自活生活を試みる協力ゲームである『Robinson Crusoe: Adventures on the Cursed Island』（Kijanka & Trzewiczek, 2012）は，ほぼ毎ターンでプレイヤーの行動の結果や目標達成進度を左右するイベントが生じる。そこには不幸なイベントもあれば（例えば猛獣があらわれてキャンプが破壊されるなど），資源が増えるイベントもある（例えば海賊が残した宝箱が発見されるなど）。これらはイベントカードとして表現され，カードを引くというランダム性のもとで表現されている。摂食障害からの回復過程においても，当事者の立場に立つと回復に関わる様々な出来事が生じるわけであるから，この点を本件でもイベントカードで表現することで，様々な出来事が回復過程を左右することを体験的に学ぶことができる。またこの点は，先行する予防教育が個別的に行っている発症要因に対する介入やセルフワークの内容を盛り込むことにもつながる。たとえば三井（2007）がメディアからのやせ礼賛主義を軽減するために行う「美の基準や身体に対する否定的な気持ちを見直す」というポジティブな機会をイベントカードとして挿入することで，どのような発想が予防につながるのかについても学ぶ機会にできるだろう。

最後に，以上の内容に対して，どのように当事者性を盛り込むことができるだろうか。症状カード・イベントカードとして多くの当事者が体験するものを選定することが考えられるが，特にフレーバーテキストに当事者の語りを盛り込むことができる。フレーバーテキストとはカードゲームの用語で，カードに記された内容のうち，ゲームの進行そのものには関係しない雰囲気づくりのために用意されている文章のことである。具体的には「アイテムの伝来や伝説，キャラクターの性格や内情，あるいは当該アイテムとは全く関係ない情景などのような，一種の余談が記載されている場合も多い。‥‥‥ ゲームの舞台となっている架空の世界の世界観や文化などがうかがい知れる情報源として機能する」（GRAS グループ株式会社，2023）。このフレーバーテキストに当事者の語りを引用することで，より当事者性に肉薄する形で予防教育を行うことができるだろう。

留意点とその解決

留意すべき点は第一に，摂食障害からの回復過程をシリアスゲーム化することによって生じる誤解や，摂食障害に対するネガティブな印象を与えてしまうことを予防する必要がある。これらの意図しない結果は，対象である中学生・高校生だけでなく，いま摂食障害を抱えている当事者およびその関係者にも起こりうる可能性がある。まず中学生・高校生に与えかねない誤解については，元々摂食障害に対する知識が少ないために，本シリアスゲームが提示する情報を誇張・歪曲した形で受け取られる可能性がある。たとえば健常群が摂食障害に対して「摂食障害はダイエットが一番の原因だ」で YES と誤解している者が約 7 割，「摂食障害は母親の育て方が原因だ」で YES と誤解している者が約 2 割いる。症状について「拒食症の人は自分の意志で拒食をしている」「過食症の過食は強い意志があればやめられる」に YES と誤解している者も約 3 割いる（小原他，2020）。とくにこの症状への誤解は，摂食障害は「わがまま病」「甘え」というよくある誤解とも関連している（石川，2021）。このような誤解を助長しないよう，たとえば発症因は多様である旨や，本人の意思に関わらず症状は増悪・維持される旨を明確に表現する必要があるだろう。また当事者およびその関係者については，「摂食障害は治らない病気である」「摂食障害は若い女性がかかる病気である」などの誤解がしばしば取り上げられる（摂食障害全国支援センター，2014）。きちんと規定時間内に全員がゲームクリア（すなわち回復）できるようにゲームバランスを調整したり，

男性のイラストも含めて作成するなどの工夫が必要となるだろう。さらに摂食障害に対するネガティブな印象については，必要以上に「怖い」「異常」と捉えられてしまう可能性がある。それらの印象を助長しないよう，イラストやデザインを工夫する必要があるだろう。

第二に，シリアスゲームで表現することの弊害が考えられる。磯野（2022）の指摘を借りれば，このシリアスゲームで伝えようとしている内容は二重の意味で＜遠い＝体験＞である。ひとつは摂食障害の予防教育であるという点，もうひとつは摂食障害当事者の体験であるという点である。これらをシリアスゲーム化というレトリックによって中学生・高校生にとって＜近い＝体験＞に変えようと試みているわけだが，厳密にいえば本来は一致しないものを近づけようとしていることも忘れてはならない。この場合は体験の希薄化，単純化が生じうる危険性であると考えられる。いくら多様な背景，症状，回復過程が表現できるとはいえ，カードを引かれなければ表に顕れることがない。プレイ時間の約 30 分間から，摂食障害の回復までに要する可能性のある数年・数十年間を想像させることには限界がある。症状カードを 1 枚捨てるという数秒で終わるアクションから，実際には当事者やその関係者がいかほどの想いを込めて成し遂げているのかにまで十分に思いを馳せることは困難である。この点については本論文で取り組んでいるように，関係するすべての人に丁寧に説明を行い続けることが重要である。例えばこのシリアスゲームの頒布時には，ゲームに用いるボードやコマのほかに，解説書を同梱することも大切であると考えられる。または，この予防教育を実施した際にはフィードバックを必ず聴取し，絶えず改善に努めることも大切だろう。

加えて，メッセージが伝わりやすくなるがゆえに単一の価値観に収斂してしまい，本来多様であるはずの病との付き合い方に一つの正解を押し付けてしまうことも起こりかねない（東畑，2020）。さらに心理教育教材としての立場を重視しすぎることによって，シリアスゲームにある種の窮屈さが生じ，メッセージが逆に伝わりづらくなるという事態も生じうる（與那覇・小野，2023）。まさに岡村（2022）の指摘するように，教育の受け手に届いたときに，本来予防すべきだった危険性とは別のものが生じうる可能性のあることを，常に自覚することが求められているといえる。

利益相反

本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

謝　辞

本研究は JSPS 科研費 JP20K14239 の助成を受けた。

引用文献

吾郷 晋浩・河野 友信・末松 弘行（2005）．臨床心身医学入門テキスト　三輪書店

Amaro, S., Viggiano, A., Di Costanzo, A., Madeo, I., Viggiano, A., Baccari, M. E., Marchitelli, E., Raia, M., Viggiano, E., Deepak, S., Monda, M., & De Luca, B. (2006). Kalèdo, a new educational board-game, gives nutritional rudiments and encourages healthy eating in children: A pilot cluster randomized trial. *European Journal of Pediatrics, 165*, 630-635. https://doi.org/10.1007/s00431-006-0153-9

Chassenet, P., & Rozoy, M. (2015). *T.I.M.E Stories*. Space Cowboys.

Cororve Fingeret, M., Warren, C. S., Cepeda-Benito, A., & Gleaves, D. H. (2006). Eating disorder prevention research: A meta-analysis. *Eating Disorders, 14*, 191-213. https://doi.org/10.1080/10640260600638899

Darrow, C., & Magie, E. J. (1935). *Monopoly*. Parker Brothers.

Eichenberg, C., & Schott, M. (2017). Serious games for psychotherapy: A systematic review. *Games for Health, 6*, 127-135. https://doi.org/10.1089/g4h.2016.0068

Engelstein, G., & Shalev, I. (2020). *Building blocks of tabletop game design.* Taylor & Francis.

Gauthier, A., Kato, P. M., Bul, K. C. M., Dunwell, I., Walker-Clarke, A., & Lameras, P. (2018). Board games for health: A sytematic literature review and meta-analysis. *Games for Health Journal, 8*, 85-100. https://doi.org/10.1089/g4h.2018.0017

Gilmour, J., & Vega, I. (2015). *Dead of Winter*. Plaid Hat Games.

GRAS グループ株式会社 (2023). IT 用語辞典バイナリ Retrieved January 12, 2024 from https://www.weblio.jp/content/%E3%83%95%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%86%E3%82%AD%E3%82%B9%E3%83%88#google_vignette

Guiton, R., Lullien, J.-B., & Raoult, N. (2012). *Zombicide*. Asmodee.

Huon, G. F., Roncolato, W. G., Ritchie, J. E., & Braganza, C. (1997). Prevention of dieting-induced disorders: Findings and implications of a pilot study. *Eating Disorders, 5*, 280-293. https://doi.org/10.1080/10640269708249235

飯塚 裕介・長原 慎一・内山 翔太・川村 能勝・末永 真樹・中谷 友紀 (2016). 防災教育用対戦型ボードゲームの開発 都市計画報告集，*14*，257-261.

https://doi.org/10.11361/reportscpij.14.4_257
生野 照子（2008）．予防の視点――健康なダイエットと病的なダイエット――　臨床精神医学，*37*，1413-1418.
生野 照子・北村 圭三・頼藤 和寛・丸島 令子（2002）．摂食障害の予防活動――女子大キャンパスをベースとして――　小椋 力（編）精神障害の予防をめぐる最新の進歩（pp. 302-303）　星和書店
石川 俊男（2021）．摂食障害に対する誤解――摂食障害を理解するために――　Medical Note Retrieved January 12, 2024 from https://medicalnote.jp/contents/151201-000027-QHTMYR
磯野 真穂（2012）．医療の語らなかった摂食障害――摂食障害の食の文化人類学的探求――　早稲田大学大学院博士論文
磯野 真穂（2022）．他者と生きる――リスク・病い・死をめぐる人類学――　集英社
Karbownik, M., Wiktorowska-Owczarek, A., Kowalczyk, E., Kwarta, P., Mokros, L., & Pietras, T. (2016). Board game versus lecture-based seminar in the teaching of pharmacology of antimicrobial drugs - a randomised controlled trial. *Federation of European Microbiological Societies Microbiology Letters, 363*. https://doi.org/10.1093/femsle/fnw045
香山 雪彦（2009）．摂食障害者の自助グループは回復に役立たないか？それは傷の舐めあいか？アディクションと家族，*26*，62-65.
Khazaal, Y., Chatton, A., Prezzemolo, R., Zebouni, F., Edel, Y., Jacquet, J., Ruggeri, O., Burnens, E., Monney, G., Protti, A. S., Etter, J. F., Khan, R., Cornuz, J., & Zullino, D. (2013). Impact of a board-game approach on current smokers: a randomized controlled trial. *Subst Abuse Treat Prev Policy, 8*. https://doi.org/10.1186/1747-597x-8-3
Kijanka, J., & Trzewiczek, I. (2012). *Robinson Crusoe: Adventures on the Cursed Island*. Portal Games.
切池 信夫（2009）．摂食障害――食べない , 食べられない , 食べたら止まらない――　医学書院
北原 保雄・久保田 淳・谷脇 理史・徳川 宗賢・林 大・前田 富祺・松井 栄一・渡辺 実（編）（2000）．日本国語大辞典（第 2 版）　小学館
Klamer, R., & Markham, B. (1960). *The game of life*. Milton Bradley.
Konstantakopoulos, G., Tchanturia, K., Surguladze, S. A., & David, A. S. (2011). Insight in eating disorders: Clinical and cognitive correlates. *Psychological Medicine, 41*, 1951-1961. https://doi.org/10.1017/s0033291710002539
Kwapiński, A. (2018). *Nemesis*. Awaken Realms.
Leacock, M. (2013). *Pandemic: A New Challenge*. Z-Man Games.
まさき まほこ（2013）．もう独りにしないで――解離を背景にもつ精神科医の摂食障害からの回復――　星和書店
McFarland, B. (1995). *Brief therapy and eating disorders : A practical guide to solution-focused work with client*s. Jossey-Bass.
道木 美晴（2023）．涙を食べて生きた日々　二見書房
三井 知代（2006）．女子大学生を対象とした摂食障害予防的介入プログラムの効果　日本心療内科学会 プログラム・抄録集，*11*，61.
三井 知代（2007）．女子大学生を対象とした摂食障害予防的介入プログラムの開発　神戸親和女子大学研究論叢，*40*，259-269.
Moyersoen, F. (2004). *Saboteur*. AMIGO.
中井 義勝・久保木 富房・野添 新一・藤田 利治・久保 千春・吉政 康直・稲葉 裕・中尾 一和（2002）．摂食障害の臨床像についての全国調査　心身医学，*42*，729-737.
中村 英代（2011）．摂食障害の語り　新曜社
中村 このゆ（2014）．まっ，いっか！摂食障害　晃洋書房
中里 道子（2021）．摂食障害の動機づけについて　日本摂食障害学会雑誌，*1*，12-18. https://doi.org/10.50983/jjed.1.1_12
西園マーハ 文（2009）．摂食障害の治療における“連携”の意味と方法論　診断と治療社
野村 佳絵子（2008）．かなりあしょっぷへ, ようこそ！　筒井書房
Phelps, L., Sapia, J., Nathanson, D., & Nelson, L. (2000). An empirically supported eating disorder prevention program. *Psychology in the Schools, 37*, 443-452. https://doi.org/10.1002/1520-6807(200009)37:5<443::AID-PITS4>3.0.CO;2-8
小原 千郷・鈴木 眞理・西園マーハ 文・末松 弘行・鈴木 裕也・山岡 昌之・石川 俊男・生野 照子（2020）．一般女性における摂食障害の認識調査　心身医学，*60*，162-172. https://doi.org/10.15064/jjpm.60.2_162
岡村 心平（2022）．心の健康教育とメンタルヘルス・リテラシー――「予備」のレトリックからフォーカシングを捉え直す――　神戸学院大学心理学研究，*4*，79-89. https://doi.org/10.32129/00000235
Ono, T. (2023). 日本語版ボードゲーム発売，年間 200 タイトル弱に減少　Table Games in the World Retrieved January 12, 2024 from https://tgiw.info/2023/12/jversion2023.html
Rosenberg, U. (2007). *Agricola*. Lookout Games.
摂食障害全国支援センター（2014）．摂食障害のよくある誤解　摂食障害情報ポータルサイト　Retrieved January 12, 2024 from https://www.edportal.jp/about/about_misunderstand.html
摂食障害全国支援センター（2022）．10 代のあな

たへ　摂食障害情報ポータルサイト　Retrieved January 12, 2024 from https://www.edportal.jp/trouble/trouble_teen.html

Stice, E., & Ragan, J. (2002). A preliminary controlled evaluation of an eating disturbance psychoeducational intervention for college students. *International Journal of Eating Disorders, 31*, 159-171. https://doi.org/10.1002/eat.10018

Stice, E., & Shaw, H. (2004). Eating disorder prevention programs: a meta-analytic review. *Psychological Bulletin, 130*, 206-227. https://doi.org/10.1037/0033-2909.130.2.206

杉山 英子・横山 伸（2010）．摂食障害の発症予防は可能か――やせ礼賛文化との共生を目指して――　長野県短期大学紀要，*65*，19-25.

鈴木 眞理・小原 千郷・堀川 玲子・小川 佳宏（2013）．東京都の高校の養護教諭へのアンケートによる神経性食欲不振症の疫学調査 日本心療内科学会誌，*17*，81-87.

鈴木 朋子（2017）．栄養教育の視点からの摂食障害の予防教育に関する研究 大阪樟蔭女子大学研究紀要，*7*，215-224.

tanQ (2020). *免疫レンジャー* . tanQ Inc.

東畑 開人（2020）．心理教育の人類学――予防･布教･マーケティング――　榊原 英輔・田所 重紀・東畑 開人･鈴木 貴之（編）心の臨床を科学する（pp. 101-118）　新曜社

上原 一紀･飯島 玲生･石神 康秀（2023）．ボードゲームが人を変える，まちを変える――シリアスゲームの活用とつくり方――　公職研

Viggiano, A., Viggiano, E., Di Costanzo, A., Viggiano, A., Andreozzi, E., Romano, V., Rianna, I., Vicidomini, C., Gargano, G., Incarnato, L., Fevola, C., Volta, P., Tolomeo, C., Scianni, G., Santangelo, C., Battista, R., Monda, M., Viggiano, A., De Luca, B., & Amaro, S. (2015). Kaledo, a board game for nutrition education of children and adolescents at school: Cluster randomized controlled trial of healthy lifestyle promotion. *European Journal of Pediatrics, 174*, 217-228. https://doi.org/10.1007/s00431-014-2381-8

Watson, H. J., Joyce, T., French, E., Willan, V., Kane, R. T., Tanner-Smith, E. E., McCormack, J., Dawkins, H., Hoiles, K. J., & Egan, S. J. (2016). Prevention of eating disorders: A systematic review of randomized, controlled trials. *International Journal of Eating Disorders, 49*, 833-862. https://doi.org/10.1002/eat.22577

山川 宏・市瀬 龍太郎（2012）．キャリアデザイン育成ゲーム教材 Happy Academic Life 2006 の制作・普及・進展 情報の科学と技術，*62*，514-519. https://doi.org/10.18919/jkg.62.12_514

山蔦 圭輔（2021）．摂食障害予防を目指した心理教育プログラムの開発――Body image の変容を目的とした認知行動療法的介入――　女性心身医学，*26*(2)，196-207. https://doi.org/10.18977/jspog.26.2_196

矢野経済研究所（2023）．【矢野経済研究所プレスリリース】アナログ（非電源系）ゲーム（ボードゲーム，カードゲーム分野）市場に関する調査を実施（2022 年）　Retrieved January 12, 2024 from https://www.dreamnews.jp/press/0000278045/

與那覇 潤・小野 卓也（2023）．ボードゲームで社会が変わる　河出書房新社

吉田 裕彦･井上 雅彦（2008）．自閉症児におけるボードゲームを利用した社会的スキル訓練の効果（実践研究）　行動療法研究，*34*，311-323. https://doi.org/10.24468/jjbt.34.3_311

―2024.1.19 受稿　2024.1.31 受理―

2023 年 9 月 27 日（水）15:30 ～ 17:00
心理学大実験実習室 1

刑務所の現状と今後について

松山刑務所所長　高野 洋一

はじめに

道重 さおり：それでは定刻となりましたので，2023 年度，学術講演会の方を開催させていただきたいと思います。本日ご登壇いただいておりますのは，松山刑務所の所長の高野洋一先生です。まず簡単に高野先生の略歴の方をご紹介させていただきたいと思います。

高野先生は，平成 5 年に法務省矯正局に採用されております。平成 27 年に高松刑務所の総務部長，平成 29 年に法務総合研究所の研究部研究官に就任されております。そちらの方で，実は犯罪白書の作成にも携わられておりまして，日本の犯罪の現状にも，非常に知見の深い先生です。そして令和 2 年に，横浜刑務所の総務部長，令和 3 年に，高松矯正管区第 2 部長に就任されております。そして令和 4 年に，松山刑務所の所長に就任されて，本日このようにご登壇いただいております。

実は私と所長の出会いをお伝えしますと，出会いと言うと語弊がありますが，私からすると非常にラッキーな出会いでした。昨年の犯罪心理学会のときに，私の方が，他の研究班で，更生保護施設に帰住する薬物事犯者の地域支援のポスター発表をしていました。幸いにも対面でしたので，ポスターの前に立っていると，質問をいただいて，「これはこれでこうなのです」というのを交わした後に名刺交換をしたら，松山刑務所の所長だということが分かり，「おー」となったという，そういう出会いでした。非常に関係は短いのですが，実はその後，見学に行かせてもらったり，あとは刑務所では受刑者に対して，再犯防止のためのグループワークを実施されているのですが，そこに関わらせていただいたりしています。所長からは，非常に私自身もお力添えを頂いておりますし，いろいろな知見を学ばせていただいているところですので，皆さんにもぜひ聞いてほしいと思い，大変厚かましくも，所長に講演のお願いをしたというところです。

それで，フライヤーにも書いておりましたが，今年，刑法が改正されまして，懲役刑というものがなくなります。拘禁刑というものに一本化されるのですが，そういった経緯や背景，それによって日本の刑務所がどう変わっていくのかという，そういったテーマで，今回，話をしていただくことになっております。現場のトップが来るというのは本当にないことです。本当に稀有な存在ですので，こうやって皆さんに知ってもらわなければいけないというお考えの所長です。ぜひ皆さん，お聞きいただければと思います。

それでは，すみません。私の話が長くなりましたけれども，よろしくお願いいたします。

我が国の犯罪状況について

高野 洋一：よろしくお願いします。高野です。

道重先生は，トークがあのような感じで，いつも面白いのですか。そうですか。私は，今日は，大学の先生がたくさんいて，学生もというお話を最初聞いていたものですから，前の方にいる方が若い人が多いと思うのですが，先生ですか。同じ人にばかり話しかけていますが，前の方は，恐らく学生さんですね。私は，誰が前でも誰が後ろでもいいのですが，今日のこれを聞いて，課題はあるのでしょうか。それはないですか。では，皆さん，好きに聞いてください。人生の中で，何か役に立つことがあればとは思いますが，それだと少しハードルが高いので，「ふーん」というぐらいのものがあればいいなと思ってしゃべります。

最初から少し難しいことなのですが，犯罪をして刑務所に入ってしまった人が，出所した後，また犯罪をしないようにしようというために，日本で法律を作っています。再犯防止推進法です。この法律の中で，国民の皆さんに再犯防止について知ってもらおうと，法律でわざわざ書いています。この法律を受けて，再犯防止推進計画というのを，国と各自治体が作らないといけないというふうになっています。たくさん書いてありますが，要約すると，皆さんもそうだと思いますが，再犯防止

というのを聞いたことがありますかという話です。私たち法務省の人は，皆，もうこれが一番大事だというような感じで仕事をしています。けれども，国民はみんな知らないというのを，国が認めているのが，この再犯防止推進計画の課題というところです。法務省や日本政府にしては，素直だと思いませんか。認めているのです。なおかつ，こうやって学校でお話しするような法教育をして，国民の理解を深めてもらわないと駄目だというふうになっています。この右側のポスターですが，再犯防止啓発月間というのが 7 月にありました。知っていますか。何となくポスターのこの女性は，見たことがあるとか，目に入ったことがあるかもしれませんが，こんなこともやりながらアピールをしているのですが，国民に全然伝わらないのです。

これはまた，今期立ち上げたものです。法務省の幹部から，私たち刑務所長で，年に 1 回，法務省に集められて会議をやるのですが，そこでハッパを掛けられているわけです。「おまえら頑張ってこうこうやれー」というような状況です。道重先生は，「そんな，所長が来るのなんて珍しいんですよ」と言うのですが，それは大違いです。今，年に 1 回以上は，私たち所長は，どこかの大学に行ってしゃべらないといけないのです。私はおしゃべりなので，もっとしゃべっています。というのも，法務省で広報を何年か担当していたので，やらなければいけないという責任感があるものですから，そういうことでやっています。ですからお誘いがあったからというよりも，お誘いに，もう乗りたくて乗っているという状況です。ここから少しずつ中身に入ります。

まず皆さん，普通は犯罪というのを知らないですよね。ということで，犯罪の関係のご紹介です。まず刑務所に入ってしまう人が受刑者ですが，これは，受刑者になるまでの道のりのようなものです。まずお巡りさんが捕まえます。お巡りさんは地方公務員です。お巡りさんが捕まえて，しかるべき時間，捜査をして，簡単な道交法違反などそういうのは，もうそれで処理終結となるのですが，多くは検察官に送致されます。裁判にかけるのは検察官です。検察官が，裁判にかけるかかけないかを決めます。3 分の 1 が起訴されます。逆に言うと，3 分の 2 は起訴されない，要は裁判になりません。皆さんも，芸能人や有名人が，起訴されない不起訴，起訴猶予などという，そういう単語を聞いたことがあるのではないかと思います。もう一定程度社会的な制裁を受けているとか，もう弁償しているとか，そういったことを総合的に考慮して，検察官が起訴，不起訴を決めます。起訴した人は裁判にかけられます。後ほど資料で紹介しますが，日本では，裁判の結果はほとんど有罪です。ほとんど無罪になりません。有罪になって刑が決まります。この下に死刑とありますが，ここの列ですね。これは刑法で決まっている刑罰なのですが，8 割がたは，一番上の罰金過料というところです。要は，お金を払っておしまいです。残りの 2 割が，真ん中の懲役と書いてあるところです。ほとんどが懲役なので，懲役受刑者です。しかしその中でも，「刑務所に行ってこい」となるのは，またさらに制限されます。実刑というのが，「刑務所に行ってこい」なのですが，ほとんど執行猶予が付きます。ですから刑務所に行くのは，ここの検察官が起訴してから，だいたい 2％ぐらいです。犯罪をしたからといって，そう簡単に「刑務所に行ってこい」にはならないのです。逆に言うと，刑務所に入っている人は，初めて刑務所に入る人でも，相当問題があるから入っているわけです。

先ほど口頭で説明したところです。

これは大変難しいので，ぱっと見だけで結構です。昭和 21 年から，右に向かって令和 3 年までの棒グラフです。刑法犯といって，刑法にいろいろな犯罪の罪名が書いてあるので，刑法犯というもので，いろいろな犯罪の統計を見ることが多いのですが，刑法犯がどれだけ増えたり減ったりしているのかということを，棒グラフで示しています。ぱっと見で分かるとおり，平成の 15 年前後辺りが大変高くなっています。犯罪は平成の 14 年がピークです。これ以降，20 年連続で減っています。ここがまず大人の体感と違うところです。20 年連続で減っていって，令和元年に少し減り過ぎてしまっています。コロナの影響で，皆さん外に出なくなって，令和 2 年かもしれませんが，減り過ぎて，そのために令和 3 年から増えそうかなとなって，結局，令和 4 年に，犯罪が令和 3 年より増えました。ですから 20 年連続で，記録はストップしました。ただ基本的には，犯罪は大変減っているという状況です。戦後といわれている昭和 21 年以後で見ても，非常に少ないというのが，今の日本の治安状況になります。

この折れ線グラフは検挙率で，要はお巡りさんが見つけた犯罪のうち，どれぐらい犯人を捕まえているかということが検挙率です。ですから，上がれば上がるほど，国民としてはいいはずです。基本的には右肩上がりでしょうか。難しいですよね。皆さん，やっている学問からすると，こういうのは大丈夫そうですよね。もう，私は老眼で全く見えませんが，平成 24 年から，縦に 10 年間，裁判で出た判決というのは，どういう判決が出ているかという資料になります。赤枠で囲っているのが，まず総数です。平成 24 年が 40 万件ぐらいです。令和 3 年は 21 万ということで，半減しています。要は裁判にかかる人が，それだけ減っているのです。半減ですよ，半減です。大変なことだと思いませんか。

先ほど，少し無罪の話をしました。一番右端の無罪は，結論として，この 10 年，ほとんど変わっていません。これから言えることは，無罪になりやすくなったということです。なりやすくなっても，令和

3年で見て，2,500人に1人です。2,500人に1人が無罪になるということです。ですから日本は，起訴されたら，もうほぼ有罪なのです。もう逃れられませんというぐらいの国です。

あとは大人向けという感じですが，ここに死刑と無期懲役があります。これも半減しています。ですから，ただ単に犯罪が減っているだけではなく，凶悪犯罪も同じように減っているのです。たぶん体感と違うと思うのですが，そんな状況です。

少し対象は古いのですが，これは日本，フランス，ドイツ，イギリス，アメリカの5カ国の，5年間のうちの強盗がどれぐらい起きているかというものです。この場合，発生率という，人口10万人当たり，何人が被害に遭っているかという数字です。日本だと，10万人当たり1人か2人が強盗の被害に遭っています。他の国を見ていただくと，多いです。もう桁違いです。これはあくまで強盗ですが，いろいろな犯罪でこういう比較をしています。日本というのは桁違いに，もう明らかに治安のいい国です。皆さんは統計がお詳しいと思うのですが，統計的観点から見ると，もともとの，どういうのを強盗と捉えるかとか，そういうところが各国でまちまちなので，厳密には比較できないという体になりますけれど，一応のつかみとしては，そんな状況です。

次に大麻の話です。犯罪は減っているのですが，これが増えているのです。増えているなどというものではないぐらいの増え方です。平成24年からか，ずっと増え続けています。年代として20代が多いです。今日は，学生さんは20代が多いのですか。

これは脱線ですけれども，大麻草という植物です。ここからできていますということです。これは，先日高校生の授業で，薬物乱用防止をお話し願いたいということで，話したときの資料です。やはりビジュアルで見ると，何か違うのではないでしょうか。上の方が大麻リキッドとか大麻ワックスというもので，要は大麻を濃縮したものです。電子たばこのように吸ったりします。大麻クッキーや大麻チョコレートなどもありますが，インターネットで販売されたりしているものに，手を出しては駄目なのです。ですから，今SNSを通じて容易に入手できるということです。皆さんはもういい大人なので，大麻の有害性は分かると思います。もう皆さんは成人ですから。

私のように刑務所長などをしている者からすれば，百害あって一利なしです。大麻を使う人にとっての，こういうメリットがあるという欲望は，他で満たしてくださいと言いたいです。薬として満たす必要はございません。人生がもう終わってしまいますから。たばこはやめられる人がいます。先生の中にもいるかもしれません。しかし薬物は，これはやめられません。薬物は，たとえ1回やっただけでも乱用という言葉を使います。ルールにのっとって使っていないということを乱用といいます。これは駄目なのです。もう刑務所にもたくさん薬物の関係の人が入っていますが，禁断症状で，フラッシュバックといって幻覚が見えたりして，大変な状況です。やれる環境になると，ですから刑務所を出ていくと，またやりたくなってしまいます。なかなかやめられません。専門家の中には，もう一生治らないというふうに，言う方もいるぐらいです。そういうことで，言いたいのは，「やらないでね」ということです。

その他，増えている犯罪としては，児童虐待です。これは増えています。これは，棒グラフが件数ですが，端的に非常に増えていますということです。これは，たぶん皆さんの方がお詳しいかもしれません。

これは非常に難しいのですが，皆さんは頭がいい方たちなので，少しだけ紹介をします。これは犯罪白書というものに載っていながら，犯罪統計をやっている人の間でも，もう日の目を見ない統計資料です。いろいろ器物損壊など，人が被害者でないものもたくさんありますが，人が被害者となったものを，被害者の年齢で，まず縦の列で分けています。それをさらに男女で見て，この殺人なら殺人などで，被害に遭いやすい，実際に遭っている人というのは，どの年代のどの性別の人が多いのかということをまとめた資料です。すごく分かりにくいのですが，この殺人と書いてあるものの，1つ上の行に，括弧書きであるところです。これが女性比ですから，それぞれの年代の中で，女性が占める比率を示しています。ですから，今日の学生さんの年代が，20代が多いと仮定すると，20代だと38.8％です。被害に遭った20代の人のうち，約4割は女性だったということです。この4割というのは，他の年代で見てみると，結構高いのです。確か3番目です。13歳未満と，65歳以上です。65歳以上は，特殊詐欺の被害者が，もう高齢女性が圧倒的に多いので，65歳以上の女性の比率が上がるのですが，20代というのは，他の年代より，女性が被害に遭いやすいのです。今，目の前にいらっしゃる女性がたくさん目に入るので，あえてお伝えします。見ていると，性犯罪はどうしても女性が被害者になってしまうのですが，脅迫が多いのです。5割以上が女性です。

加害者の実際について

後ほどこの資料で話しますが，一方で加害者ですが，加害者というのは，10人の犯罪者がいたら9人は男性です。犯罪は，男がやるものですと言ってもいいぐらいなのです。しかし，被害に遭うのは，こういう状況です。結構女性も多いという状況です。あと皆さんの年代だと，おじいさん，おばあさんになると思いますが，詐欺の被害です。詐欺は，7割，8割ぐらいの結構な割合で，女性が被害に遭っています。詐欺といっても，この中の多くは特殊詐欺が占めているので，広報などでされているとおりです。

ちなみに特殊詐欺は，固定電話にかかってくることが 9 割だそうですので，固定電話には出ないようにと，おじいさん，おばあさんに，よくよく伝えるということが大事です。

片や，非常に減っているのが暴走族ということで，もう皆さんは関係ありませんね。そもそも知らないでしょう。後ろの方などがこれです。これは減っています。何しろ私たちの年代から言ったら，ゲームセンターも変わりました。もう普通の健全な人は入れないところが，ゲームセンターでした。今は子どもも入っていますし，外国人なども，もう夢中でクレーンゲームなどをやっています。

一方で，少年の関係で増えているのは，家庭内暴力が増えています。これはコロナ禍でも，ぐっと伸びています。DV なども，コロナ禍では，世界各国で伸びたようですが，このような状況です。ちなみにこれは，一番下の色の緑色は小学生なのです。近年問題になっているのは，小学生の伸びが多いことです。家庭内暴力が低年齢化しています。そこが 1 つ，この数字上見て取れるというところです。

刑事施設とは

ということで，犯罪の紹介は終わりまして，私の本業の刑務所についてお話しします。今，タイトルは「刑事施設」と書いているのですが，これはもう法務省の専門用語です。刑務所や拘置所を合わせて，法律でそう呼んでいますということで，ここでは基本的に刑務所というふうに説明します。府中刑務所は，日本一の刑務所です。東京にある立川拘置所など，格好いいものもありますが，冒頭に映っていたとおり，松山刑務所というのは，何か差別されているとしか思えません。築 52 年ぐらいです。最初のものは例外です。刑務所というのは，どこもぼろいです。私は，今日，四国から来ているわけですが，四国も各県に 1 つずつ刑務所があって，基本的にどこもぼろいです。なぜか分かりますか。建て直すには，皆さんの税金を使う必要があるのですが，財務省というところが，お金をくれません。ミサイルを 1 発撃つのにはお金を与えるのに，こういうところには，お金をくれないのです。法務省というのは，お金を勝ち取る能力が低い役所として，もう有名なところなのです。いわゆる政策官庁と呼ばれていません。ですから政策として，再犯防止を打ち上げているという面もあるのです。初めて政策官庁になるぞという感じです。

何にしても金がないのです。皆さんの中のご意見は違うかもしれませんが，犯罪者，受刑者を入れるところとして，あまり立派なところに入れると，腹が立つらしいのです。腹が立つ人にとってはという話ですが，皆さんも分かると思います。これからいろいろ資料を紹介すると，多くの人は，少しやり過ぎではないのかと必ず思います。今日は，感想文はありませんが，感想文などを頂くと，「ほにゃららなのはいかがなものかと思う。犯罪をした人なんだから，被害者なんてたまらない，そんなのは」とか，そういう感想が多くなります。ですので，建物はぼろいですということです。

刑務所に入る人の男女別で，どんな犯罪をしたから刑務所までたどり着いているかという資料です。ここに，性別の下に，括弧で対象者の人数が書いてあります。これを見れば分かるとおり，9 対 1 ぐらいの割合です。ですから，ほとんど悪い人は男です。気を付けてください。男の人，女の人もそうですが，1 位，2 位は一緒です。窃盗，覚醒剤です。足しても，ほとんど男の傾向と一緒です。3 分の 1 ぐらいが窃盗で，覚醒剤が 4 分の 1 ぐらいというのが，もう近年ずっと変わらない比率です。女性は，もう半分ぐらいが窃盗です。やや意外かもしれませんが，覚醒剤がこんなに多いのです。女性は，大麻の場合もそうなのですが，付き合っている男，それが問題で薬に走るというのが，典型的なパターンです。ということで，もう私が言いたいことは分かりますね。きちんと選んでください。

あとはそんなに大した特徴はありません。年齢層です。皆さんの年代，学生さんの年代は，そんなに犯罪者になりやすい年代ではないところです。今，日本社会で大きく問題になっているのは，一番右端です。高齢者と呼ばれている人たちが，犯罪者でも増えています。一般社会でも高齢者がどんどん増えているということで，刑務所も変わらず増えています。これが日本の特徴です。他の国では，一般社会で高齢者が増えたから，イコール刑務所の中でも増えるということは，普通はありません。刑事司法では，そんな，もう高齢の人などは，多少の犯罪をしても，刑務所に入れないで，福祉で社会の中で世話をするという国が多いのです。日本は，もう機械的にベルトコンベヤーに乗った感じで，高齢だろうと関係なく，刑務所へ行ってこいです。ですから，刑務所があふれてくるのです。高齢者については，また後ほどお話しします。

受刑者の実際について

これは少し難しい話です。ザ・刑務所なのですが，受刑者という人たちが，刑務所に入ってから出てくるまで，どういうことをやるかということです。収容されている刑務所の中で刑が決まります。刑が決まりますと，皆さんのように心理に詳しい職員というのが，必ず各刑務所にいますので，そういう人がアンケートを取ったり，こういう人たちを分析したりというのを，処遇調査という名称で調査を行います。その結果，この人はどこの刑務所に収容するのが適切かというのを決めます。この，今言っている

どこの刑務所にというのは，日本の中では，刑務所ごとにカラーがあります。まず大きな違いは，初犯か累犯かです。要は初めて刑務所に入る人か，何度も出入りしている人かです。そこでまず刑務所を分けます。私のいる松山刑務所は，初犯の人が入る刑務所です。何度も犯罪を繰り返してしまっている人や，暴力団が入る刑務所というのは，兵庫県ですと，神戸刑務所が代表的なところです。非常にたくさん入っています。特に兵庫県といえば，暴力団のメッカでございます。そういう累犯の刑務所ですので，4割ぐらい，暴力団の人が入っています。そういう，神戸何とやら組の人たちを，いつも神戸刑務所に入れていたら，大変なことになってしまいます。そこがもう，完全に別荘のようになってしまいます。ですから，いろいろな刑務所に分散収容します。ということで，ここの段階で，どこの刑務所に収容するかということを決めます。ですから，必ず犯罪をした都道府県の刑務所に入るわけではありません。

では，受刑が始まりました。始まると，ここに3つ，作業，改善指導，教科指導というのが書いてあります。これは法律で，この3つをやるということになっているのですが，今法律でと言った法律は，刑法ではない法律で書いてあって，もっと根本的なことを規定する一般法として，刑法があります。刑法の中で，懲役刑というのがあります。受刑者のほとんどが懲役刑なのですが，懲役刑は刑務作業をやらなければいけないというふうに書かれているので，受刑者は，現状，ほとんどの時間は刑務作業をやっています。刑務所は，見学に来ると分かるのですが，一般社会とは全く異なる独特な生活のスタイルなので，出所間近になると，出所前に，少し一般に慣れさせるための準備期間というのが2週間あって，そして出所していきますということです。また後ほどいろいろ紹介をします。

こういう（足枷をしている受刑者のイラスト）イメージを持っていますか。この間，高校生に講義をしたら，持っていましたと言っていました。ショックでした。だいたいこんなのを付けさせていたら，もう人権上，重大な問題です。日本政府が立っていられなくなります。実際の写真を見てもらいますが，こんな感じの緑のもの（受刑者の衣類）です。15年前ぐらいまでは，何か暗いグレーでしたが，少しイメージアップを図って，この色になりました。そしたら高校生から，いや，逃げられたときのために，もっと目立つ色の方がいいのではないですかというご意見を頂戴しました。部屋もこのようなイメージ（牢屋のイラスト）は，ありませんか。これは結構あると思います。視聴率の高かった「VIVANT」のドラマの，何か松坂桃李君が捕まっている，何もないところを思っているかもしれませんが，基本的にこれが1人部屋です。3畳という言い方は，今の人は分かりますか。3畳で，奥に便器があります。こんな感じです。集団の6人部屋だと，こんな感じです。日本の場合，ほとんどの刑務所は布団で寝ます。最近できた刑務所は，ベッドという違いがあります。部屋の中にトイレがあるので，1回入ってしまったら，もう職員が扉を開けるまで，出入りはできません。ですので，ここが扉なのですが，中から開けるための取っ手が付いていません。中からは開けられない仕組みになっています。いずれ道重先生の引率で，どこかへ見に行ってください。

遠くからで，全くぱっとしない写真で恐縮なのですが，食事のことを紹介します。まず主食です。週に1食だけパンが出ますが，あとは全部米食です。米7，麦3の割合です。昔，臭い飯といわれていたのですが，少し昔までは米が6，麦が4だったので，そういうのもあって，もっと黒かったのです。各刑務所に，必ず管理栄養士さんが勤務していまして，その方を中心に，栄養のバランスが取れるようなメニューを考えています。受刑者の食事の特徴ですが，まず立ち直ろうという気が全くない受刑者が，必ず刑務所には，結構な数が入っているので，そういう人たちにとって，何が刑務所の楽しみといったら，これなのです。ですから，刑務所の中の治安を安定させるには，食事に力を入れるのです。刑務所というのは，どこの刑務所も，食事には力を入れています。どこの刑務所も，1カ月の中で，同じおかずは1つも出しません。栄養のバランスも取れています。あとおかずについては，国の予算が決まっていて，毎年変わるのですが，今年でいったら，1日3食を，1人420円で賄わなければいけないというふうに決まっています。物価高で，今悲鳴をあげています。だいたい食事のことを，ここまで丁寧に説明を聞くと，犯罪者にどうしてと，ご不満な方が出てきます。だいたい単身赴任している刑務所の職員より，いいものを食べています。中に入っている受刑者が，1人，1日当たり，生活するために幾ら掛かるかというのは，約2千円，1日に掛かっています。これは，もう皆さんの税金です。この他，職員の人件費というのが，上乗せされていきます。

受刑者の平日の1日です。6時50分に起きて，部屋の中でご飯を食べて，身支度を整えたりして，居室から工場と呼ばれている場所に出て，刑務作業を夕方までやるというのが，受刑者の基本です。そんなことを書いています。途中で2回休憩があります。面会の人が来てくれたら，面会に行って，30分ぐらい面会をします。また平日は，30分の運動の時間というのが与えられます。グラウンドに出て，運動をします。というのがあって，夕方また元の部屋に戻って，夕食が5時です。それで余暇時間ということで，夜9時に就寝です。9時就寝ですよ。前の方に座っている方々，いますか。もう，たぶん日本全国，基本的にどこもそうです。これは，私たち職員側の事情です。寝てしまえば，ここからもう職員を減らせ

るのでという事情です。あと食事ですが，夕食が 5 時です。5 時に食べている人はいますか。5 時に食べて，次の日の朝食は 7 時です。これはもう，日本全国共通です。昔は，病院もそうでした。しかし，病院がだんだん患者側に寄り添うようになってしまって，今，夕食の時間が遅れてきているので，ライバルがいなくなってしまっています。朝食は，たいしたものは出ません。主食と，本当にのりと漬物が出るという程度なのですが，これだけあいているので，朝食は，皆さんは本当においしそうに食べます。

今, 映っていますが, お風呂です。お風呂は, 週 3 回, 1 回 15 分です。男の人だと，その間にひげそりもします。

刑務作業をやっているシーンです。あまり詳しいことを言っても仕方がないですが, パソコンに向かって, 職業訓練というのをやっています。職業訓練には, いろいろなバリエーションがあるのですが，これはそのうちの 1 つです。右側にあるのは，社会貢献作業といって，ボランティアです。ボランティア作業をやると，それだけ人に喜んでもらう，そういうのに貢献するということで，やっている側も心が動きます。それで立ち直りにつながればいいなということで，導入しているものです。今，全国的にどこも，教育委員会を通して，小学校などの机や椅子を直してあげるというのをやったりしているのが，一番ポピュラーなものです。

これは，職業訓練でこんなことをやっていますという紹介です。少し遠くて見えないと思いますが，農業をやらせたり，介護福祉をやらせたり，あとは美容科，床屋をやらせたりしています。これは松山刑務所でやらせているものです。そんなようなことをやっています。右側は全部建築系です。刑務所を出ていく人の半分は，建築業界に就職をします。そのような取り組みをやっています。

あとは，刑務作業と，もう 1 つ大きな柱として，改善指導というのがあります。薬物の犯罪をしてしまった人には，もう二度と薬物をやらないような指導を行うということで，その中でも特に法務省が中心となって，全国の刑務所が同じようにやりなさいというようにマニュアルを作って，力を入れてやっているのが，この 6 つの改善指導というものになります。メンバーを厳選して，その厳選したメンバーを，短期集中でこの指導を受けてもらうというもので，写真であるような感じです。講義形式でやったり，みんなで話し合いのようにやったりということで，やっています。皆さんの道重先生も，松山刑務所で，とある改善指導のご担当をしていただいていて，こういう受刑者も，すぐ近くで，一緒に話し合いをしているというようなことをやっています。

あとはお勉強の関係です。これは学歴です。受刑者になる人の学歴がどうかということで，学生の皆さんは，今，10.9％のゾーンに入っています。良かったですね。中卒，高校中退，高卒ゾーンに入っていると，もっと犯罪者になりやすいという，統計的な傾向があるので，もうここまで来てしまえば，そうそうなりません。大卒や大学中退は，犯罪者の 10 人に 1 人しかいません。現にそうなのです。IQ の低い人が多いのです。

その他，これは少し細かい話です。上の中学校課程と書いてあるのは，長野県の中学校が，刑務所を分校と指定してくれて，刑務所の中で，中学校のお勉強をするという取り組みをしています。また通信制ということで，2 つの刑務所が指定されていまして，受刑者が通信制で教育を受けるということも，やらせてもらっています。また高卒認定試験ですが，これは文部科学省が法務省と，大変力を入れてやっていることで，毎年各刑務所に収容されている受刑者が，結構積極的に受けております。ということで，お勉強ができないから，それが犯罪の，1 つの背景や原因になっていると言う人もたくさんいるので，お勉強を頑張ろうねということです。なかなか頑張らないのです。

刑務所は，私たちのような刑務所の純粋な職員だけではなくて，道重先生もそうですが，外の方にいろいろと支えてもらいながら運営されています。例えば刑務所にも，普通の中学，高校のように，クラブ活動というものがあります。発散させなければいけません。またそういうことを通して，立ち直る意欲が喚起される人もいるので，いろいろな文化的なことが中心ですが，クラブ活動をやっています。それを教えるのは，こわもての刑務官と呼ばれている刑務所の職員ではなく，外の人たちです。来て，やっていただいています。

あとは宗教の関係です。これは政教分離で，私たちは宗教に関われないので，外の方が来てやってくださっています。

医療ですが，医療費はただです。ただにすると何が起こると思いますか。皆さんでも，少しでも調子が悪かったら，ただだったら風邪薬を飲もうと思いますよね。それと一緒です。受刑者は刑務所に入ると，まず「医者，診察してくれ」という要望を言ってきます。社会では，病院に行かないのです。しかし，ここはただですし，暇も，うなるほどあります。一番多いのが腰痛です。腰痛は，分からないのです。私たちは，詐病と呼んでいますが，この見極めは，犯罪者との駆け引きです。本当はどうなのかと，私たちも，隠れてチェックをしています。「いや，受刑者，あそこでは動いてましたよ」と，医者に報告をして，医者に判断をしてもらいます。いずれにしても刑務所は，医療法上，診療所，あるいは規模の大きい刑務所ですと病院の指定を受けています。ですので, 医療スタッフが勤務をしています。このスタッフでも対応できないときは，外の病院に連れていって治療をしてもらうこともありますし，あるいは手

術をして，そのまま入院ということをやっています。ですので，刑務所の周りの病院には，こっそり大変お世話になっています。

受刑者の高齢化

ここからは，少し高齢化の話をしたいと思います。これは少し古いのですが，各国の，人口に占める高齢者の割合，65 歳以上の人の割合が，これからどれぐらい増えていくかというものです。かなり古いのですが，2015 年を基準にして，うっすら縦棒があります。そこを基準にしてというものを，昔，犯罪白書に載せたので，それを紹介しますが，2015 年を見ても，特別に高いのが日本です。日本は，これは 2060 年まで上がります。推定値になっていますが推定値の世界で見ても，日本はトップを維持といいますか，もう高齢化率，高齢者率が非常に高いのですが，これに対応しなければいけないわけです。それには，もう皆さんのようなお若い方たちから，税金をがっぽり取るしかないのですが，要は 2015 年より，こちら側ゾーンではこんなに下にあるのに，右側に行くと，もう日本の 2060 年のころなどには，迫っている国があります。これは，韓国です。韓国は，今大変な勢いで高齢化が進んでいます。ですので，コロナ前には，韓国の刑務所の人が，どんどん日本の刑務所に視察に来ていました。日本の刑務所に高齢者があふれているので，どうやっているのかというのを見にきていました。もう，そんな状況です。ですので，アジアの 2 カ国が，欧米を超えていきます。ヨーロッパでは高齢者が多いというのでは，ドイツが有名です。

まずそんな状況がある中で，高齢者の受刑者の男女別で，どういう犯罪をして入っているのかというものですが，男性は半分が窃盗で，2 位が覚醒剤です。65 歳以上を越えても，10 人に 1 人の高齢受刑者は，覚醒剤で刑務所に入っているのです。いかにやめられないかです。下の女性高齢者はもう，犯罪の 9 割が万引きです。これは窃盗のほとんどが万引きです。この万引きも，中には金がないから万引きをする人もいますが，中にはいるという程度で，多くの人は将来が不安だからというので，お金を持っていても万引きをします。ここが難しいです。私は全国の刑務所で転勤を繰り返している者ですが，西日本に多いのです。東日本，東京方面の女性高齢犯罪者よりも，西の方が，女性高齢犯罪者の万引きが多いのです。

参加者：けち。

高野：そうです。その単語を，どなたかが言っていました。「けち」という単語です。私が言うと差し障るかもしれないのですが，何か文化が出ていますねというところです。これは，私たちが大変だという話を言いたくて，ここからの資料は準備しているのですが，これは年代別に縦で，60 歳から，65 歳からうんぬんということで，この年代の受刑者に，認知症かどうかということを調べました。これを調べたのは，平成 27 年なので，大変古いのですが，8 年前に調べても，実数として，それぞれの年代に，これぐらいの受刑者が収容されているようだというのが，一番下の行です。もう 8 年前の時点で，1,500 人ぐらいが収容されています。「そんなにぼけた人を刑務所に入れて，どうするのですか。私たちはそういう施設ではございません」というのが，刑務所が言いたいことです。ぼけた人は，犯罪者でも，そういう人のためのところに入れてくださいということです。こういう人たちが増えて困るのです。高齢者は，当然足腰も悪くて，こういうのに乗るとか，こういうのを引いてでないと，もう歩けないというふうな形で収容されている高齢者が，どこの刑務所にも当たり前にたくさんいます。おむつがないと駄目な人も，たくさんいます。右側の食事の関係でも，もう歯がないので，かめません。おかずもミキサーですりつぶして，主食もおかゆにして，七分がゆ，五分がゆ，三分がゆというように細かくして，それぞれに合わせて，食事も提供しています。

ちなみに，また食事で脱線しますが，アレルギーにも全て対応しています。宗教の関係も，全て対応しています。刑務所，すごいですよね。法務省は，国際機関に責められると弱いのです。

再犯防止について

刑務所に入って，また入ってしまった人を分析する統計データで，再入率という言い方をしています。日本政府は，この近年の 10 年ぐらい，刑務所を出てから 2 年以内に入ってしまう人の比率を減らそうというのを，目標にしてやってきました。やってきて，その率が減っているということを示しています。16％というのを目標としてやってきていて，それがもう，2，3 年前に達成されて，引き続き下がり続けているという状況です。

一方で，今再犯防止というところで，折れ線のところだけ見てください。問題になっているのは，犯罪の数も減っているし，戻ってくる人も減っているということで，お互いに減っているのですが，実は初めて犯罪をしている人という減りの方が，もっと減っています。そうなると，何が起きているかというと，結局犯罪者を見てみたら，再犯をしている人が多い，比率としては多いというのが，この折れ線です。再犯してしまう人が，なかなか減らないのです。犯罪者の中に占める，再犯者の比率を表しているのが，再犯者率なのですが，減りません。この再犯防止という，これをやらなければいけないということで，15 年前ぐらいから，日本政府は本腰を入れ出して，平成 28 年に，再犯防止推進法というのを作ったりし

ているところです。

犯罪者の傾向で，まず左上の円グラフです。犯罪をした受刑者，この刑務所にたどり着いた受刑者に，精神障害があるかどうかを調べてみると，15.3％が精神障害ありということで，刑務所は大変なのです。もうギャーギャーわめいてどうにもならない人というのが，何人も入っています。もう非常に手だけが掛かって，大変です。これはもう，見にきてもらっても，それはなかなか人権上見せられないことが多いのでできないのですが，ここは本当に大変な思いをしています。

住居がありません。これは犯罪をしたときに，住むところがあったかどうかを調べたものです。住所不定が 17.8％です。ですから，犯罪をした人の 6 人に 1 人は，住所がありませんでした。犯罪者がホームレスばかりなわけはないので，恐らく点々としている人も含めてだと思います。住むところがないのですから，犯罪をしてしまいますよね。そう思いませんか。とにかく住むところがないのです。

隣もまさにそうです。犯罪をしたときに，職に就いていたかどうかです。無職が 7 割です。働いていないのです。犯罪しますよね。親が養ってくれている分にはいいですが，ここが課題なのですということです。

日本政府としては，再犯防止するための推進計画というのを立てて，力を入れてやっていますという紹介です。SDGs は，私よりも皆さんの方がお詳しいと思います。17 の項目がある中の，16 番目に掲げられている平和というところです。この平和の実現のために，日本政府がアクションプランというのを作ってやっているのですが，法務省としては，この満期釈放者対策をはじめとする再犯防止対策の推進というのが，SDGs の平和に該当するということで，私は日夜 SDGs を頑張っています。職員には，私が，誇りを持ってやれと言っています。これはもう完全に脱線です。

ということで，無職が多い，住むところがないという，ここら辺が問題になっています。それでこの写真なのですが，例えば左側というのは，要は仕事を見つけなければいけないわけです。それも，塀の外に出てしまったら，また無職で犯罪をしてしまうわけです。現に，刑務所の目の前のコンビニで犯罪をして捕まっている人がいます。これが，もう現実なのです。ですので，いかに刑務所にいる間に，内定を獲得するかなのです。もう，皆さんより大変なミッションです。本人は就職活動もできないので，それを，私たち国の職員がお世話をするということをやっています。実際に採用面接を，刑務所にいながらオンラインで面接を受けるというのをやっています。ただ，皆さんが刑務所のことを知らないのと同じように，企業の人も刑務所のことを知らないのです。ですので，刑務所を知ってもらおうというのが，スタディツアーというもので，実際に企業の方々で，そういうことに少しでも興味のある方々に来ていただいて，もう生で，こうやって受刑者は，刑務作業や職業訓練をやっているのですというのを見ていただきます。これは余計な人たちが写っていますが，そういう企画をやっていることを，メディアに取材してもらって，放送をしてもらって，さらにそういう情報を国民に提供するということをやりました。

右側の方は，座っているのは，みんな受刑者です。実際に受刑者を雇ったことがある企業の方に来ていただいて，講話をやっていただきます。「あなたたちはここがこう変われば，僕たちは対応したいと思ってるんですよ」というのを，熱く語っていただいています。この後の話なのですが，たいてい犯罪者には，常識がありません。出所するときに，受刑者たちは，最後に感想文のようなアンケートを書きます。もう出所するのだから，立つ鳥跡を濁し放題で，何を書いてももう関係がないので，彼らは好き勝手なことを書きます。飯がまずいなど，いろいろな不満を書くのですが，そのときに，彼らが一番よく書いているのは，「常識がない人が多過ぎる」なのです。これには困ってしまいます。しかしそうなのです。もう，いちいち常識がないのです。ということで，常識に不安のある方は，犯罪者になってしまうかもしれませんから，気を付けてください。ということで，きちんと挨拶をしようとか，もし人と会うのに遅れるときは，きちんと連絡をしようとか，そういう話をしています。もう悲しい話です。

実際松山刑務所では，去年 1 年間で見て，受刑者が内定を 25 件取っています。それぐらいよく世話を焼いています。

障害を有する受刑者について

あとは障害の関係を少し。知的障害と思われる受刑者ですが，令和 2 年に調査したのですが，刑務所の中に 1,345 名入っています。日本の刑事司法は，高齢者にも厳しい国です。刑務所に行ってこいです。日本は，障害者にも厳しい国です。ここからは私の偏見です。日本国は，弱者に厳しいです。先進諸国の中で，子どもの貧困率が高いのが，実は日本だというのを知っていますか。弱者に厳しいのです。ということで，それだけ入っています。なおかつ，その中で療育手帳というのを取得している人，自治体で支援して，もうここで支援してあげるとなっている人が 3 割しかいなかったということで，この人たちを何とかしなければいけないわけです。ことに知的障害受刑者は，もう出所したらまたすぐに犯罪をしてしまう人が特に多いので，これを何とかしなければいけないということなのですが，ここは難しいことを書いています。やらなければいけないことを

書いているのですが，はっきり言って，刑務所は全く分かりません，どうしたらいいのかということで，長崎刑務所というところを，「ちょっとおまえら，学べ」ということで，外のそういう専門の団体と協力して，どうしたら出所した後，知的障害の方々が犯罪を繰り返さないで済むか，そのために刑務所の中でできることは何かということを，今，お試しをいろいろ始めたところです。

一方で精神障害ですが，精神障害は先ほどやったのでいいですね。ちなみに，これは令和3年なのですが，少年院に入っている人のうち，3割は精神障害を持っています。これは，先ほど暴走族の話でしたとおり，少年院は年少と言われたりしていますが，少年院に入る人というのは，昔はワルでした。今は違います。もう生きづらさを抱えている人で，こういう人の中でも，精神的に問題がある人が，結構な割合を占めるという，そういう状況にあります。

西条刑務支所というのは，女性の刑務所です。愛媛県の，私の所管内にあります。調べた当時は，ここに68人収容されていましたが，そのうち精神障害の人が6割ぐらいいます。多いのです。

摂食障害ですが，摂食障害の人は，7割が窃盗をやっています。窃盗という犯罪名で，摂食障害を持っている人が，女性受刑者として収容されています。西条刑務支所で，もう各年代，数人ずついる感じです。摂食障害は，年を取っても，する人はするのです。本当に大変な思いで，ここの職員も，ずっと食べているところを見ています。食べ終わっても吐かないように，西条だと30分ぐらい，付きっ切りで見ています。食べられるものが，これが普通です。右端の方が，この人たち用に，少しボリュームを抑えて，食べやすく少し小分けにしてという，そんな工夫をしながらやっています。

あとトピックとして，農業の担い手がいなくて困っているというのは，もう皆さん分かりますよね。障害者の方では，働き口がなくて困っています。ですので，日本としては，農林水産省と厚生労働省がコラボをして，農福連携と呼んでいるのですが，マッチングを推進しようというふうに始めています。その中で法務省も，「俺も入れてくれ」ということで，近年手を挙げて，一緒にやらせてもらっています。要は生きづらさを抱えているというのは，障害者と受刑者や出所者というのは一緒なので，今は農業が中心ですが，林業，水産業も含めて，受刑者をそちらの方に就労させられないかということをやろうとしていたら，コロナになってしまって，全く進んでいません。コロナも落ち着いて，去年から少しずつ活動できるようになってきたので，職員で，そういう農場を下見に行ったり，実際に松山刑務所だと，近隣の農家さんに，受刑者が，1時間から2時間ぐらい，お試しで農作業のお手伝いに行かせてもらったりしています。この受刑者は，出所したら本当に農業をやりたいと思っている人なのですが，出してやります。これなのですが，受刑者をそういうところに出すというのは，非常にハードルが高いのです。塀の外に受刑者が出るというのは，基本ありません。逃げられるかもしれません。ですけれども，今，法務省が掲げている施策としては，そうやって信頼してやらせてみましょうということです。それで彼らもやる気を感じるようになれば，立ち直りにもつながっていくということで，率先してやりましょうというふうな状況になっています。一方で，逃げられてはいけないというミッションは変わらないので，私たちがやるのは，「こいつは逃げねえな」という人を選ぶということです。

あまり知られていませんが，GPSの機器があって，それを付けて遠隔監視をするということも，今はやっています。本格的に始めたのは，今年からです。また雑談ですが，GPSだと，性犯罪者に出所後付けるかどうかというのが，議論になりがちです。アメリカでは，一部の州でやったりしていますが，日本も厳罰が大好きな国なので，アンケートを取ると，基本的にアンケートに答えるだけなので，自分は関係ないですから，賛成の方に立つでしょう。

新たな刑務所の在り方～懲役刑から拘禁刑へ～

もう少しあります。もうここからは，法学部の人に話すような話です。もう皆さんは，法学部の人より詳しくなってしまいます。去年の国会で，刑法と他の法律も含めてですが，刑法が変わりました。明治41年以来の大改正と呼ばれている改正がありましたが，そこで一番上にあります懲役というのがなくなって拘禁刑になります。懲役刑というのがなくなりますという大改正が行われました。併せて，いろいろ細々と変わりましたということで，刑務所が関係することを紹介させてください。

1つが，受刑者に対する社会復帰支援です。先ほど言った，仕事を見つけてあげるとか，生活保護の受給の手続きをする間に入ってあげるとか，そういったことを，これまでも，平成20年代から，私たちはやってきました。やってきたのですが，私たちは，本当は権限がないのに，それをやっていました。刑務所が，余計なお世話，おせっかいおばちゃんのようなことをやっていたのです。しかし，もう時代の流れから，それは刑務所が，刑務所の業務としてやるべきだということで，今年の12月からは，もう私の責任でやらなければいけないということになっています。なぜこのようなことになるかというと，先ほどの拘禁刑の話もそうなのですが，これは本当に法学部の授業のようになってしまいます。刑罰というのは，こらしめるために課すというのも当然あるのです。日本というのは，その考え方が少し強くて，ですから，今の刑務所の運営の仕方になってきたわ

けなのですが，もう今や，ただ単にこらしめればいい，皆さんから隔離して収容していればいいというのではなく，今社会が求めているのは，この犯罪者たちを，出所したら，また犯罪をしないようにして，皆さんが新たな被害者にならないようにするという，これこそがまさに一番大事なことなのだと，こらしめることではないのだという刑罰の本質の考え方が変わることになりました。ですから，これはその一環です。刑務所にいる間に，できるだけサポートして，もう二度と犯罪をしないような状況をつくり上げるお手伝いをするという仕事です。皆さん，刑務所の職員のイメージと違うと思いませんか。はっきり言って，刑務所の刑務官というのが，制服を着ている一番の主戦力です。柔道，剣道の有段者の猛者がたくさんいます。もう，私の見た目にだまされてはいけません。怖い人がたくさんいます。その人たちに，そんな使命などできません。ですので，これも，できる人を呼ぶのです。就職の支援であれば，キャリアカウンセラーの資格を持っている人を雇って，やっています。福祉の方であれば，社会福祉士，精神保健福祉士の資格を持っている人を，これまた雇ってやります。もうそういうものばかりです。先ほどの改善指導であれば，道重先生のような人を雇ってやってもらいます。そんな柔道の有段者にやれと言われたって，できません。しかし刑務所は，そういう意味で，今変わっているというところです。

もう 1 つ，これも今年の 12 月から始まるのですが，被害者支援です。被害者は，日本の中では，非常にスポットが当たっていないと，被害者の方々が思っているところがあって，制度として，結構不遇な状況なのです。それを日本政府としては，少しずつ改めていっていますが，日本は，何でも少しずつなのです。そのうちの改まったことの 1 つが，被害者が加害者に，直接文句を言うというのは難しいので，受刑者になった加害者に対して，刑務所の職員が間に入って，被害者の思いを伝えるということになりました。伝えるということも大事ですし，その伝えたことで，受刑者が立ち直っていくような方に持っていくというミッションが，刑務所にはあるのですが，二重ミッションです。被害者のお気持ちを伝えます。また伝えたことをもって，今度は受刑者が立ち直って，頑張ろうという気にさせるという，2 つ大きな課題を与えられているのです。これは 12 月から始まります。今アンケートで聞いたら，これが刑務所の職員の最大の悩みです。刑務所の職員は，まず被害者と会話をしたことがありません。もし柔道が大好きな人がいたら申し訳ないのですが，柔道 6 段とかそんな人間が，行って，被害者から話を聞いて，「私は性犯罪，どうちゃらこうちゃら」というのを聞いて，職員がまず不安になるのは，「俺，余計な一言，言わねえかな」ということです。二次被害のことです。なおかつ，刑務所の職員が出張るのは，そういう刑が決まって，判決で有罪と決まった直後以降に，私たちの出番になります。日本の裁判というのは，だいたい被害者にとって不満なのです。7 掛けといわれているのですが，裁判の途中で，検察官が懲役 10 年にしてほしいという求刑をするのですが，そうするとだいたい懲役 7 年ぐらいの判決になります。だいたい懲役 10 年でも，被害者にとっては不満だったりするのに，判決で出てみると，もっと値切られているわけです。もう一番不満が高まっているときに，私たちは聞きにいかなければいけないのです。それも，その聞いた内容を伝えないといけないのです。伝えるだけならいいのです。そんなの，子どもの仕事です。伝えて，受刑者の立ち直りに生かさないといけないのです。もう死んでほしい，二度と顔を見たくないという，そんな言葉を，どうやって立ち直りに生かすことができますかという，無理難題を，今刑務所は与えられていて，これをどう消化するのかと，見えない中で，今 9 月末を迎えているというところです。そのような取り組みをやっております。

拘禁刑というのができるのですが，これは矢印の上です。改善更生を図るため，要は受刑者の人が立ち直るために必要なことを，刑務所の中でやりましょうということです。この改正の前は，要はこらしめのために，刑務作業という苦役を課すという考え方が刑法の考えでした。そうではなくということです。立ち直らせる，いかに立ち直らせるかです。ここで，なぜこのような改正をしたかという背景です。実際に受刑者を雇っていただいている方がアンケートで，「就職できても人間関係がうまくいかずに，仕事を辞めてしまう人がいるので，人とのコミュニケーションが取れるような」と答えておられます。受刑者は取れないのです。駄目なのです。人と話すのが嫌だからどうだからということで，しょっちゅうトラブルが起きます。コミュニケーションを取れるようにするというのは，難しいです。受刑者がコミュニケーションを上手に取れるようにする方策を考えるのが，私たちの課題です。道重先生はお分かりですが，日本の刑務所は基本的に，日中，受刑者同士が話してはいけないのです。私語といいますが，働いているときに，私語をしてはいけないのです。話すのは，部屋に戻って，集団部屋の中で話すとか，あるいは休憩時間に話すとかしかないのです。それも先ほど言った，常識の通じない相手と話すのです。こんなので，まっとうなコミュニケーションが取れるようにするなど，もともとそこにも問題があって犯罪者になっているのに，これを直さなければいけないということを，実は日本の刑務所は，今，何もやれていないのです。今，これを変えなければいけないのです。難しいですよねということで，実は私には答えがありません。

有識者というのが，どこでも出てきます。コロナ

のときにも出てきた有識者という人からすると，「出所者に話を聞くと，しなさいと言われたことをやっていればいいのが刑務所なんだと言ってくる。受刑者は自己判断を誤ったから犯罪に至っており，本人の改善更生を考えるんであれば，自己判断を行う訓練を，刑務所の中でも実施することが必要」と言うのです。日本の刑務所は，自己判断をさせません。良からぬことをたくらむからです。言ったことを聞いていればいいというふうにやっているのが，日本の刑務所なのです。ここを変えなければいけないというように，私たちは，こうやって包丁を突き付けられているのです。ここら辺が始まるのは2年後に始まるので，これから2年間，一生懸命考えて，刑務所を変えていくのです。

私たちが，今考えているのは，先生方もそうだと思いますが，お仕事をしているときに，雑談が全くないということはないと思います。少しでも受刑者と会話をしながら，仕事をすればいいでしょうというのを認めたらと，これは言うのは簡単です。刑務所の職員は，アンケートを取ったら，たぶん圧倒的多数が反対です。そこを，うちの業界が，これから変えていく，変わっていくという取り組みを考えているところです。最終的に結論として，入ってから出るまでの受刑生活というのが，今は刑務作業というのを中心にして，この矢印のようにやっています。これは少し分かりにくいのですが，皆さんのように若い人が受刑者になったら，まず勉強を頑張りましょうとなります。働くのは，少しだけやればいいです。あとは，高齢者の人は，もうとにかく，まず体力の維持です。動け，体操しろとなります。あとは，ぼけ防止です。高齢者が増えているという話をしましたが，現実に体操をやっています。うちの刑務所でも，毎日30分ぐらい，高齢者だけは特別に，特別に考えられた体操をやっております。また，ぼけ防止のために，間違い探しとか迷路とか，小学1年生の算数とかをやらせています。ぼけないことが大事です。というようなことを，もう刑罰としてやろうということです。

ですので，これは私の個人的に残念な話なのですが，やはり高齢者や障害者やそういう人たちは，最終的に刑務所で面倒を見ろということなのかということです。ですので，刑務所は，これからは，面倒を見ることができる人たちを雇用していって，そういう人たちにやってもらうというふうになっていきます。こわもての人ばかりだと，もう成り立ちません。

刑務所から社会へ～立ち直りを支えるために～

もう本当に最後です。質問の時間もないといけません。最後なのですが，そこで皆さんに，特に学生さんに，今投げ掛けているのは，こういう機会です。ここの真ん中のところだけです。無期懲役や死刑の人以外，受刑者というのは，皆さんの住んでいる社会に戻っていきます。当たり前ですが，現に大勢帰っていっています。この人たちが犯罪をしないように，塀の中にいる間は，私たちが頑張ります。外に出てからは，そこの自治体の人たちも頑張りますが，地域社会の人たちも，偏見の目で見ないで，何とか立ち直ってもらうための支えになってほしいということです。支援がないと，先ほど言ったように7割が無職です。6人に1人は，住むところがありません。これは現に起きている状況として，生活保護を受けている人が，高齢住宅に優先的に入居できるという取り組みを，どこの自治体でもやっているのですが，出所者も，その中に入れてくれないかというのが，法務省のお願いです。けれども，実態はやはり違います。我が子がかわいいというような感じです。そういう人たちは，やはり生活保護で困っている人たちよりも下なのです。ですから住めないのです。なかなか住むところが見つからないのです。そこら辺のところを，少し考えてください。回り回って，皆さんが新たな被害者になってしまうかもしれないのだから，何とかこの人たちに，せめて犯罪に走らないような環境や状況を整えてあげないといけないのです。今一番言われているのは，特に高齢犯罪者です。高齢犯罪者などは，そんなに危険性がある人たちではないのです。何とか地域で，私たちにしてみたらゲートボールでも何でもいいので，何かにお誘いして，もう少しお付き合い，顔の見える関係の中に入れてあげるということはできないでしょうかということです。それが支えてあげるということではないでしょうか。そのためには，あまり毛嫌いしないでほしいのです。日本は，また毛嫌いをするのですが，そこを何とかというところを考えてほしいなというのが，私の講義の，込めたいところになります。

これは難しいのでいいので，ここでおしまいにしましょう。それでは質問タイムです。

質疑応答

道重：本当に高野所長，ありがとうございました。お時間を調整いただいて，質疑応答の時間を頂戴しましたので，せっかくの機会なので，こうやって直接質問ができる機会というのも少ないので，ぜひ何か質問があれば，挙手の方をお願いします。

参加者：お話，ありがとうございました。大変貴重なお話を頂きまして，大変勉強になりました。

高野：非常に熱心でしたよね。

参加者：ありがとうございます。2点ほど質問させていただきます。

最初の方に，犯罪者の男女比というのが出てきました。そこで男性の方が圧倒的に多いということでしたが，なぜ男性の方が犯罪を行うことが多いのか，どうしてそういう傾向が出ているのかと

いうのが気になったのが 1 つです。それからもう 1 つが，社会復帰のことに関して，例えば社会福祉などを強化するなど，ここにもあるように，支援をしていくときに，外部から呼んでくるというお話を先ほどからされていたと思うのですが，序盤の方に，なかなか予算を，国が出してくれないというお話もあったと思うのです。その少ない予算の中で，さらに，今まで以上に外から雇ってという，ここの財源というのは，どこから。

高野：財源などという言葉が出るとは，何か役人のようなことを言いますね。

参加者：そういう面で，大丈夫なのかなと心配になりました。

高野：今の大学の 4 回生というのは，素晴らしいですね。

1 つ目は難し過ぎるので，2 つ目からいきます。2 つ目は簡単なのです。その分は，私たち刑務官が減らされています。そもそも日本というのは，国家公務員は，まず毎年減らすという計画を立ててやっています。法務省はその中でも，減らされていないだけましという官庁なのです。ですので，刑務所の職員からすると，不満が非常にたくさんあります。柔道 5 段からすると，後輩が入ってこないとなるわけです。

1 つ目の，男がなぜ犯罪をするかなのですが，たぶん研究はされているのだと思います。何らかの答えはあるのでしょうが，恐らく世界各国，そんなに変わらないと思います。とすると，生物学的な宿命なのでしょうか。まず暴力的な男性ホルモン自体が，そういう性質を持っているというのはあるでしょうね。犯罪の性質上，女性がやっている犯罪は，窃盗と覚醒剤ばかりだったので，対人のものは，ほとんど男性が加害者になっているので，そこなのではないでしょうか。または悪い人が多いのが，男なのでしょうか。どうですか。

参加者：同じ男として，どきっとしたからお聞きしました。

高野：しかしこれは，数字が示している事実であり，かつ 1 年，2 年の話ではなくて，ずっとそうですので，これは鉄板です。それでは，他の方。

男性ですね。この積極性が加害につながっているのでしょうか。

参加者：男性なので，僕も，再犯防止の前に，まず初犯からしないように気を付けようと思います。

1 個，単純に感じたことなのですが，普通の写真でもあったように，高齢者が増えていって，認知症も増えていってとなると，老々介護の写真も見えましたが，そういう不労高齢者が増えていくという時点で，年齢として，罪の意識というものがどうなっていくのかというのが，大変僕の中では分からないのです。その話を聞いていて，社会復帰をするにしても，何をもって更生と言うのかという，その定義付けを最初にもらわないと，社会復帰となったときに，地域で継続的な支援をする前に，その地域の人々にしても，何をもって更生と言えるのか，何をもって彼らが更生したといえるのかという，それがないと，再犯防止という名前だけを見ていたのでは，また彼は再犯をするのでしょうというバイアスが掛かってしまうのではないか，それで余計に彼らを孤立させてしまうという結果が生まれるのではないかと感じました。何をもって更生というか，何をもって罪の意識を越えていくのかなというのが，非常に気になりました。

高野：私も，そのまま質問を返したいぐらいです。どうしたらオーケーを出してくれますか。それでは認知症の人にしましょうか。認知症の人だと，どうですか。

参加者：そうですね。そこは本当に被害者との対話が，認知症でなくても，やはり被害者との対話ができるという，そのステージまで持っていくのが，まず 1 個目の更生なのかなと，自分は考えています。認知症である場合は，それが成り立っていかないとなると，そうすると今度は，法としてどう持っていくのか，お金で解決するのか，何年単位だったらいいのかという，そこのボーダーは，被害者遺族と話し合って，設定していくしかないと思います。認知症がさらに進んで，どうして自分がここにいるのかも分からないとなった時点で，そちらにシフトチェンジするべきなのかなというふうに思います。先ほどの新しい，被害者の思いを伝えるというのは，非常に難しいことだと思うのですが，それが結構更生や社会復帰に近付く 1 歩なのかなというのは感じています。

高野：認知症の人は，もう認知症になった時点で，立ち直りというのは考えにくいのではないでしょうか。私どもは福祉で，何とかつなぐといっても，結局基本的にはご家族ですが，ただ高齢の受刑者の多くは，もう家族に見放されています。松山刑務所のような，初めて入った人であれば，まだ家族とつながっているのですが，累犯のところなどは，そういう状況がたくさんあるので，認知症の人は，自治体のそういうケアホームを運営するところに，もう出所後引き取ってもらわないと，どうにもならないです。それを，自治体と押し付け合うというのが定番です。つまり帰ってきてほしくないわけです。どうしてここに帰ってくるのだと，〇〇県でいいではないかと言います。もちろん自治体の方も，それは仕方がないのです。認知症はそんな感じです。しかし刑務所が言いたいのは，そういう人をそもそも刑務所に送らないでほしいということです。それは刑務所の役割ではないでしょうと思って働いていますが，仕方がないです。

参加者：今日はありがとうございます。

高野：また男性です。

参加者：いいお話を聞くことができました。

地域社会の継続支援が必要という根本の話ではないのですが，最初の方のスライドにあった，犯罪率が平成14年から，20年連続で減少しているというところで，たしか黄色の色が窃盗で，下のピンク色の方が窃盗以外と書いてあったのですが，窃盗以外のものがあまり減っていなくて，窃盗が急激に減っていたのがどうしてなのかというのと，あともう1個は，真ん中辺でおっしゃった摂食障害を持つ受刑者の7割が窃盗で入所されているというのがあって，7割というのは結構多いと思うのです。どうして摂食障害の方が窃盗に走ってしまうのかなということが気になりました。

高野：摂食障害の方は，全く食べないわけではなく，食べ吐きを繰り返すというパターンの摂食障害が多くて，ですので物が欲しいのです。それが窃盗になります。何かそこが，盗むという行為そのものが，はけ口になっているのです。そのような研究をしているというのは，見たことがあります。

1つ目のものは，これは私の記憶が少しもうぼけてきているのですが，数年前の平成を振り返るというときに，法務省の方でも，犯罪白書で分析をしています。おっしゃるとおりの傾向はあって，一番言われているのは，皆さんがご自宅でセコムと契約をしたり，街頭監視カメラができたり，またいろいろなものが盗まれないように鍵をかけたりするようにもなりましたし，そこら辺の防犯対策が，そもそもしっかりとされるようになったからではないかといわれています。

参加者：ありがとうございました。

道重：まだまだ質問もあるかと思いますが，ちょうどお時間となりましたので，本日の学術講演会を終了とさせていただきたいと思います。本当に高野所長には，普段聞けないような刑務所の業務のお話ですとか，日本の刑務所が抱える問題を包括してお伝えいただけたと思います。非常に勉強になる時間となりました。ありがとうございました。

それでは皆さん，あらためて拍手をお願いいたします。

高野：ありがとうございました。

2023 年 11 月 1 日（水）15:30 ～ 17:00
心理学大実験実習室 1

経験の共有が協力行動に及ぼす影響

中国・河南大学教育学部講師　斉　芳珠
逐次通訳：神戸学院大学心理学部准教授　毛　新華

老师们同学们，大家下午好。感谢心理学部开设这次学术报告会，辛苦毛老师翻译，让我有机会与大家分享一些关于合作问题的研究和思考。

研究合作行为的意义

科学期刊《Science》在创刊 125 周年之际，在全球范围内邀请从事宇宙、能源、生命科学等不同领域的顶尖科学家提出了 125 个“驱动基础科学研究以及决定未来科学研究方向”的重大科学难题，又根据它们的基础性、普遍性以及对整个科学领域的影响力，筛选出 25 个重中之重的科学前沿问题，“合作行为的演化”便占有一席之地。

从严格的进化论视角来看，生物的本质是利己的。但是从蚂蚁到人类各个种群当中，我们总能看到个体为群体利益付出成本甚至牺牲生命的情况。尽管达尔文后来提出的亲缘选择理论和互惠利他理论，可以解释一部分现象，但依然存在很多无法解释的合作现象。比如为什么在资源紧缺的情况下，依然有人愿意把自己的食物和水分给陌生人？学者们尝试从博弈论等新的研究视角去解密合作之谜。

这个问题提出已近 20 年，但是只要观察现实生活就会发现，合作的地位越来越重要。从个人生活角度来看，随着网络通讯的发展，人们足不出户就可以参与越来越广泛的社会活动，大家可以看看自己手机里面安装了多少个社交软件？从人类社会的角度来看，政治、经济、文化、科技全球一体化的发展使人们竞争越来越激烈的同时，也越来越相互依赖，一个地区的经济政策变化就可能影响全球经济。从人类与自然角度来看，全人类生活在同一个生态系统中，资源枯竭、气候变化、传染疾病等问题会在全球范围内产生影响，当灾难来袭，无一者可以独善其身；当战胜灾难，每个人都可以从中受益。

因此，如何让人们更加合作，互惠共赢，是许多学者致力于研究的重点（Wardil, Silva, & da Silva, 2019），也是时代向我们提出的要求。

合作行为的内涵

大家对合作这个词并不陌生，但是理解可能并不相同？首先，合作（cooperate）不是协作（coordinate）。比如，我用中文做报告，毛老师翻译为日语，目的都是尽量准确、清晰地向听众传达报告的内容，此时我们就在协作。协作情境中，参与者之间的目标一致，利益一致。其次，合作的反面不是竞争（compete）。假如，这次报告后我和毛老师共同得到一笔报酬，我们在分配这笔报酬的时候，如果我多分得一点，毛老师就得少分一点。这时我们就在竞争。竞争关系中，集体利益的总额是固定的，一方的获益，必然造成另一方相等的损失。这样的情景属于零和博弈。我们今天要讨论的，是发生于社会困境，这种非零和博弈当中的合作行为。

接下来希望大家通过参与一场投资，来理解合作的本质，同时也思考一个问题，合作的反面是什么？屏幕中间有一个神奇的投资池，它收到的钱都会膨胀，所以向这个投资池进行的投资是稳赚不赔的。但是需要两个人才能启动这个投资池。AB 两人决定参与这项投资，每人拥有 3000 元本金（今天的伙食费），每人都可以向投资池投入任意金额的钱，0-3000 都可以。在两个人都完成了投资决策后，投资池会将收到的投资总额膨胀 1.5 倍，但是，由于参与者的投资都是匿名，所以投资池不了解每个人具体投进来了多少钱，会将膨胀后的钱平均返还给每个参与者，哪怕投资是 0。这样一来，每个参与者的最终收益就由两部分组成，投资后剩余的本金，加上从投资池中获得的投资报酬。

在坐各位身上都有 3000 元吧？现在，您就是这项投资的一名参与者，将（在国内）为您随机匹配另外一名投资者，请您在 10 秒之内决定投资额，10 秒之后，投资池将关闭。投资 2000 以上（2001-3000）的请举手，投资 1001-2000 的请举手，那么剩下的就是投资 1000 及以下的。

从公式来看，这项投资的回报率高达 50%，自然是投入的本金越多越好。如果 AB 都是这么想，都投入了全部本金 3000 元，那么他们的最终收益如情景 1 所示，各自赚了 1500 元。这种情况看起来挺不错的，每个人都慷慨地贡献出今天的伙食费，轻松赚到明天

的晚餐。但是如果投资前 B 心想，既然投资收益会平分给我们，只要 A 投资，我就算一分钱不投，也能赚到钱，而且 A 看起来像个慷慨的人。于是发生了第二种情况。A 投入了全部的钱，而 B 一分钱不投，结果，B 最终得到 5250 元 ；但 A 最终只得到 2250 元，不仅没有赚钱，还损失了 750 元。

大家看，1 和 2 两个情境中还存在什么不同？相对于情景 1，在情景 2 中，不仅 A 的个人收益有所损失，集体收益也从 9000 跌到了 7500。9000 元，是集体有可能获得的最大收益，出现在第一种情景 ；5250 元，是个体有可能获得的最大收益，出现在第二种情景。集体最大利益与个体最大利益无法同时出现，这就是社会困境关键特征之一。

如果 A 和 B 一样，都追求个人利益最大化，结果会怎样？ AB 的投资都是 0，投资结束后，每个人最终拥有的财富还是 3000 元。不仅没有达到最大化的 5250 元，甚至还不如情景 1 的 4500 元。同时，集体利益到达最低点，6000 元。个体利益最大化的动机不仅没有带来个体利益最大化的结果，而且导致了集体利益的损失甚至崩溃，继而伤害每个个体的利益。

通过 3 个情景我想大家应该可以体会到社会困境的复杂之处。个体利益与集体利益之间的关系既不是同增共减的完全一致，也不是此消彼长的完全对立。非常像现实中个人间、组织间、国家间的关系。

研究者们开发了一系列经典的实验范式模拟社会困境，比如信任博弈、囚徒困境、公共物品博弈等。我们刚刚用到的就是双人公共物品博弈范式，也是我在后面的研究中使用到的范式之一。在社会困境范式中，参与者只能选择合作或不合作。第二种情况中的 A 就是合作者，B 是不合作者，也叫背叛者或者搭便车者，到此我们就知道了，合作的反义词不是竞争，而是背叛。如果参与者选择合作，就有机会实现双赢，如情景 1 所示，双方都获得中等水平的收益，同时保障了群体利益最大化 ；但也有可能被对方背叛，如情景 2 所示，尽管一定程度上保障了群体利益，但合作者个人损失惨重，不合作者反而赚得盆满钵满。如果参与者选择不合作，虽然减少了被对方搭便车的机会，同时有机会获得个体利益最大化，但有可能导致双输的结果，个人也颗粒无收。

当个体选择合作时，他将第一，面临损失的可能性，只要 B 的投资少于 1000 元，A 就会损失本金。第二，损失的程度不确定，取决于 B 的投资少于 1000 元的程度。

由此可见，合作行为符合风险决策的上述两大特征，是冒着牺牲个体利益的风险而做出有利于集体利益的选择。研究者指出，在考察个体风险决策规律时，决策者所处心理状态不可忽视 (Lu & Wang, 2016)。正性与负性体验即是人类普遍且重要的心理状态 (Osgood & Tzeng, 1990)，人们在不会说话的时候就可以理解“好”与“坏”；令我们印象深刻的也常常是积极或消极的经历，而不是那些平平无奇的中性经历。研究者经常用他们表征心理活动与过程（Baumeister et al., 2001）。

以往文献中的矛盾观点

中国传统文化中有两句俗语存在着辩证的智慧。源自《史记》的“越王为人长颈鸟喙，可与共患难，不可与共安乐”，指出人们在患难之中可以同心协力，在安乐之时反而互相背叛的现象。广为流传的民间谚语“夫妻本是同林鸟，大难来时各自飞”，描述人们在安宁时可以相安无事，在危难时却各守己利的现实。这反映的正是人们在正性体验和负性体验状态下，如何在个体利益与集体利益中间做选择的问题。

前人观点也存在争议。早期观点推崇 feel good, do good，认为正性体验比负性体验有利于合作（Vollhardt, 2009）；近 10 年不断有实证证据表明负性经历也可以促进社会关系，以 2014 年这篇高引用文献为代表，指出疼痛具有社会粘合剂的作用。

分析以往文献可知，造成争议的原因之一在于，大部分观点来源于研究推论而非直接对比。例如，将正性或负性体验对合作态度的作用推论到合作行为 ；或者将助人行为的结果推论到合作行为。缺乏在同一社会困境背景下直接比较正性体验与负性体验如何影响合作行为的研究。

问题一：正性与负性体验，哪个更有利于合作行为？

因此，我们模仿这篇经典文献进行了 2 个研究，试图在同一个社会困境中直接比较正负性体验对合作行为的影响。两个研究设计相同，方法不同。

我们邀请一组被试参与身体感官研究，水槽底部有一个带有小孔的固定容器，容器周围散落着许多的金属小球。被试需要将非优势手完全浸没入水中，在 90s 内尽可能多地将小球通过小孔逐颗放入水槽底部的固定容器内。正性体验组使用的是 24 度温水，而负性体验组使用的是 3 度以下冰水。而且我们在冬天开展这个研究。研究经过了学校人体实验伦理委员会的审查批准。被试可以随时退出研究，而且我们准备了干净的毛巾、护手霜、暖宝宝供被试完成这个任务后取用。

任务结束后，测量被试对其他成员的共情（empathy）、人际联结感（bonding）。之后所有被试一起参加经济博弈任务。选择这个任务测量合作行为的水平，是因为 Bastain（2014）等人采用了这个方法。这是收益矩阵表，由于时间关系，在此不展开详细讲解。简单来说，选择数字越大表明个体越合作。

结果显示，两组的合作行为产生显著差异，负性体验组比正性体验组的被试更加合作。然而，两组在人际联结感上没有差异。中介分析结果表明，正负性体验并没有通过共情影响合作行为。我们还尝试检验了人际联结感的中介作用，发现也不存在。

为了检验结果的稳定性，我们又采用另一种方法操纵正负性体验，进行了研究 2。我们邀请被试参与食物消费偏好研究，正性体验组咀嚼冰糖 90 秒，负性体验组咀嚼产自中国四川的小米椒 90 秒，是我能找到

的中国最辣的辣椒。其他流程与研究 1 相同。研究经过学校人体实验伦理委员会的审查批准。我在研究前品尝过所有实验材料，也尝试过多种快速解辣的方法，所以我们准备了水和牛奶供被试完成该任务后取用。发现了与研究 1 一致的结果，证明了结果的稳定性。

两个研究均表明，人际联结感与合作行为的结果并不一致，正负性体验也没有通过人际联结感影响合作行为。我们看两道测量人际联结感的例题（我感到对其他参与者有忠诚感 / 度 ；我感到我可以信任其他参与者），发现它们倾向于询问被试对他人的态度。

这个结果说明通过态度推断行为不合适，与前人证明风险决策态度不能预测风险决策行为的研究一致。也许正是这个原因造成了前人研究矛盾。因此在后续研究中，我们只考察合作行为。

两个研究均发现，共同经历负性体验比共同经历正性体验更加合作，与以往支持负性体验有利于合作的研究一致。然而，这些研究都只考察了共同经历的负性体验对合作行为的作用，而没有考察单独经历如何影响合作行为。共同经历的负性体验在逻辑上并不等于负性体验，而且前者在心理上具备更多的意义。因此，研究结果不能回答究竟是负性体验本身令人合作，还是与他人一起经历的负性体验令人合作。若要明确这个问题，需要与单独经历的体验进行对比。

问题二：共享具有什么作用？

因此，后续研究引入共享与否（sharedness）这一变量。我们进行了研究 3、4，增加不共享（unshared）条件。其中，共享（shared）条件下的实验流程与研究 1 一致，但是取消了对人际联结感的测量。

不共享条件下，每间实验室只容纳一名被试，一组被试到齐之后，我们便将他们分别带到在不同的房间，通过研究助手的协调，完成全部实验任务。

结果发现，正负性体验与共享与否对合作行为具有显著的交互作用，只有共同经历负性体验才更加合作，无论共同经历正性体验还是单独经历正性或负性体验，合作水平均会明显下降。印证了《史记》中那句经典的“可以共患难，不可共安乐”。

但是，有人对研究 3 提出质疑。首先，我们比较这两名被试。相较于 2 号被试，1 号被试不仅可以明确看到其他人与自己的任务是否相同，还清楚地知道有他人在场。因此，无法判断是否由于他人在场使得个体更加合作，无法排除“他人在场”效应。此外，假设确实是共享与否影响了被试的合作行为，但由于共享与不共享的差异存在于整个实验流程，无法明确是否由自变量操纵阶段共享与否的差异对合作行为造成了影响。

于是我们加以改进产生了研究 4。无论共享组还是非共享组，所有被试都在同一间实验室，但彼此之间有隔板保证看不到其他人在干什么。我们通过指导语，仅在第一阶段告诉被试，该阶段你与其他人经历的任务相同或不同，来操纵共享与不共享。同时，为了提高研究的生态效度，我们给被试提供现金，采用前面我们讲过的公共物品博弈 PGG 任务测量合作行为的水平。发现研究 3 的结果得到了重复。

两个研究一致证明，在比较正负性体验对合作行为的作用时，需要加以限定。共享是负性体验促进合作行为的必要条件。单纯的负性体验或者共享的正性体验都不能促进合作行为。同时，研究结果也为“可以共患难，不可共安乐”这一古老谚语提供了实证证据，我们暂且称其为“共患难 - 共安乐”效应。

问题三：什么情况下发生“共患难 - 共安乐”效应？

最后，我们想了解“共患难 - 共安乐”效应的适用范围。前面大家模拟投资的时候可能会思考，对方是谁？我们在日常生活中不可避免地与各种亲疏远近的他人产生社会交互，那么共患难是提高了一个人的整体合作性，还是仅提高了个体针对特定人群的合作性？

于是我们进行了研究 5，在研究 3、4 的基础上，引入社会距离（social distance）变量，被试与近社会距离或远社会距离他人进行博弈。采用经典的社会距离操纵范式，近社会距离条件下，告诉被试与眼前具体的陌生人进行博弈 ；在远社会距离条件下，告诉被试想象与一名普通的陌生大学生进行博弈。

研究结果显示，正负性体验、共享与社会距离的三阶交互作用显著，具体而言，与具体他人博弈时，共享负性体验激发更多的合作行为。也就是说，“共患难 - 共安乐”效应仅存在于近社会距离条件下，而在远社会距离条件下消失，可能是因为共享负性体验拉近了共享者之间的社会距离，从而提升了合作行为。

总结与启示

通过所有研究我们发现了稳定的“共患难 - 共安乐”效应，共享的负性体验比共享的正性体验有利于合作行为，而不是负性体验比正性体验有利于合作行为。说明正性或负性体验并非直接对应合作或不合作，他们对合作行为的影响会受到其他条件的约束，一定程度上调和了以往研究中存在的争议。

为什么会出现“共患难 - 共安乐”效应？首先，我们没有发现共情对正负性体验与合作行为关系的中介作用，这与前人研究有所不符。共情的双结构模型认为，共情包括情感共情与认知共情，而我们使用的共情测量工具主要测量情感共情。

再考虑到我们也没有发现人际联结感的中介作用。因此我们推测，正如前面提到的，社会困境中的个体 - 集体利益之间的关系是复杂的，那么决策过程不仅有情感成分的参与，可能也有认知成分的参与。未来研究可以从认知层面加以探讨。

此外，“共患难 - 共安乐”效应只存在于与近社会距离他人博弈的情况下，而在与远社会距离他人博弈的时候便消失，说明共享负性体验有可能拉近了陌生人之间的社会距离，产生群体感。根据社会功能理论，

体验对社会行为的作用取决于它们传达的心理意义。共享的负性体验作为一种消极的外部刺激，暗示着群体面临的潜在威胁，对促进亲群体行为具有强大动力。当然，这些推断还需要更加系统的研究进一步进行检验。

回到我们的现实生活，打开社交软件，人们似乎总喜欢美化自己，愿意展示自己美好、成功、骄傲的一面，而对自己不堪、失败、受伤的一面遮遮掩掩。这种导向既不利于优质社会价值观的传播，也不利于个体健康心理的发展。希望我们的研究能帮大家提升一点点面对负性经历的勇气。Why not release a little bit of your scars? Maybe a cooperator is waiting for you in the future.

【日本語訳】

皆さん，こんにちは。今回の学術講演会を開催してくださった心理学部の皆様に感謝いたします。また，毛新華先生が通訳にご尽力いただいたおかげで，「協力」という問題について，私の研究と考察を皆さんにお伝えする機会を得ることができました。

協力行動を研究する意義について

科学雑誌『Science』は，創刊 125 周年を機に，宇宙，エネルギー，生命科学などさまざまな分野におけるトップの科学者たちが，「基礎科学研究を牽引し，将来の科学研究の方向性を決定する 125 の主要な科学的問題」を提案しました。また，その基礎性，普遍性，そして科学分野全体への影響力に応じて，最優先の科学フロンティア 25 を選定しました。その中の「協力行動の進化」が 25 選の一つとしてノミネートされました。

進化論的に見れば，厳密には生物は元来利己的です。しかし，時として蟻から人間の集団に至るまで，それらの個体が集団の利益のために自分の利益を犠牲にすること，また自分の命までも犠牲にすることさえあります。ダーウィンが「血縁選択説」や「互恵的利他主義説」を提唱したことで，このような現象の一部を説明することができるようになりましたが，協力という現象にはまだ説明のつかないことがたくさんあります。例えば，資源が乏しいときでも，なぜ人は見知らぬ人に食べ物や水を喜んで差しだすのでしょうか。研究者たちはゲーム理論のような新しい研究視点から，協力の謎を読み解こうとしてきました。

この問題は 20 年ほど前から提起されてきましたが，現実の生活を観察すれば，協力の重要性はますます高まってきました。個人生活という視点から見れば，インターネット・コミュニケーション技術の発展により，人々は家にいながらも，幅広い社会活動に参加することができるようになりました。ご自身のスマートフォンにどれだけ多くのソーシャル・ネットワークのアプリケーションがインストールされているかを見れば一目瞭然です。一方，人間社会全体から見れば，政治，経済，文化，科学技術のグローバリゼーションの進展により，人々の競争がより一層激しくなったと同時に，相互依存の度合いもますます強まり，特定の地域の経済政策の変化が世界経済にまで影響を及ぼす可能性さえあります。さらに，人類と自然という視点から見れば，人類はみな同じ生態系の中に生きており，資源の枯渇，気候変動，感染症などの問題は世界全体に大きな影響を及ぼしています。災害に見舞われた時，誰一人として逃れることはできません。逆に災害が克服されれば，誰もがその恩恵を受けることができます。

したがって，人々がより協力的で互恵的になるにはどうすればいいのかが，多くの研究者の取り組みの焦点であり（Wardil, Silva, & da Silva, 2019），時代が私たちに求めていることでもあります。

協力行動の意味

私たちは皆，「協力」という言葉に慣れ親しんでいる一方，この言葉に対して全員が共通の理解を持っているとは限りません。「協力する（cooperate）こと」は「協調する（coordinate）こと」と同じものではありません。たとえば，私が中国語で発表し，毛先生がそれを日本語に訳します。どちらも，プレゼンの内容をできるだけ正確に，わかりやすく聴衆に伝えることを目的としています。その時点で私たちは協調しています。協調という状況では，参加者同士が同じ目標や関心を共有しています。第二に，協力の反対は競争（compete）ではありません。例えば，本日の講演会の後，私と毛先生が二人分をあわせた報酬を得たとします。その報酬を分配する場合，私が少し多くもらえば，毛先生の取り分が少なくなります。その時点で私たちは競争関係にあります。競争関係では，集団利益のトータルの量は決まっており，一方の当事者が得をすれば，もう一方の当事者は必ず同等の損失を被ります。このようなシナリオはゼロサムゲームです。本日私の講演で取り上げたいのは，ゼロサムゲームではなく，非ゼロサムゲームのような社会的ジレンマ状況で起こる協力行動です。

では，皆さんがある投資に参加することを通して，協力の本質を理解していただきたく，また同時に協力の反対は何であるかという問いについても一緒に考えていこうと思います。画面中央には，投資を受けると膨らむ魔法の投資プールがあります。このプールへの投資は確実に収益を得ることが保証されています。しかし，この投資プールの起動には 2 人必要です。A さんと B さんという 2 人がこの投資に参加し，それぞれ 3000 円の元本（今日の食事代）を持ち，0 ～ 3000 円の任意の金額を投資プールに投入すること

ができます。両者が投資を完了すると，投資プールは受け取った投資総額を 1.5 倍に膨らませます。しかし，参加者の投資は匿名であるため，投資プールは各人の投資額を正確に把握しておらず，たとえ投資額がゼロであっても，膨らませたお金を均等にして各参加者に返します。このようにして，各参加者の最終的にもっている金額は，投資後に手元に残る元本と，投資プールから受け取った投資報酬によって構成されます。

ここにいる皆さんは 3000 円持っていますよね。今から，あなたはこの投資の参加者として，日本国内にランダムに配置された他の日本人投資家とマッチングされます。10 秒後にプールは閉鎖されますので，それまでに自分の投資額を決めてください。2001 円から 3000 円の額を投資した人は手を挙げてください。1001 円以上 2000 円まで投資した人は手を挙げてください。残りの皆さんは 1000 円以下ですね。

計算式を見ると，この投資に対するリターンは実に 50％とにもなります。当然，元本が多ければ多いほど最終の収益は多くなります。A さんも B さんも同じ考え方であれば，2 人とも元金 3000 円全額を投入した場合，ここで示したシナリオ 1 のように 1 人 1500 円の収益となります。このシナリオはなかなか良さそうですね。皆さんは今日の食事代を気前よく出せば，明日の夕食代まで稼げることになります。投資する前に，B さんは「投資収益は平等に分配されるのなら，A さんが投資する限り，私は 1 円も投資しなくても儲けが出る。A さんは気前のいい人に見えるだろう」と考えました。そうすると，もう一つのシナリオが現れました。A さんは全財産を投資し，B さんは一銭も投じませんでした。その結果，B さんは元金 3000 円プラス A さん投資の儲け分配金の 2250 円と合わせて，5250 円も手に入れました。しかし，A さんは分配金の 2250 円しか手にできず，儲けがないばかりか，750 円の損も出してしまいました。

ここで，シナリオ 1 とシナリオ 2 の間には，他にどのような違いがあるのでしょうか？シナリオ 1 と比較して，シナリオ 2 では，A さんは個人的な収益を失うだけでなく，集団全体の収益も 9000 円から 7500 円に低下しました。集団にとって最大である 9000 円の利益は第 1 のシナリオで見られ, 個人にとっての最大利益である 5250 円は第 2 のシナリオで見られました。集団の最大利益と個人の最大利益が同時に生じないことは，社会的ジレンマの重要な特徴の一つです。

では，A さんと B さんが同じで，どちらも個人的な利益を最大化しようとした場合，結果はどうなるでしょうか？ A さん B さんの投資額はともに 0 円なら，投資終了時には両方とも 3000 円という元金のままです。シナリオ 2 の個人利益最大値の 5250 円に届かないばかりか，シナリオ 1 の 4500 円にも及びません。同時に，集団利益は最低の 6000 円しかありません。個人利益を最大化するという動機は，それ自体が実現されないだけでなく，集団の利益まで喪失・崩壊させ，結果的に各個人の利益を害することになります。

この 3 つのシナリオを通して，社会的ジレンマの複雑さを理解することができたでしょう。個人利益と集団利益の関係は，同時に増減するという関係でもなければ，一方が増えてもう一方が減るという完全に対立する関係でもありません。このような状況は現実社会にある個人同士，組織同士，国同士の関係によく似ています。

研究者たちは，信頼ゲーム，囚人のジレンマ，公共財ゲームなど，社会的ジレンマをシミュレートするための一連の古典的な実験パラダイムを開発してきました。さきほど皆さんが体験したのは 2 人用の公共財ゲームパラダイムで，私がこの後の研究で使うパラダイムの一つです。社会的ジレンマのパラダイムでは，参加者は協力するかしないかしか選べません。第 2 のシナリオの A さんは協力者，B さんは非協力者であり，裏切り者やフリーライダーとも言われています。ここでさきほど述べた協力の反対は「競争」ではなく「裏切り」であることに気づいたと思います。参加者が協力することを選択した場合，シナリオ 1 に示すように，グループの利益を最大化しながら，双方が適度な収益を得るという Win-Win の結果になる可能性があります。一方，シナリオ 2 に示すように，グループの利益はある程度守られるものの，協力者が個人的に大損を被り，非協力者が大もうけするという，非協力者に裏切られるリスクもあります。参加者が協力しないことを選択した場合，相手にフリーライドされる可能性は低くなり，同時に個人の利益を最大化するチャンスもある反面，個人の収穫が全くなく，相手とともに共倒れする可能性があります。

個人が「協力」を選択した場合，次の局面に直面する可能性があります。一つは，損失に直面する可能性で，さきほどの例では，B さんが 1000 円以下の投資をすれば A さんは確実に元本の一部を失うことになります。もう一つは，損失の程度は不確実で，ここでは B さんの投資が 1000 円よりどの程度下回るかによって決まります。

このように考えると，協力行動はリスク状況下での意思決定の 2 つの特徴と合致します。すなわち，個人の利益を犠牲にするリスクを負ってでも集団の利益を利するという行動です。個人のリスク状況下での意思決定を検討する際，意思決定者が置かれている心理状態を無視することができないと指摘されています（Lu & Wang, 2016）。ポジティブな経験とネガティブな経験は，人類共通で，重要な人間の心理状態です（Osgood & Tzeng, 1990）。人間は言葉を話せない赤ちゃんの時期でも善悪について理解しています。また，私たちの心により強く残るのは，平凡

なニュートラル経験よりも，ポジティブな経験やネガティブな経験であることが多いです。研究者たちは，しばしばこれらを用いて，精神的な活動やプロセスを特徴づけます（Baumeister et al., 2001）。

先行研究における矛盾した見解

中国の伝統文化に由来する 2 つのことわざには，弁証法的な知恵が含まれています。

中国の歴史書の「史記」に，「越の王」という人物について，以下のように描かれています。「越の王は首が長く鳥のくちばしを持つ男で，他人とともに苦難を味わうことができるが，成功した後，他人と一緒に楽を共にすることはできない。」すなわち，このことわざは，「苦楽には，苦を共にすることはできるが，楽を共にできなく互いに裏切り合う」という現象を指摘しています。（訳者注：越は四字熟語にある「呉越同舟」の越という春秋戦国時代の国で，「越の王」は「臥薪嘗胆」の主人公でもあります。）その一方で，中国には，「夫婦は同じ森に住む鳥の如く，災難が来たら各自が難を逃れる道を急ぐ」というもう一つ古いことわざがあります。こちらでは，平穏なときにはお互いに平和でいられるが，危険なときにはそれぞれが各自の利益を守ることに走るという現実を表しています。これは，ポジティブな経験とネガティブな経験において，人々が個人利益と集団利益の間でどのような選択をするのかという問題そのものを反映しています。

先人たちの見解も議論の余地があります。初期には，「feel good，do good」の見解が高く評価され，ポジティブな経験はネガティブな経験よりも協力行動につながると主張されていました（Vollhardt, 2009）。しかし，ここ 10 年では，ネガティブな経験も社会的関係を促進する可能性があることを示唆する実証的研究が着実に増えています。その代表的な研究として挙げられるのが，こちらの 2014 年の高被引用論文です。この文献では，痛みは「社会的な糊」，つまり接着剤の役割があると指摘しています。

これまでの文献を分析すると，論争の原因の 1 つは，ほとんどの結論が直接的な比較ではなく，研究の推論に由来するという事実にあることがわかります。例えば，ポジティブな経験やネガティブな経験に影響される協力的「態度」が協力的「行動」に解釈されたり，「援助」行動の結果が「協力」行動に解釈されたりしていました。しかし，同じ社会的ジレンマの中で，ポジティブな経験とネガティブな経験がどのように「協力行動」そのものに影響するかに関する直接な比較をした研究は欠けています。

問１：肯定的な経験と否定的な経験，どちらがより協力的な行動につながるのか？

この問いに対して，我々は，この有名な文献を真似て，同じ社会的ジレンマにおいて，ポジティブな経験とネガティブな経験が協力行動に及ぼす影響を直接比較する 2 つの研究を行いました。この 2 つの研究は，研究デザインは同じですが，方法は異なっています。

我々は，「身体感覚研究」と題する研究にペアの参加者を募集しました。シンクの底に小さな穴のあいた固定容器があり，その周囲に小さな金属球が多数散らばっています。実験参加者は利き手でない方の手を完全に水に沈め，90 秒以内にできるだけ多くのボールを小さな穴から 1 つずつ流し台の底にある固定容器に入れるよう求められました。ポジティブな経験をするペアは 24 度の温水を使用し，ネガティブな経験をするペアは 3 度以下の氷水を使用しました。そして，この研究は冬に実施されました。この研究は，大学の人体実験倫理委員会の審査を受け，承認されたものです。参加者に，いつでも実験からの離脱が許されることを伝えました。また，課題終了後，清潔なタオル，ハンドクリーム，そしてカイロが実験参加者に用意されました。

実験課題終了後，実験参加者の「共感（empathy）」，ペアに対する「対人的絆の感情（bonding）」が測定されました。そして，参加者全員がゼロサムゲームに参加しました。このゲームは，Bastain（2014）などが使用しており，協力行動のレベルを測定するのに有効と判断されました。これはペイオフ・マトリクスの表で，時間の制約上，ここでは詳しく説明しません。簡単に言えば，選択肢の数字が大きいほど協力的な個人であることを示します。

結果は以下の通りです。2 つの群では，協力行動に有意差が見られ，ネガティブ経験群の実験参加者はポジティブ経験群の実験参加者よりも協力的でした。しかし，対人関係の絆感については，両群間に差はありませんでした。媒介分析の結果，ポジティブな経験もネガティブな経験も，共感を介した協力行動には影響しないことが示されました。また，対人的絆の感情の媒介効果の検証もしましたが，こちらにもその効果が見られませんでした。

結果の安定性を検証するため，研究 2 ではポジティブな体験とネガティブな体験を操作する別の方法を用いました。実験参加者に「食品消費嗜好調査」と題する実験に参加してもらい，ポジティブ体験群には氷砂糖を 90 秒間噛んでもらい，ネガティブ体験群には中国四川省産のキビトウガラシを 90 秒間噛んでもらいました。この唐辛子は私が知る限り中国で最も辛いものです。その他の手続きは研究 1 と同じです。この研究も大学の人体実験倫理委員会の審査を受け，承認されたものです。私は事前にすべての実

験材料を試食し，辛さを素早くなくす方法をいろいろと試しました。その方法に基づき，実験終了後，参加者に水と牛乳を用意しておきました。研究 1 と一貫した結果がみられ，結果の安定性が実証されました。

どちらの研究でも，対人的絆の感情は協力行動に関する結果と一致せず，またポジティブな経験もネガティブな経験も，対人的絆の感情を媒介して協力行動に影響しないことが示されました。対人的絆の感情を測定する項目例（他の参加者に対する忠誠心を感じる；他の参加者を信頼できると感じる）を調べたところ，この尺度は実験参加者の他者に対する態度を尋ねる傾向があることがわかりました。

この結果は，態度から行動を推測することは不適切であることを示唆しています。このことは，「リスク状況下の意思決定の態度は行動を予測できない」という実証的研究の結果と一致しています。おそらく，このような理由で協力行動の先行研究の結果との間で，矛盾が生じていたかもしれません。そのため，後続の研究では私は協力的行動そのものに焦点を当てて調べることにしました。

どちらの研究でも，ネガティブな経験をともに経験する方がポジティブな経験をともにするよりも協力的であることが明らかにされました。「ネガティブな経験が協力行動を促進する」という先行研究の見解と一致しています。しかし，これらの研究はいずれも，ネガティブ経験の共同体験が協力行動に果たす役割を検討しただけであり，単独でのネガティブ経験が協力行動にどのような影響を及ぼすかは検討していません。一緒に経験したネガティブな経験は，論理的なネガティブな経験と同等ではなく，前者の方が心理的により大きな意味を持ちます。したがって，本研究の結果は，ネガティブ経験を単独で経験した場合と，他者と一緒に経験した場合のどちらが協力行動を引き出すかという疑問に対する答えになりません。このことを明確にするためには，一人で経験したことと対比させる必要があります。

問２：共有はどのような役割を果たすのか

そこで次の研究では，共有（sharedness）という変数を導入しました。研究 3 と 4 を実施し，非共有条件（unshared）を追加しました。この場合，共有（shared）条件での実験手順は研究 1 と同じですが，対人的絆の感情に対する測定は省かれています。

非共有条件では，各実験室に参加者は 1 人しか収容しないようにしています。参加者ペアが実験室に到着すると，研究アシスタントによって参加者が別々の実験室に連れて行かれ，そこですべての実験課題を完遂させました。

その結果，経験のポジティブ・ネガティブと体験の共有・非共有は，協力行動に対して，有意な交互作用があることが判明しました。具体的には，一緒にネガティブな出来事を経験することがより協力行動を引き出します。一緒にポジティブな出来事を経験する，あるいはポジティブな体験またはネガティブな体験を単独で経験する群では協力度は低いままでした。これらの結果を踏まえて，「史記」にある古典的なことわざである「苦楽には，苦を共にすることはできるが，楽を共にできない」ことが裏付けられました。

しかし，研究 3 を疑問視する声もあります。まず，この 2 人の実験参加者を比較します。②の参加者と比較して，①の参加者は相手が自分と同じ課題に取り組んでいるかどうかがはっきりわかるだけでなく，相手の存在もはっきり意識していました。したがって，他者の存在が個人の協力行動を高めている可能性もあり，「他者の存在効果」は否定できません。その他，参加者の協力行動に影響を与えるのは，「共有・非共有」という条件であることに間違いないと仮定しても，「共有・非共有」は実験過程を通して存在するため，独立変数の操作段階における共有性の差が協力行動に影響を与えるかどうかを明らかにすることはできていません。

そこで私たちはそれを改良し，研究 4 を実行しました。共有条件でも非共有条件でも，すべての実験参加者を同じ実験室に配置しましたが，他の実験参加者が何をしているのか見えないように，実験参加者の間に仕切りをいれました。教示文を通して，最初の段階でだけ，他の実験参加者と同じまたは異なる実験課題を行うことを伝えて，共有・非共有条件を操作しました。また，研究の生態学的妥当性を高めるために，先に話した公共財ゲーム PGG 課題を用いて，実験参加者に現金を渡して協力行動のレベルを測定しました。この研究 4 でも，研究 3 の結果は再現できました。

2 つの研究が一貫して，ポジティブとネガティブな経験が協力行動に果たす役割を比較する際には，条件の限定が必要であることが示されています。すなわち，ネガティブな経験が協力行動を促進するには，経験の共有が必要です。また，単独のネガティブな経験，あるいは共有されたポジティブな経験のどちらの条件でも，協力行動は促進されません。同時に，これらの結果は，「苦楽には，苦を共にすることはできるが，楽を共にできない」という古いことわざに実証的なエビデンスを提供することができました。ここで，暫定的に，「難を共に，安楽を共に」効果と称しましょう。

問３：「難を共に，安楽を共に」効果はどのような状況で起きるのか

最後に，この「難を共に，安楽を共に」効果の適用範囲を明らかにしていきたいです。先ほど皆さん

と一緒に投資のシミュレーションをした時に，皆さんはきっと相手が誰なのかを考えたかもしれません。日常生活において，私たちは必然的に親疎さまざまな他者と社会的相互作用を持ちます。では，「難を共に」という考え方からは，「個人の相手を考慮しないトータルな協力行動」なのか，それとも「個人の特定集団のみへの協力行動」を高めるものなのでしょうか。

そこで私たちは，研究 3 と 4 に社会的距離（social distance）変数を導入した研究 5 を実施し，実験参加者は社会的距離の近い相手か遠い相手のどちらかとのゲームを設定しました。古典的な社会的距離操作パラダイムを用いて，実験参加者は，近社会的距離条件では，特定の見知らぬ他人を目の前にしてゲームをするように言われ，遠社会的距離条件では，見知らぬ普通の大学生とゲームをすることを想像するように言われました。

研究の結果，ポジティブとネガティブな経験，共有・非共有，そして社会的距離の 3 条件の間の有意な 3 次交互作用があることが示されました。具体的に，目の前にいる他者とネガティブな経験を共有することで，ゲームではより協力的な行動を取ることがわかりました。言い換えると，「難を共に，安楽を共に」効果は社会的距離の近い条件でのみ存在し，社会的距離の遠い条件では消失します。ネガティブな経験を共有することで，共有者間の社会的距離が縮まり，その結果，協力行動が誘発されたのかもしれません。

結論とインスピレーション

一連の研究を通じて，私たちは一貫した「難を共に，安楽を共に」効果を見出しましました。つまり，協力行動の誘発には，体験のネガティブさ・ポジティブさは要因にならず，ネガティブな体験の共有とポジティブな体験の共有での比較に，共有という要因が重要な役割を果たしています。このことは，ポジティブな経験やネガティブな経験が直接的に協力や非協力に結びつくわけではなく，協力行動への影響は他の条件に左右されることを示唆しています。本研究によって，先行研究に存在する論争をいくらか調整することができたと考えられます。

なぜ「難を共に，安楽を共に」効果があるのでしょうか。まず，ポジティブ・ネガティブな経験と協力行動との関係において，共感が媒介的役割を果たすことは見出されませんでした。これは先行研究と矛盾します。共感の二重構造モデルは，共感が感情的共感と認知的共感の両方から構成されることを示唆しており，我々が今回用いた共感の測定尺度は主に「感情的共感」を測定するものでした。

対人的絆の感情の媒介効果も見つかりませんでした。以上のことから，前述のように，社会的ジレンマにおける個人と集団の利害関係は複雑であり，そのときの意思決定プロセスには感情的要素だけでなく，おそらく認知的要素も含まれると推測しました。今後の研究では，認知的な側面からこの点はアプローチすることができるでしょう。

「難を共に，安楽を共に」効果は，社会的距離の近い他者とのみ存在し，社会的距離の遠い他者には，この効果が消失しています。このことから，ネガティブな経験の共有は，見知らぬ他者を社会的に近づけ，共同体感覚を生み出す可能性が示唆されます。社会的機能理論によれば，社会的行動に対する経験の影響は，その経験が伝える心理的意味によって決まります。共有されたネガティブな経験は，集団に対する潜在的な脅威を示唆するネガティブな外的刺激として作用し，親和的集団行動を促進する強いモチベーションの役割を果たしています。もちろん，これらの推測は，より系統的な研究によってさらに検証される必要があります。

実生活に話を戻すと，ソーシャル・ネットワークのアプリケーションを開くと，人々は常に自分を美化したがり，良い面，成功した面，誇らしい面を見せたがり，逆に，悪い面，失敗した面，傷ついた面を隠したがります。このような傾向は，質の高い社会的価値の伝播に寄与するものではなく，健全な個人の精神の発達に寄与するものでもありません。私たちの研究が，ネガティブな経験と向き合う勇気を少しでも得る一助になれば幸いです。Why not release a little bit of your scars? Maybe a cooperator is waiting for you in the future.

発表は以上です。どうもありがとうございました。

清水 寛之（司会）：それではどうもありがとうございました。皆さんの方から何か質問なり，コメントなどいただけたらと思います。

石﨑 淳一：大変勉強になりました。1 つの研究がどういうふうに積みあがっていくのかというか，研究をどのように進めていくのかということについて一緒に勉強になったと思います。できれば大学院生も一緒に聞いて欲しかったなと思います。私は全くの素人なので，質問はいろいろあるのですが，大変面白く拝聴したのですが，いくつか絞り込んで質問させていただきますと，1 つは小さなことからいきますと，先生も最後の方で触れておられたのですが，ご本人たちの認知と言いますか，そういうものも今後は測定する可能性があるのかどうか，例えばなんですが，最もシンプルな所でいきますと，苦痛度，苦を共にしているのですが，その苦の程度みたいなものを本人たちに評定させるのかとか，そういう可能性があるのかどうか，これが 1 点目です。

斉　芳珠（毛通訳）：ご質問，ありがとうございました。学生達も来るだろうと思ったのですけれども，細かく実験の手続きのお話をいたしました。苦とい

う，苦しみということがどこまで細かくかというようなご質問なのですが，現在のところはいわゆるシーリング的に，要は天井効果的に考えた時に全ての人間，老若男女関係なく，苦しみと感じているのが氷水，そしてとうがらしというようなこと考えていました。おっしゃったように，それをどこまで細かくしていくかという事が私は先生と同じように考えていますが，具体的には実際にはまだ行われていないです。おそらく先行研究においては，そういったような苦しみを段階的に測定するというツールがあるはずなのですが，まだ発見はしておりません。アバウト的な考えでいきますと，例えば苦しみというような事であれば，物理的な苦しみ以外にでは社会的な苦しみが何があるかというと，例えば就職活動，それと学業の成績，3 番目は恋愛関係，というようなところから，いわゆる親密関係がらみの苦しみを設定して，そういったようなことを今後のアプローチにしていきたいと考えています。

石﨑：ありがとうございます。最後のグラフを出していただけますか。先生の結果には特に私は疑問はありません。先生の結果と結論に対しての疑義はありません。そのうえでなのですが，あくまでも可能性なのですが，このグラフだけを見ますと，クローズとディスタント，つまりさっきので言いますとコンクリートとアブストラクトなのですが，身近な状態と，抽象的ななんとなく漠然としている，それとネガティブポジティブが交互作用する可能性があるのですか，というのが質問で，つまりメインリザルトとしては先生の結論で全くいいと思うのですが今後もしサブアナリシスとして検討する余地があるのかどうか，つまり右のディスタントの方はネガティブポジティブが逆転しているように見えるんだけれども，そういう可能性というのがあるのかどうかというのが質問です。

毛：今後の研究においてはこれを追求するつもりがあるかどうかですね。

石﨑：そうですね，もしもつまりそれが可能性があるのであれば，さきほど申し上げたコンクリートとアブストラクトのスレンジャーにおける違いが逆の効果があるかもしれないという可能性を考えた場合はそうなのですが，そういうデータの読み方は全くしないのか，ということです。

斉（毛通訳）：石﨑先生の目が鋭くてびっくりしました。

石﨑：視力はわりと良いのです（笑）。

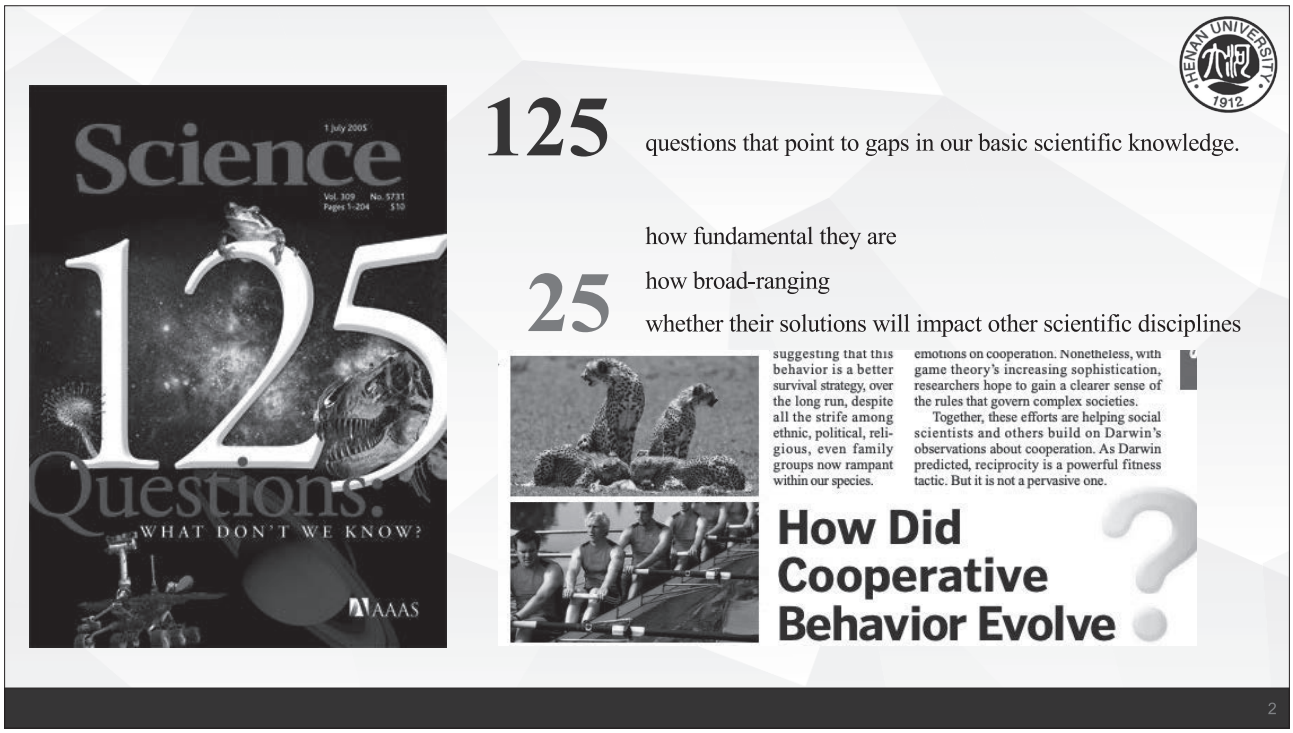
斉（毛通訳）：この図においてはこの三次交互作用と別にネガティブとポジティブ社会的距離との二次交互作用も実はありました。おそらくこの二次交互作用についてご指摘いただいているかと思いますが，あちらの方が二次交互作用があったというのが事実であって，今回の発表の中では省略しました。一般的に私が知っている限りにおいては，三次交互作用があれば二次交互作用は検討しないということとしています。実はそちらの二次交互作用が現れたということは私にとっても大きな衝撃であります。原因は以下の通りです。どこで私に衝撃を与えたかというと，普通は人々が状態の良いところにおいては他者と協力したいのですが，しかしながらその相手は身近な人，つまり親密な人である場合には相手に嘘をつかれるのではないかというようなことを心配している，というようなところがこの二次交互作用が表している結果ではないのではないかと思います。これについてはどのように今後は対処していくかといくことがまだ構想段階ではあるのですが，具体性がまだ見えてきていないというような状態です。石﨑先生に対しては，この答えは満足のいく答えになりますでしょうか，

石﨑：おもしろいです。

清水：時間も超えていますので，ありがとうございました。

斉（毛通訳）：先生方に本日は 1 時間半の貴重な時間をここに費やしていただいたという事に心より感謝しております。何より，本日は私が何を言ったかではなく，毛先生がどう訳したかというところがポイントではないでしょうか。

The Effects of Shared Experience on Cooperative Behavior
Speaker:
Fangzhu Qi
Lecturer
Faculty of Education, Henan University
Translator:
Xinhua Mao
Associate Professor
Faculty of Psychology, Kobe Gakuin University
HENU · KGU
1


Science
1 July 2005
Vol. 309 No. 5731
Pages 1-204 $10
125
Questions:
WHAT DON'T WE KNOW?
AAAS
125
questions that point to gaps in our basic scientific knowledge.
25
how fundamental they are
how broad-ranging
whether their solutions will impact other scientific disciplines
suggesting that this behavior is a better survival strategy, over the long run, despite all the strife among ethnic, political, religious, even family groups now rampant within our species.
emotions on cooperation. Nonetheless, with game theory's increasing sophistication, researchers hope to gain a clearer sense of the rules that govern complex societies.
Together, these efforts are helping social scientists and others build on Darwin's observations about cooperation. As Darwin predicted, reciprocity is a powerful fitness tactic. But it is not a pervasive one.
How Did Cooperative Behavior Evolve
2

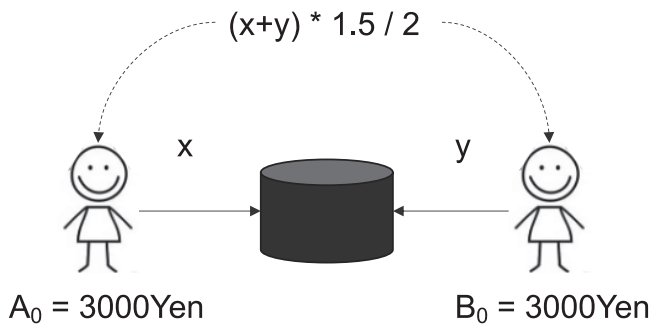
HENAN UNIVERSITY
1912
Google+
Maps
WhatsApp
Instagram
YouTube
Facebook
Hangouts
COVID-19
UPDATE
HELP!
Need your help, the polar bear
Your behavior
hurt more than
yourself!
World Wide Fund For Nature
IUCN WCS IFAW
Pictures downloaded from the Internet
3

What's Cooperative Behavior?
4

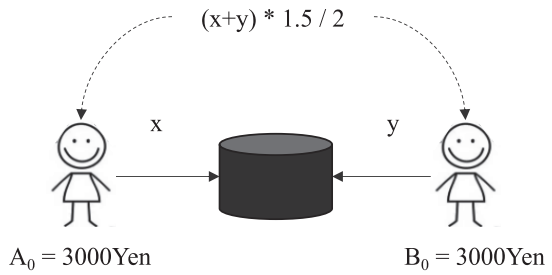
·合作不是协作 **Cooperative behavior** is not equal to **coordinate behavior (“同生共死”)**

·合作的反面不是竞争 **Cooperative behavior** is not opposite to **competitive behavior (“你死我活”)**

·合作发生于社会困境中 **Cooperative behavior happens in Social Dilemma (Non-zero-sum Game)**



5



·**Social dilemma**:

The motivation of gaining maximum group interest conflicts with that of maximum individual interest.

(1)

x = 3000, y = 3000

A = 4500, B = 4500

Group = 9000

Maximum group interest

(2)

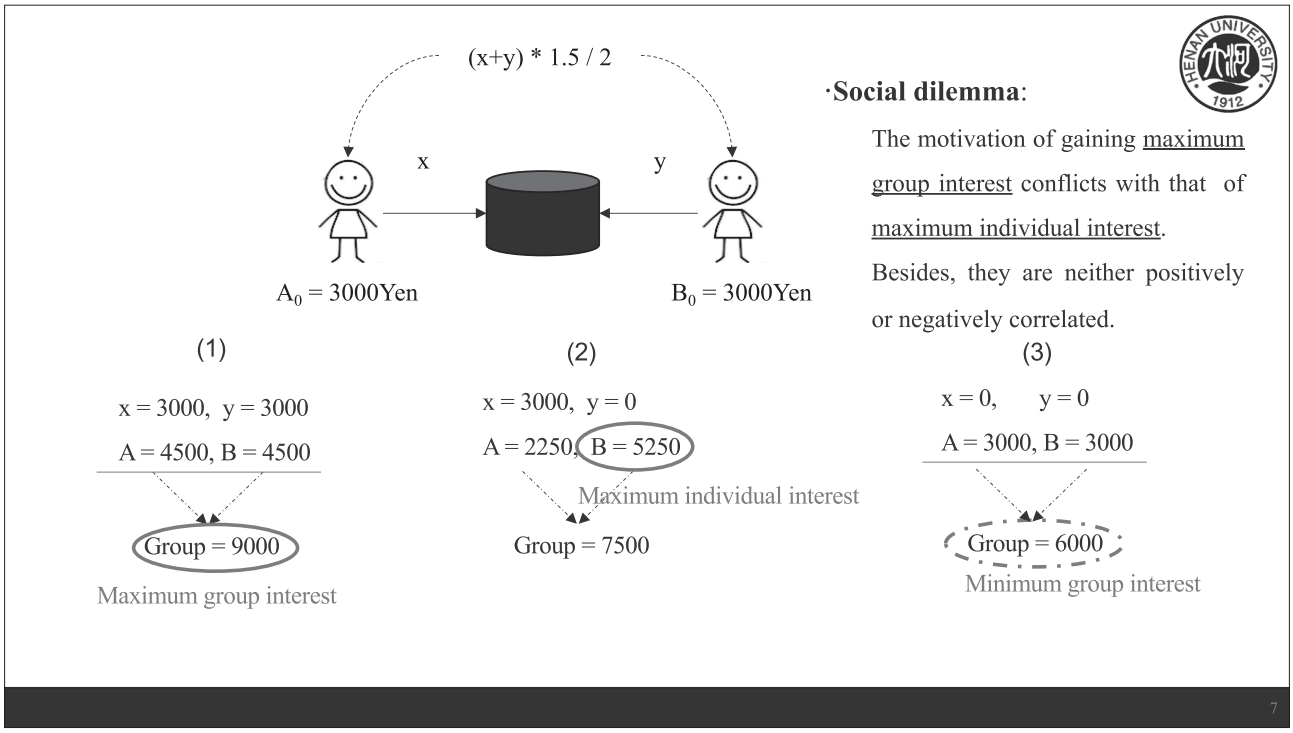
x = 3000, y = 0

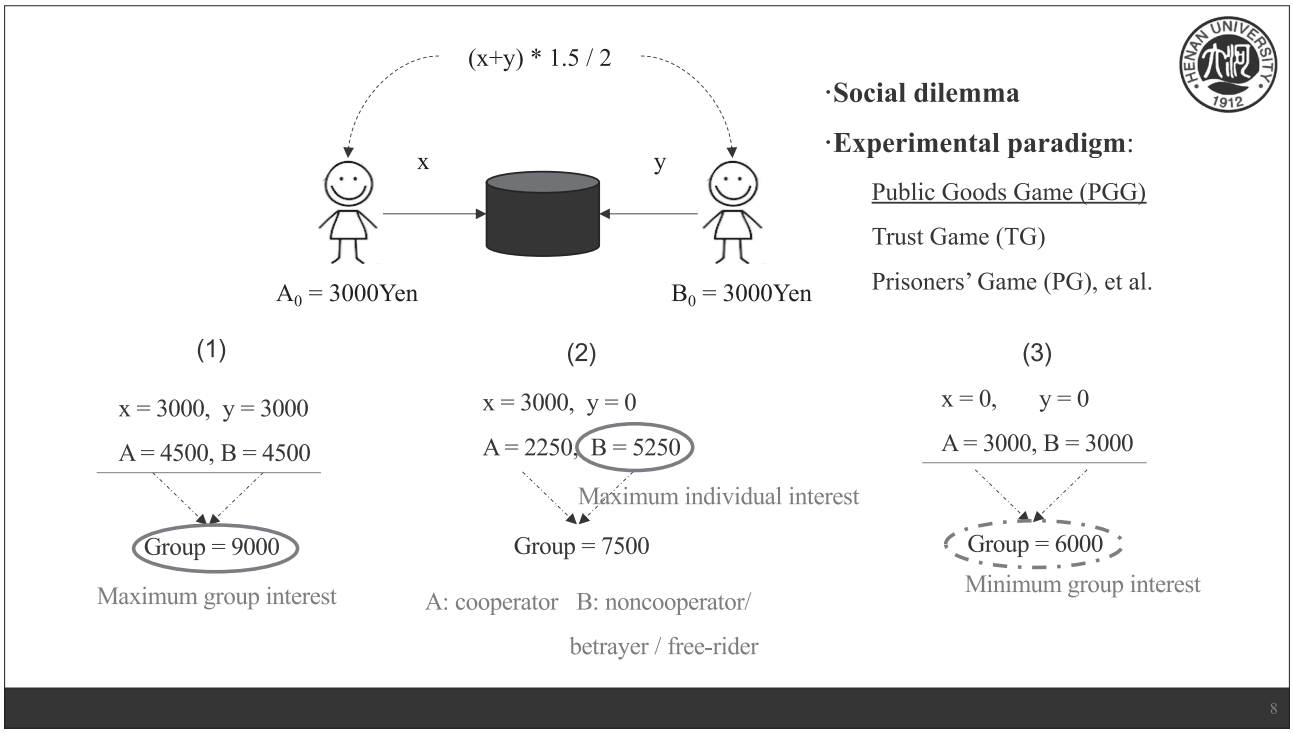
A = 2250, B = 5250

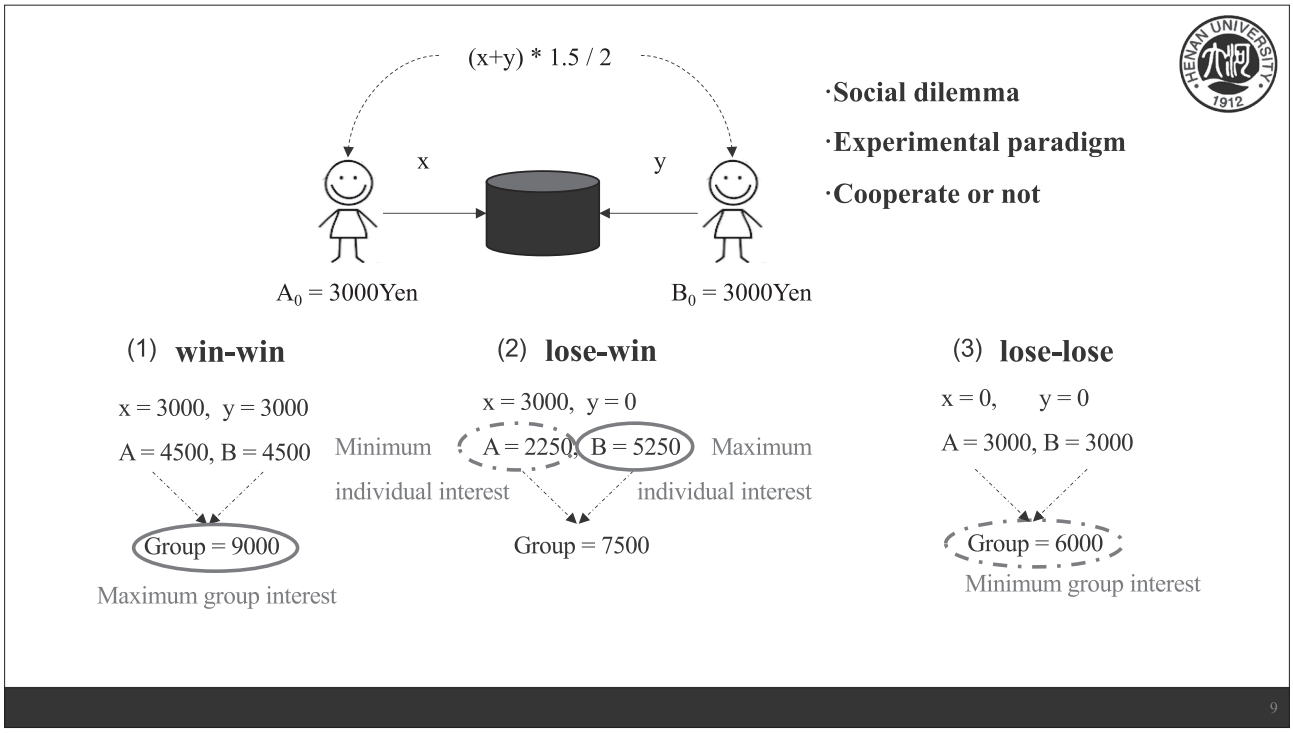
Maximum individual interest

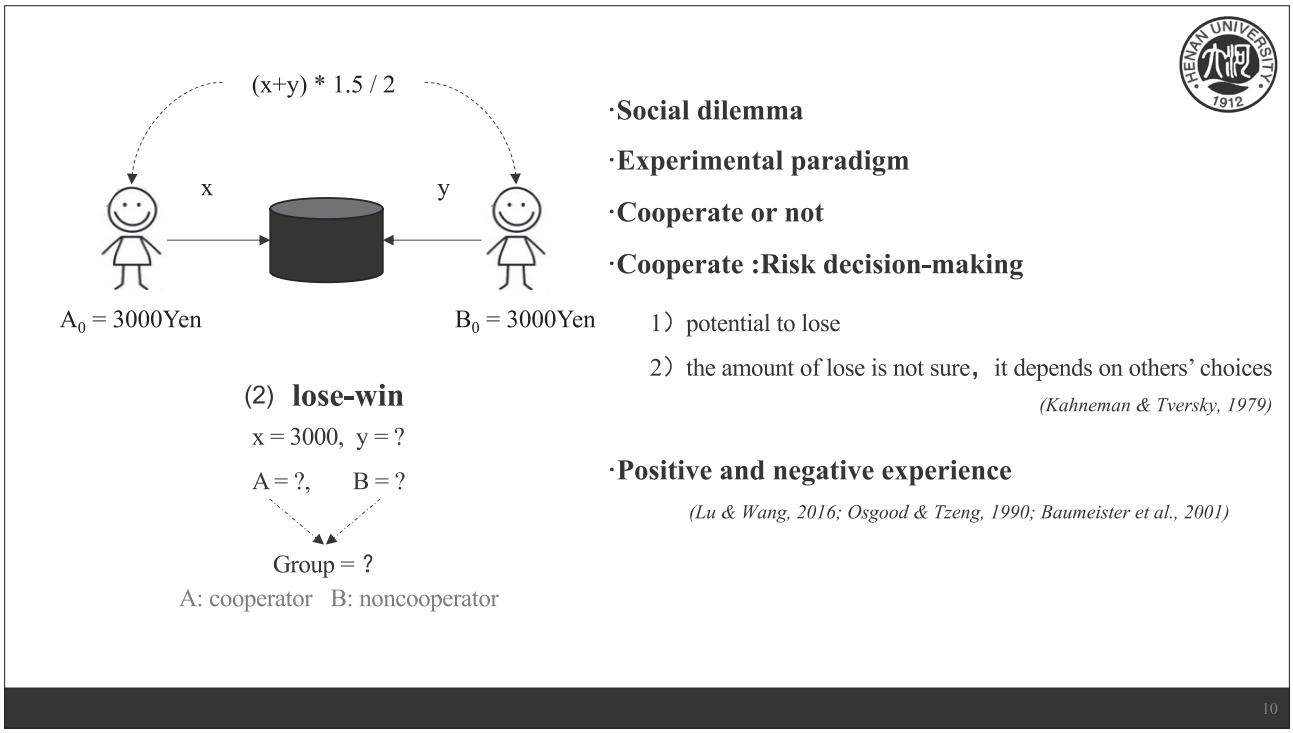
Group = 7500

6


(x+y) * 1.5 / 2
x
y
A_0 = 3000Yen
B_0 = 3000Yen
·Social dilemma:
The motivation of gaining maximum group interest conflicts with that of maximum individual interest.
Besides, they are neither positively or negatively correlated.
(1)
x = 3000, y = 3000
A = 4500, B = 4500
Group = 9000
Maximum group interest
(2)
x = 3000, y = 0
A = 2250, B = 5250
Maximum individual interest
Group = 7500
(3)
x = 0, y = 0
A = 3000, B = 3000
Group = 6000
Minimum group interest
7


(x+y) * 1.5 / 2
x
y
A_0 = 3000Yen
B_0 = 3000Yen
·Social dilemma
·Experimental paradigm:
Public Goods Game (PGG)
Trust Game (TG)
Prisoners' Game (PG), et al.
(1)
x = 3000, y = 3000
A = 4500, B = 4500
Group = 9000
Maximum group interest
(2)
x = 3000, y = 0
A = 2250, B = 5250
Maximum individual interest
Group = 7500
A: cooperator B: noncooperator/
betrayer / free-rider
(3)
x = 0, y = 0
A = 3000, B = 3000
Group = 6000
Minimum group interest
8


(x+y) * 1.5 / 2
x
y
A0 = 3000Yen
B0 = 3000Yen
·Social dilemma
·Experimental paradigm
·Cooperate or not
(1) win-win
x = 3000, y = 3000
A = 4500, B = 4500
Group = 9000
Maximum group interest
(2) lose-win
x = 3000, y = 0
Minimum individual interest
A = 2250, B = 5250
Maximum individual interest
Group = 7500
(3) lose-lose
x = 0, y = 0
A = 3000, B = 3000
Group = 6000
Minimum group interest
9


(x+y) * 1.5 / 2
x
y
A0 = 3000Yen
B0 = 3000Yen
(2) lose-win
x = 3000, y = ?
A = ?, B = ?
Group = ?
A: cooperator B: noncooperator
·Social dilemma
·Experimental paradigm
·Cooperate or not
·Cooperate :Risk decision-making
1）potential to lose
2）the amount of lose is not sure，it depends on others' choices
(Kahneman & Tversky, 1979)
·Positive and negative experience
(Lu & Wang, 2016; Osgood & Tzeng, 1990; Baumeister et al., 2001)
10

Positive / Negative Experience & Cooperative behavior

“越王为人长颈鸟喙，可与共患难，不可与共安乐”

《史记·越王勾践世家》

“夫妻本是同林鸟，大难来时各自飞”

Chinese Proverb

Controversial opinions in previous researches:

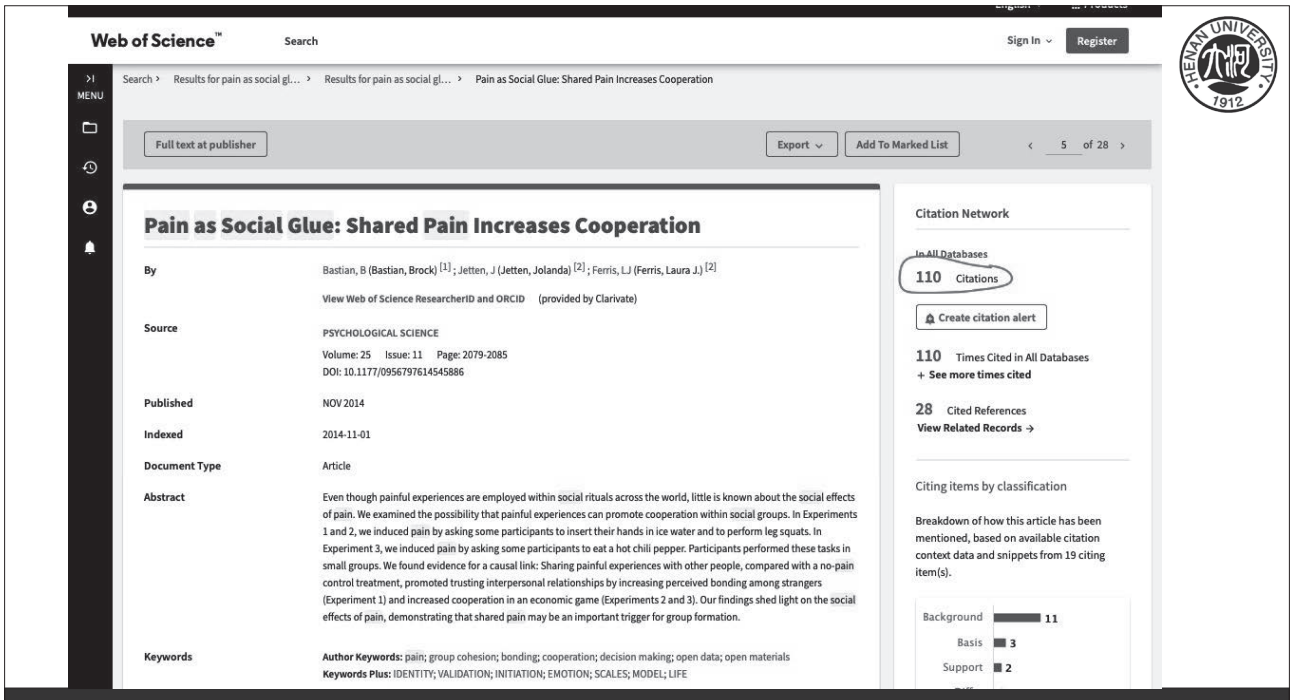
1）“Feel good, do good” effect

（Hayes, Strosahl, & Wilson, 1999; Isen & Levin, 1972 ; Niedenthal & Brauer, 2012; Staub, 2005）

2）Increasing reverse empirical evidence

（Bastian, Jetten, Hornsey, & Leknes, 2014; Baumeister et al., 2001; Vollhardt, 2009）

11



12

· **Question 1: Which will promote cooperative behavior, positive or negative experience?**

- Study 1 & 2
- 2 (Positive/Negative experience: positive vs negative),
- completely between subjects design

13

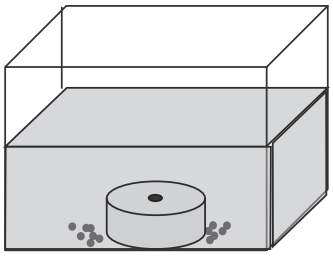
Study 1: Procedure

1. P/N E (warm / iced water)
2. Manipulation test

1. Empathy
2. Bonding

1. Economic Game

(higher number-more cooperative)

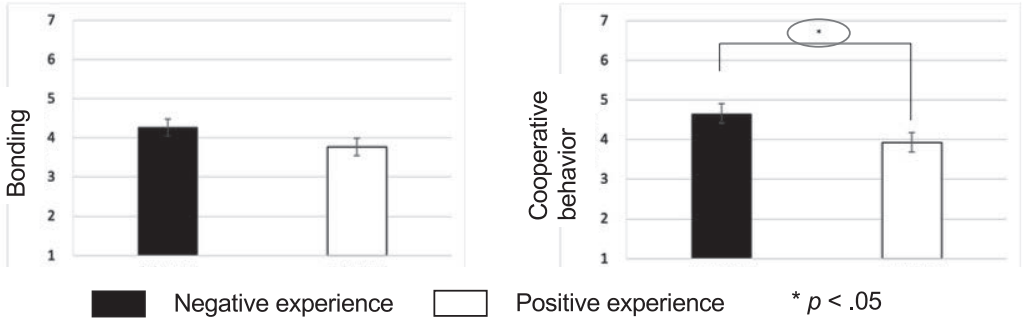


Number chosen by participant	Lowest number chosen in the group						
	1	2	3	4	5	6	7
1	$4.20	—	—	—	—	—	—
2	$3.60	$4.80	—	—	—	—	—
3	$3.00	$4.20	$5.40	—	—	—	—
4	$2.40	$3.60	$4.80	$6.00	—	—	—
5	$1.80	$3.00	$4.20	$5.40	$6.60	—	—
6	$1.20	$2.40	$3.60	$4.80	$6.00	$7.20	—
7	$0.60	$1.80	$3.00	$4.20	$5.40	$6.60	$7.80

14

Study 1: Results

Cooperation



Mediating effect 1. Empathy × 2. Bonding ×

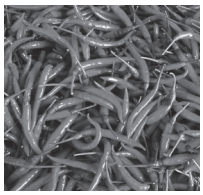
15

Study 2: Procedure

1. P/N E (pepper / candy)
2. Manipulation test

1. Empathy
2. Bonding

1. Economic Game

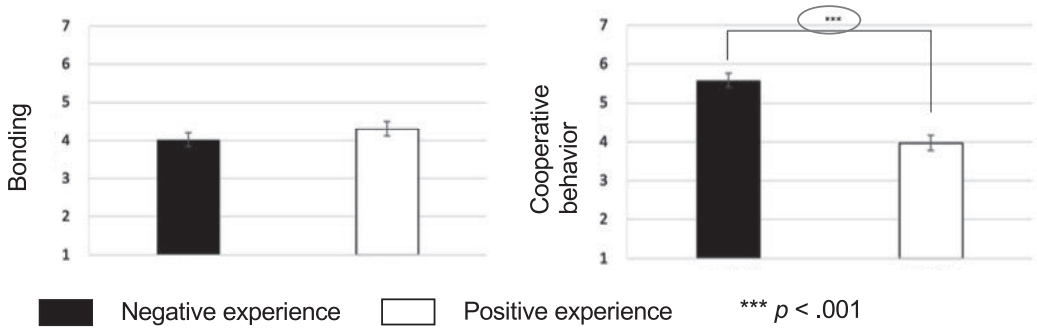


Number chosen by participant	Lowest number chosen in the group						
	1	2	3	4	5	6	7
1	$4.20	—	—	—	—	—	—
2	$3.60	$4.80	—	—	—	—	—
3	$3.00	$4.20	$5.40	—	—	—	—
4	$2.40	$3.60	$4.80	$6.00	—	—	—
5	$1.80	$3.00	$4.20	$5.40	$6.60	—	—
6	$1.20	$2.40	$3.60	$4.80	$6.00	$7.20	—
7	$0.60	$1.80	$3.00	$4.20	$5.40	$6.60	$7.80

16

Study 2: Results

Cooperation



Mediating effect　1. Empathy ×　2. Bonding ×

17

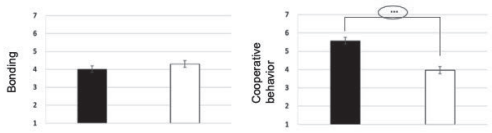
Discussion of Study 1 & 2

·**Cooperative Attitudes** vs **Cooperative Behaviors**

Bonding (7-point scale), eg.,

I feel I can trust the other participants.

I feel a sense of loyalty to the other participants.



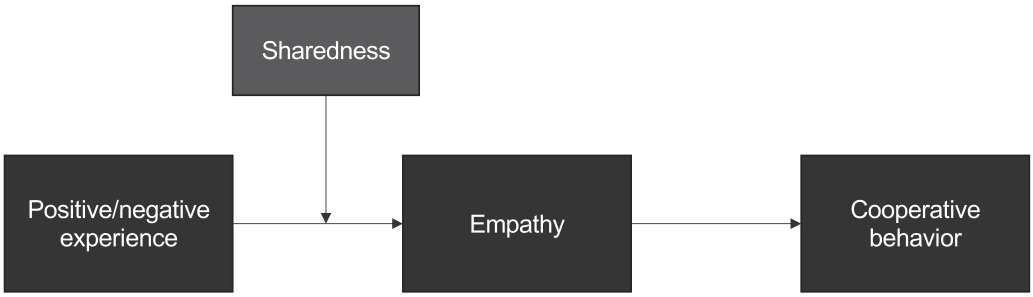
·**Negative experience** or **Shared negative experience?**

Shared positive experience < Shared negative experience (eg., Bastian et al., 2014; Vollhardt, 2009)

Positive experience　?　Negative experience

18

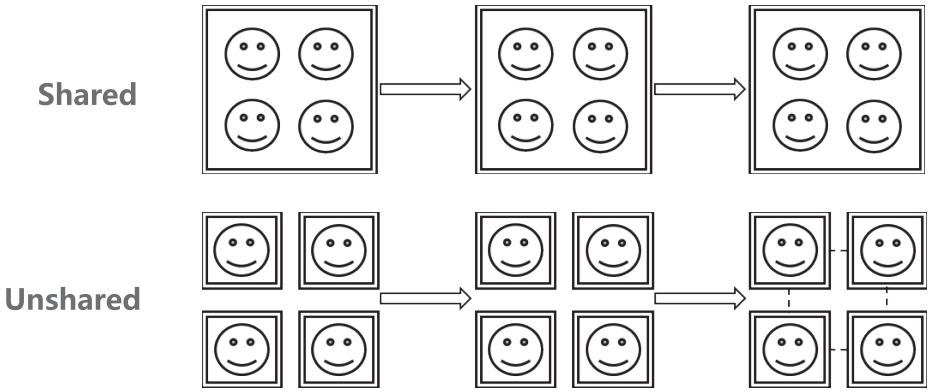
· Question 2: What's the role of Sharedness?



- Study 3 & 4
- 2 (Positive/Negative experience: positive vs negative),
  × 2 (Sharedness: shared vs unshared)
- completely between subjects design

19

Study 3: Procedure



1. P/N E (warm / iced water)
2. Manipulation test

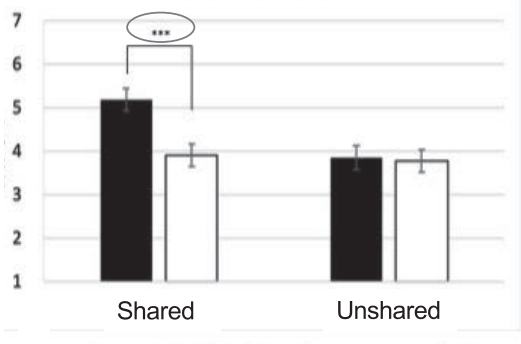
1. Empathy

1. Economic Game

20

Study 3: Results

Cooperative behavior



Negative experience

Positive experience

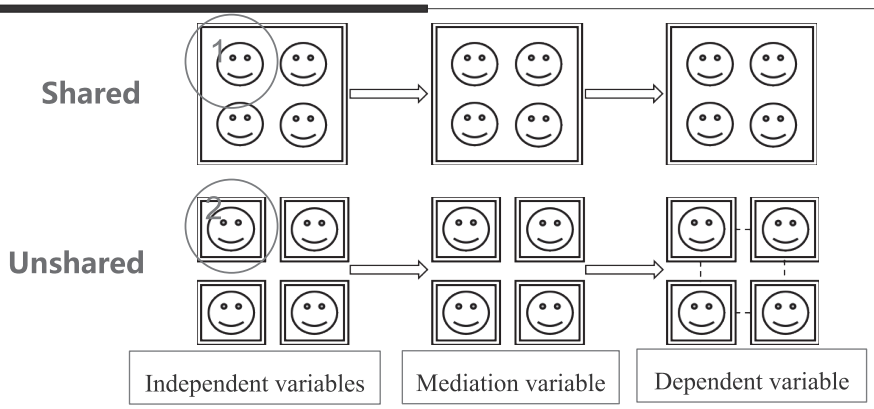
*** $p < .001$

“可以共患难”
“不可共安乐”

Mediating effect　1. Empathy ×

21

Study 3: Procedure



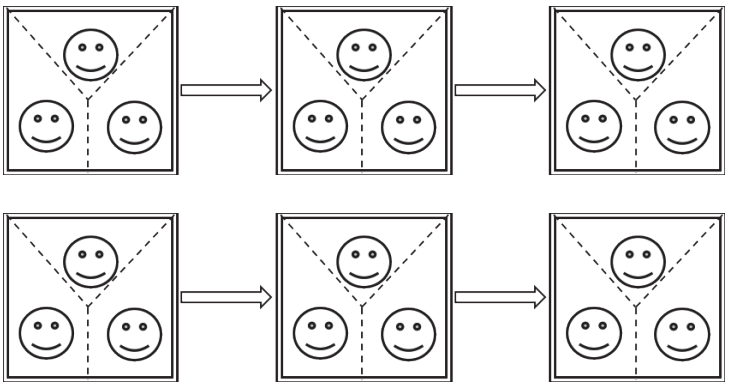
1. **The Presence of Others** or **Sharedness ?**
2. **Which Stage ?**

22

Study 4: Procedure

Shared
"Your tasks are the same"

Unshared
"You do different tasks"



1. P/N E (pepper / candy)
2. Manipulation test

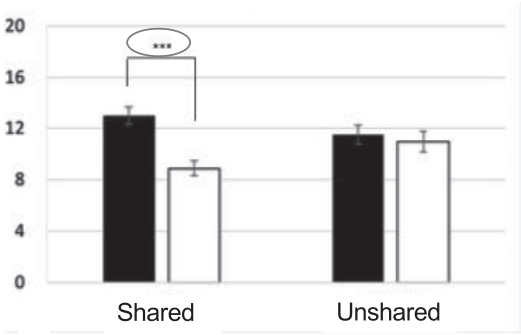
1. Empathy

1. PGG（Cash）

23

Study 4: Results

Cooperative behavior



Negative experience

Positive experience

*** $p < .001$

"可以共患难"
"不可共安乐"

Mediating effect

1. Empathy ×

24

Discussion of Study 3 & 4

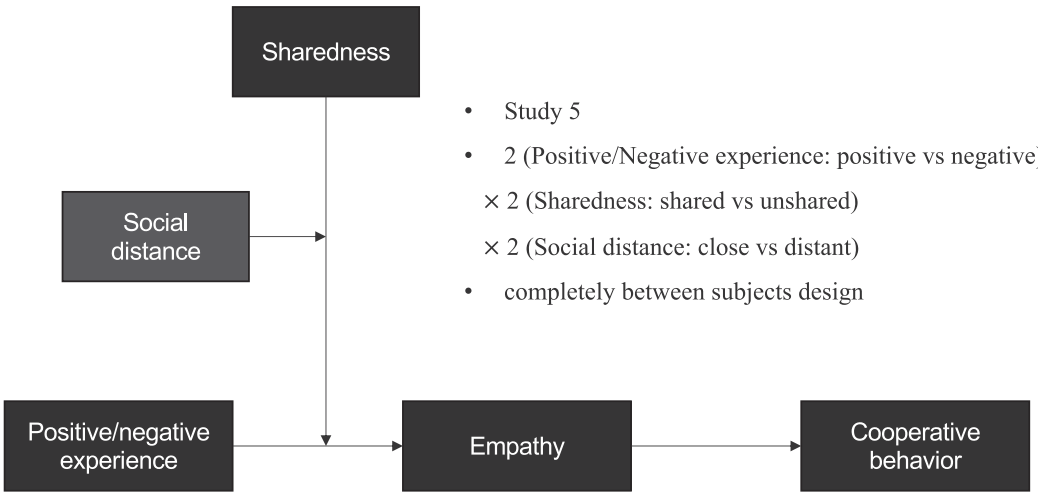
· **Sharedness** mediated the effects of **positive/negative experience** on cooperative behavior: Sharedness is the necessary condition for negative experience to promote cooperative behavior.

Only shared negative experience, but not shared positive experience, unshared negative experience or unshared positive experience is benefit for cooperative behavior.

· **“共患难-共安乐” Effect**: People who share negative experience cooperate more than those who share positive experience.

25

· **Question 3: What’s the boundary condition for the “共患难-共安乐”effect?**

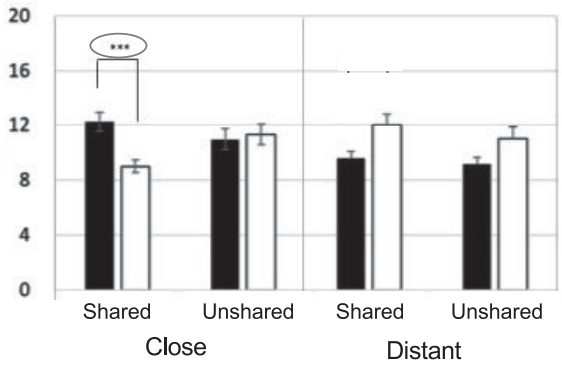


- Study 5
- 2 (Positive/Negative experience: positive vs negative),
  × 2 (Sharedness: shared vs unshared)
  × 2 (Social distance: close vs distant)
- completely between subjects design

26

Study 5: Results & Discussion

Cooperative behavior



Negative experience

Positive experience

*** $p < .001$

“共患难-共安乐” effect

only existed in close social distance condition, showing that shared negative experience might reduced the social distance between co-experiencers.

Mediating effect 1. Empathy ×

27

Conclusions & General Discussion

·“共患难-共安乐”effect, not “患难-安乐 ”effect. → ·Controversy between positive and negative experience: Limited variables, such as Sharedness.

·Empathy didn’t show mediating effect. → ·Emotional and cognitive perspective. Empathy (7-point scale), eg., softhearted, warm

·“共患难-共安乐” effect only occurred in close social distant condition. → ·Social functional theory

28

Conclusions & General Discussion

Journal of Pacific Rim Psychology

www.cambridge.org/prp

Original Article

Cite this article: Qi F., Sun Q., Yao J., Dai R., Wang X., and Liu Y. (2020) Pain and sharing: A re-examination of the findings of Bastian, Jetten, and Ferris (2014). *Journal of Pacific Rim Psychology*, Volume 14, e13. https://doi.org/10.1017/prp.2020.6

Received: 16 August 2019
Revised: 2 January 2020
Accepted: 10 February 2020

Keywords:
pain; sharing; bonding; cooperation; empathy

Author for correspondence:
Yongfang Liu, Email: yfliu@psy.ecnu.edu.cn

Pain and sharing: A re-examination of the findings of Bastian, Jetten, and Ferris (2014)

Fangzhu Qi, Qian Sun, Jin Yao, Rubing Dai, Xiuxin Wang and Yongfang Liu

School of Psychology and Cognitive Science, East China Normal University, Shanghai, PR China

Abstract

Bastian, Jetten, and Ferris (2014) cooperative behavior, but that sha pain is a type of social glue that c painful and painless experiences determine whether sharing is the with nonshared conditions. We c of pain and sharing on enhanci conditions of unshared pain and Jetten, and Ferris's (2014) finding by empathy. In experiment 2, we found that while shared pain stil unshared pain did not induce m we found that empathy significant participants shared the experience for pain to act as social glue.

International Journal of *Environmental Research and Public Health*

MDPI

Article

Effects of Positive and Negative Experiences on Cooperative Behavior: The Role of Sharedness

Fangzhu Qi [1], Wei Wang [1], Minghui Wang [1,*] and Yongfang Liu [2,*]

[1] Institute of Psychology and Behavior, Henan University, Kaifeng 475004, China
[2] School of Psychology and Cognitive Science, East China Normal University, Shanghai 200062, China
* Correspondence: wmhwang@henu.edu.cn (M.W.); yfliu@psy.ecnu.edu.cn (Y.L.)

Abstract: Cooperation is a fundamental ingredient of society. However, research on the effects of positive and negative experiences on cooperation remain largely inconsistent. Therefore, through two experiments, the present study examined the effects of positive and negative experiences on cooperative behavior, and the moderation effect of sharedness on this relationship. In Study 1, we directly compared positive and negative experiences in the same context. Seventy-four students participated the experiment (M_{age} = 19.88, SD_{age} = 2.21). Results showed that participants reported

29

Why not release a little bit of your scars?

Maybe a cooperator is waiting for you in the future.

HENU · KGU

30

· **References**

Bastian, B., Jetten, J., & Ferris, L. J. (2014). Pain as social glue: Shared pain increases cooperation. *Psychological Science, 25*, 2079–2085.

Baumeister, R. F., Bratslavsky, E., & Finkenauer, C. (2001). Bad is stronger than good. *Review of General Psychology, 5,* 323–370.

Elizabeth Pennisi. (2005). How did cooperative behavior evolve? *Science, 309*, 93.

Hayes, S. C., Strosahl, K., & Wilson, K. G. (1999). *Acceptance and Commitment Therapy: Understanding and Treating Human Suffering.* New York, NY: Guilford Press.

Isen, A. M., & Levin, A. F. (1972). Effects of feeling good on helping: Cookies and kindness. *Journal of Personality and Social Psychology, 21,* 384–388.

Kahneman, D., & Tversky, A. (1979). Prospect theory: An analysis of decisions under risk. *Econometrica, 47*, 313–327.

Lu, J., & Wang, Y. (2016). The effect of psychological insecurity on risk preference. *Advances in Psychological Science, 24,* 676-683.

Niedenthal, P. M., & Brauer, M. (2012). Social functionality of human emotion. *Annual Review of Psychology, 63*, 259–285.

Osgood, C. E., & Tzeng, O. C. S. (1990). *Language, meaning, and culture: The selected papers of C. E. Osgood.* New York: Praeger.

Staub, E. (2005). The roots of goodness: The fulfillment of basic human needs and the development of caring, helping and nonaggression, inclusive caring, moral courage, active bystandership, and altruism born of suffering. In G. Carlo & C. Edwards (Eds.), *Moral motivation through the life span.* Lincoln, NE: University of Nebraska Press.

Vollhardt, J. R. (2009). Altruism born of suffering and prosocial behavior following adverse life events: A review and conceptualization. *Social Justice Research, 22,* 53–97.

Wardil, L., Silva, I. R., & da Silva, J. K. L. (2019). Positive interactions may decrease cooperation in social dilemma experiments. *Scientific Reports, 9*, 10–17.

31

2023 年度卒業論文 題目一覧

担当教員　石﨑　淳一

・インターネットショッピングの利用と性格特性の関連について
・介護や援助における家族の感情や負担感に関する研究の動向
・対人ストレスと性格特性の関連について
・名前の満足度と自己肯定感との関連について
・インターネットの使用状況と性格特性の関連について
・女性特有のがん患者における闘病生活での心理的状況とケア
・日本の男女差別意識の現状とジェンダーギャップ指数改善への提案――アイスランドとの比較から――
・意思決定に影響を与える要因についての文献研究
・親の養育態度が子どもの被受容感・被拒絶感へ及ぼす影響
・感情表出によるコーピングと本来感，過剰適応の関連
・シャイネスへの対策についての考察
・マスクを着用することが人の感情に及ぼす影響について
・青年犯罪の犯行動機と世間が思う非行少年らの犯行動機のイメージとの乖離について

担当教員　岡村　心平

・男性プロテニス選手に学ぶストレスとの共存方法について
　――ソーシャルサポートの重要性とその応用に関する文献研究――
・女子大学生長距離選手における競技実績とコーピングスタイルの関係
・就活過程での性格検査の使用実態は心理学的に妥当なのか
　――文献研究と就活生へのインタビューによる「就活的望ましさ」の検討――
・イップス問題から考えるソーシャル・サポートの意義
　――部活動における「居場所」としての役割の検討――
・発話時の「難発」に関する一人称研究――他者の吃音経験と比較して――
・大学生における自己愛傾向とファン心理・行動からみた同担拒否傾向についての調査研究
・ゲーム依存の問題の要因と現代の予防策の検討
・ディズニーランドはどのように非日常的空間を創り出しているのか
・大学生における身体装飾の意識とユニークネス尺度との関連について
・スポーツ心理学におけるメンタルトレーニングは本当に競技力を高めるのか
　――文献研究による批判的検討――
・野球の試合における「流れ」は勘違いなのか？――認知バイアスに基づく実況解説の質的研究――
・「蛙化現象」とは現代の若者特有の問題なのか
　――好意恐怖症（好き恐怖症・恋愛恐怖症）・パーソナルスペースからの考察――
・スポーツ経験の有無とメタ認知能力の関連性について
・シンセベースの音の形によるグルーヴ感とリズム感，身体同調への影響
・身体感覚と温感・冷感によるメタファーとオノマトペの関係性
　――コーパス研究によるフレーム理論のマッピング――

担当教員　定政　由里子

・自炊と健康意識の関連について
・音楽聴取における歌詞と物語理解に伴う主観的体験の関連について
・健康場面での自己統制葛藤における誘惑対処方略の検討
・援助要請スタイルと会話意識からわかる HSP 気質の傾向
・大学生が感じる自己肯定の要因について
・ひきこもり研究の動向と現状からみた今後の研究課題
・ポジティブ志向と関係的幸福感との関連について
・インターネット上での友人の有無が友人関係の特徴や性格傾向に及ぼす影響
・新型コロナウイルス感染症への不安とマスクの着用習慣の関連性
・物質的贈り物と経験的贈り物の幸福感に関する検討と性格特性が与える影響について
・強迫性障害について
・きょうだいの性別構成が社会的スキルおよびソーシャルサポートに及ぼす影響
・色の組み合わせの違いによるブーバ・キキ効果の検討

・憧れの人の存在の有無はポジティブ傾向に影響を与えるのか

担当教員　清水　寛之
・大学生のストレス解消方法とパーソナリティ特性
・スポーツ活動におけるフロー体験が大学生活に及ぼす影響
・時間的展望と後悔との関係
・説明文における読解力と社会的外向性の関連性
・商品の限定販売に関するラベルが商品の魅力度及び購入選択に及ぼす影響
・青年前期における養育者・担任教師・一般他者との関係が青年後期の被受容感・被拒絶感に及ぼす影響
・SNS，ゲームへの依存度とメタバース空間内での選択傾向の関連性
・大学生の居場所感覚と家具の選択傾向との関係
・大学生における「推し」とフロー経験
・飲酒の頻度と意識との関連性
・感情の覚醒度の異なる表情が対話欲求に与える影響
・希望寿命と自己肯定感および well-being の関係
・対人関係に及ぼす楽観主義と悲観主義の影響――場面想定法による検討――

担当教員　竹田　剛
・コミュニケーションスキルと教室における座席選択の関連性
・お笑い動画への評価・興味とパーソナリティの関連性
・小学生の共食でのコミュニケーションが現在の対人コミュニケーションに与える影響について
・Instagram の利用頻度と承認欲求の関係性について
・大学生における自己肯定感と友人関係および言葉表現の関連について
・レジリエンス研究と活用
・パーソナリティ特性とメイクの捉え方の関係性
・ポジティブ・ネガティブな自己の捉え方の成り立ち――パーソナリティの関連から――
・解離的空想と攻撃性の関連性
・文化的自己観からみるファン心理の形成について
・コロナ禍における音楽ライブの評価
・時間的信念がコロナ禍・ポストコロナの捉え方に与える影響
・価格 POP のフォントおよび色とお得感との関連について

担当教員　筒井　優介
・趣味についての消費行動と優越感および自律性欲求との関連の検討
・コロナ禍と現在における外出行動と学習態度の関連性
・話し方の特徴が話者の性格印象と好感度に与える影響について
・罪悪感の抱きやすさと共感性の高さおよび性格特性の関連性
・時間コントロール感と自尊心，自己効力感の関連の検討
・顔のパーツ配置が他者からの顔の形態評定および印象評定に与える影響の検討
・性格特性による限定ラベルの効果について
・顔のついている食べ物の食べにくさと心理的抵抗感ならびに共感性と Big five との関連の検討
・攻撃性の表出傾向ならびに自己愛傾向と攻撃的運転の関連の検討
・血液型と自己肯定意識および性格特性との関連の検討
・就職活動と友人関係および自己効力の関連性についての検討
・食事場面における同調現象と性格傾向との関連について
・蛙化現象はなぜ起こるのか――その心理的要因と対処――
・Instagram 利用者の自己呈示における承認欲求と心理的影響の関連について
・推しがいることによる幸福感の変化について

担当教員　土井　晶子
・家庭環境と少年犯罪の関連性について
・子どもからみた親への評価と子ども自身の自己評価の関係について

・心理学部生における発達障がいの知識と援助行動，合理的配慮の関連について
・羨望・嫉妬においての性格特性と自己肯定意識の違い
・学生と勤労者のコーピング特性の比較――学部と就職希望職種に注目して――
・アルバイトの種類と BigFive，社会的スキルの関連
・歌詞の 1 人称と共感性 , 性格特性との関連
・趣味の多さと好奇心・友人関係の関連
・「行けたら行く」と答える人の性格について
・苗字の希少度・魅力度とその記憶されやすさの関係
・アイドルなどにハマる大学生の恋愛に対する態度及び恋愛依存傾向について
・コラージュによる自己理解
・恋愛経験と自己肯定感の関連
・自己内省・自己反芻傾向が自己成長主導性，フォーカシング的態度に与える影響
・感覚処理感受性が高い者が用いる対処方略の有効性の検討――主観的健康感を対象として――

担当教員　難波　愛
・推し活における主観的幸福感と消費行動との関係

担当教員　松島　由美子
・大学生における心のゆとりが楽観主義や自己肯定感に及ぼす影響

担当教員　村井　佳比子
・大学生の犯罪者プロファイリングのイメージに関する研究
・コーヒーの香りが気分に及ぼす影響
・親切な人は得をしているのか――親切と主観的幸福感の関連性――
・大学生のきょうだいの有無と恋愛経験の有無の友人関係および恋愛観の関連
・文字を介したオンラインコミュニケーションスキルと文章産出スキルの関連
・「推し活」と主観的幸福度との関連
・幼児期の親とのふれあいと青年期の親子関係および親の情動表現スタイルとの関連
・非科学的な事象への態度と実際の行動との関連
・大学生の精神的健康 , ソーシャルサポートおよび学校生活満足度の関連
・児童期の親子関係及び青年期の友人関係と向社会的行動との関連
・ボランティア活動経験による援助成果――学生を対象として――
・方言の特徴が聞き手に与える印象について
・日常解離体験の適応的側面に関する研究
・大学生の自己受容と過剰適応および対人ストレスコーピングの関連
・大学生の Highly Sensitive Person 傾向と偏食傾向の関連

担当教員　毛　新華
・過去の成功体験の強さが現在の特性的自己効力感に与える影響
・アイデンティティの形成と孤独感がファン心理・行動に与える影響
・愛着と社会的逸脱行為に対するイメージの関連
・性格特性が同調行動に与える影響
・ソーシャルサポートおよび自尊感情が不決断傾向に与える影響の検討――大学生を対象とした検討――
・スポーツモチベーションと負けず嫌いに関する研究
・攻撃性が具像画と抽象画における絵画印象に及ぼす影響
・映画広告における言葉やデザインが視聴意欲に与える影響
・恋愛至上主義および外見重視傾向が恋愛タイプの強さに与える影響
・大学生の恋愛観・結婚観 2023
・浴槽に浸かる質と気分の関連性
・形の印象と性格の関係性についての検討
・限定ラベルが商品に感じる魅力度および喪失度に与える影響

担当教員　山本　恭子

・ナンパ経験の有無と性格特性との関連についての検討
・文章の提示方法とジャンルの違いが文章理解に及ぼす影響
・歌詞の有無と課題の種類が音楽聴取中の課題遂行に及ぼす影響
・着用するマスクの色の違いが顔の印象に及ぼす影響
・自己満足感が他者に対する嫌悪感情に与える影響
・音楽を演奏することによって起こる気分の変化
・食品の温度イメージと色の温度イメージの一致・不一致による広告の印象差の検討
・声の高さが対人魅力に及ぼす影響の検討
・非現実的楽観主義の構成要因の検討――認知的方略と仮想的有能感および内的作業モデルの関連から――
・ファン層と生きがい感・承認欲求との関連
・大学生を対象とした過去と現在における主観的幸福感の変化
　――対人関係と学業のライフイベントからの検討――
・説得的コミュニケーションにおけるスピーチ速度とメッセージ内容の身近さが信憑性と説得力へ及ぼす影響
・恋愛傾向と被服行動の関連性
・環境配慮が商品の付加価値になりうるのか――価格差を交えての検討――

就活過程での性格検査の使用実態は心理学的に妥当なのか
――文献研究と就活生へのインタビューによる「就活的望ましさ」の検討――

C120037　藤本 美香

本研究では，就活において性格検査が多用される背景とその妥当性，心理学部生が感じる実態と学びとのギャップを明らかにするため，文献と面接法による研究を行った。研究の結果，多用される背景として新卒文化が有する職務スキルではなく人柄重視であることが大きな要因であった。また，妥当性については，用いられている尺度や回答方法では，作為回答の検出は可能であるがそれと同時に神経症の低さや調和性などの何らかの性格の一部を測定している可能性があることが明らかとなった。加えて，妥当性が認められていないものも存在した。そして，実態としてインフォームド・コンセントが実施されていない等の心理学が提唱する倫理規定や配慮に大きく反する実態があり，さらに心理学部の就活生は「就活的望ましさ」と呼びうる学部での学びとのズレを感じ葛藤や悩みを経験していた。以上のことから，就活場面での性格検査の使用実態は妥当であるとはいえず，さまざまな課題が存在すると考えられる。

ボランティア活動経験による援助成果
――学生を対象として――

C120104　横山 未来

本研究の目的は，学生がボランティア活動経験によって得られる「援助成果」を検討し，学生ボランティアに必要な心理的支援について考察することであった。研究 1 では，学生 380 名を対象に，ボランティア活動経験の有無による援助成果に対する評価の差を検討した。援助成果に関する項目の因子分析では,「肯定的感情の経験」「自己成長」「向上心の芽生え」の 3 つの因子が抽出された。3 因子において，活動経験者の得点が有意に高く，援助成果を高く評価していることが示された。研究 2 では，大学生 10 名を対象に，ボランティア活動前後の援助成果の変化と活動中の悩みを検討した。援助成果の認識は活動前から高く，最も高かったのは「自己成長」で，活動後の評価も高くなることがわかった。また，活動前の不安や「被支援者への対応の難しさ」の悩みに対してのサポートの必要性が示唆された。

前思春期の子どもが空想の友達をもつ心理的な意義
――『思い出のマーニー』の分析を用いて――

8C22101　新井 杏子
（指導教員　難波 愛）

前思春期とは，10 歳から 12 歳の短い期間を指し，重要な他者との関係の変化や，生死を通して世界の中の自分を意識し直すなどの心理的な変化が起こる時期である。また，前思春期の子どもが主人公として描かれた作品では，その子どもが空想の友達をもつ場合が多い。空想の友達の存在が特徴の 1 つである「空想傾性」は，創造性や共感性と関連がある一方で，PTSD や悪夢想起といった精神的病理との関連性も報告されている。以上のことから，本研究では「前思春期の子どもは，空想の友達との出逢いや遊びを通して，アイデンティティの確立につながる精神発達を促す。また，死別を体験した前思春期の子どもにとって，空想の友達は，死別体験による心の傷を癒す役割を担い，その子どもの精神発達を促進させる存在である」という仮説のもと，先行研究の知見や『思い出のマーニー』の分析を通して，前思春期の子どもが空想の友達をもつ心理的な意義を検討した。

その結果，物語分析では，主人公アンナと空想の友達マーニーとの間にチャムシップが形成され，アンナは，喜怒哀楽を素直に表現するマーニーをモデルとして，感情表出や他者との関わり方を学ぶことにより，精神的な強さを得たことが示された。一方，マーニーは遊びや会話を通して，アンナの死別した実母及び祖母に対する怒りや社会からの疎外感を癒し，アンナの感情表出の促進や社会性の向上を援助する役割を担っていたと結論づけた。次に，前思春期の子どもに対する空想の友達の役割については，持ち主である子どもの「鏡」として機能し，その子どもの自己や自我の発達を促すことと考えられ，特に，死別を体験した前思春期の子どもに対しては，その心の傷を癒し，滞っていた精神面の発達やレジリエンスの促進に寄与していると考察した。最後に，前思春期の子どもが空想の友達をもつ心理的な意義は，空想の友達との交流を通して，その子どもが社会の中で抑圧していた自分らしさや自覚していなかった新しい側面，乗り越えなければならない課題といった自分の内面に向き合い，自分自身を主観的に捉えることと考えられる。今後の展望では，物語分析における前思春期の精神発達と空想の友達との関連性について，文化的要因や時代背景の観点を含めた検討を行う必要がある。また，アニメーション作品の流行や子どものスマートフォン所持率の上昇といった近年の社会的変化は，子どもの空想の友達の持ち方に関する検討をより深めることができる視点であると考えられる。

ハラスメントの目撃・被害経験が攻撃性に与える影響
――ソーシャルサポートによる攻撃性緩和効果――

8C22102 大柿 玲
（指導教員　山本 恭子）

職場のハラスメントは最もパワーハラスメントの被害率が高く，過去 3 年間減少もしていない。社会的関係への所属欲求が満たされない場合には攻撃性が高まるとする「所属欲求仮説」によると，職場からの排斥経験と捉えられるハラスメント被害は攻撃性を高めるのではないかと考えられる。しかし，職場以外のソーシャルサポートにより所属欲求が満たされれば，攻撃性への影響は緩和されることが推測される。本研究では職場におけるハラスメントの被害・目撃経験が攻撃性を高めるのか，さらにソーシャルサポートが両者の関係に影響を及ぼすのかについて検討する。ハラスメントと攻撃性の時間的な因果性を検討するため 2 時点調査を実施した。仮説 1 は「ハラスメントを受けている人は攻撃性が高くなる」，仮説 2 は「ハラスメントを受けている人は攻撃性が高くなるが，ソーシャルサポートがある人はハラスメントから攻撃性への正の影響が抑制される」であった。

3 ヶ月程度の期間をあけて実施した 2 回の調査で 254 名（男性 143 名，女性 111 名)が有効回答数であった。質問紙にはハラスメントの目撃・被害経験を測る尺度，攻撃性尺度（短気，敵意，身体的攻撃，言語的攻撃)，ソーシャルサポート尺度（友人，家族，大切な人からのサポート）を使用した。

1 時点目（T1）と 2 時点目（T2）における下位尺度得点の相関分析を行ったところ，T1 目撃ハラスメントは T2 短気・敵意・身体的攻撃と正の相関が，T1 被害ハラスメントは T2 敵意・身体的攻撃と正の相関があった。次に，ハラスメントと攻撃性の時間的な因果関係を検討するために，交差遅延効果モデルによる分析を行った。この際，ソーシャルサポートの影響を検討するため，平均値により高低群に分類し分析を行った。ソーシャルサポート高群では T1 ハラスメント被害が T2 の短気，敵意，言語的攻撃に負の影響があった。ソーシャルサポート低群でも T1 ハラスメント被害から T2 敵意に対して負の影響があった。さらに，ソーシャルサポート高低群共に，T1 敵意が T2 ハラスメント目撃・被害経験に対して正の影響があった。

仮説 1「ハラスメントを受けている人は攻撃性が高くなる」について，相関分析では一致する関連が見られたものの，交差遅延効果モデルにおいては支持する結果は認められなかった。仮説 2 は仮説 1 を前提とする仮説であるので，支持されたとは言い難いが，ソーシャルサポートの程度によってハラスメントから攻撃性への影響が異なることは明らかとなった。一方，T1 敵意から T2 被害・目撃ハラスメントに対する正の影響が認められた。敵意的な人は被害的な認知を持ちやすく，ハラスメントという攻撃の場面において敏感で認識しやすいと考えられる。以上のことから，ハラスメントの目撃や被害から攻撃性の影響は見られなかったが，反対に攻撃性の敵意感情がハラスメントの目撃や被害に影響を及ぼしていることが示唆された。

「叱る」がマルトリートメントに至る要因の解明と親への予防教育

8C22103（著者の希望により氏名不掲載）

（指導教員　難波 愛）

本研究では，マルトリートメントの中でも現在の子育てにおいて多用されているであろう「叱る」に焦点を当て，「叱る」がマルトリートメントに至る要因の解明と，親への予防教育に関する文献研究を行った。その結果，①子育ての実態，②戦後日本の子育て環境や悩みの変遷について述べた後，③ひとり親，④親の子どもに対する認知，⑤叱ることの常態化，⑥孤立感，の 4 つを「叱る」がマルトリートメントに至る要因として挙げた。しつけと虐待について，⑦「叱る」とマルトリートメントの関連として述べた後，そこに親の意図は関係なく，子どもへの影響のみで判断するという⑧マルトリートメント予防の必要性について述べた。

次にマルトリートメント予防のための親への予防教育として，市町村での子育て支援を考えた。①兵庫県内の神戸市，姫路市，西宮市，明石市，豊岡市の 5 つの都市の子育て支援の実態を項目別に表にまとめ，　それぞれの支援の特色を比較した。②行政の子育て支援における心理職の活動，課題点について述べた。最後に，文献研究として調べた『「叱る」がマルトリートメントに至る要因』と，『親への予防教育』の 2 点をつなぎ合わせ，「今後のマルトリートメント予防のための子育て支援策」とし，考察した。「ひとり親」には『経済的な支援』が第一段階として特に有用である。心理士が出来る支援として，必要時に速やかに親への情報提供を行うため，　経済的な支援の知識を持っていることが挙げられる。「親の子どもに対する認知」，「叱ることの常態化」には，『相談支援』を行うのが良いと推測できる。早い段階で，親に対する適切でかつ具体的な分かりやすい心理教育を行える場所や機会をより多く確保するべきである。そのため，親が気軽に利用できるよう心理士がより広範にアウトリーチが出来る仕組みを整えることが重要である。「孤立感」には，『社会資源における親支援』が有用であると考えられる。親子で無料で利用できる児童館やプレイルームといった場所を増やすことや，そこに心理士を配置し，困り感を抱えている親が『どこに困っているのか』を丁寧に聞き取るような支援や，子どもの発達や子育てに関する心理教育などのきめ細やかな支援が，親の「孤立感」の軽減につながるのではないだろうか。

本研究の今後の課題は，①研究方法としてインタビューや質問紙調査を行い，実際の親の声や満足度を取り入れた研究を行いたい。次回研究の機会があれば，実際の声も取り入れた研究方法を検討したい。②また，マルトリートメントに至る親側の要因だけでなく，子ども側の要因はどのようなものがあるのか，そしてそれらに対する支援についても考えたい。

日本における Highly Sensitive Person (HSP) の研究動向
――「美的感受性」因子に着目した文献的検討――

8C22104　川上 綾音
（担当教員　石﨑 淳一）

本研究では，日本における HSP（Highly Sensitive Person）の研究について概観することと HSP を「美的な感受性」の視点に注目して検討することを目的とした。学術情報データベースで検索を行った 26 件の文献のうち，心理尺度に関する文献を中心に扱うこととした。

HSP は，Aron & Aron (1997) によって提唱された概念であり， 生得的な特徴であり感覚器自体ではなく感覚情報の脳内処理過程における基本的な個人特性のことを指す SPS（Sensory Processing Sensitivity）が高い人のことを HSP としたことがわかった。

HSP を測定する心理尺度について，Aron & Aron (1997) の HSPS と日本で作成された 5 つの尺度論文について検討した。Aron & Aron (1997) と髙橋 (2016) ，船橋 (2013) と飯村 (2016) のように，先に作成された尺度をもとに日本版や違った年齢を対象としたものを作成している尺度があることがわかった。また，HSP の一般人口における割合について，Aron & Aron (1997) は 15% から 20%としているが，HSPS のカットオフ値についての言及はなく，日本で開発および作成された尺度についてもカットオフ値について言及しているものは見られなかった。性差について Aron & Aron (1997) は，女性は男性より有意に高い得点であるとしている。髙橋 (2016) の HSPS-J19 でも原版と一致している結果となっている。因子構造については，本研究における HSP を測定する尺度とそれに類似する尺度については， 3 因子構造を採用しているものがほとんどであった。

これらの心理尺度から HSPS-J19 を取り上げ，その下位因子である美的感受性因子について検討した。本研究で扱ったのは HSPS-J19 を用いた 7 件の研究である。HSP 全体，下位因子である低感覚閾と易興奮性においては，精神的回復力や精神的健康，自尊感情と負の相関が示されるなど，HSP 特性は生きていくうえで不利になるものであると考えられる結果が多く見受けられた。一方で，日本の研究における美的感受性因子に関する結果は，精神的回復力や人生に関する満足度，自尊感情と正の相関を示すなどポジティブなものが多く見られ，精神的生活を豊かに送ることができる可能性が潜んでいると言えるという結果であった。HSP 特性のうち特に美的感受性を持ち合わせている人は，そうでない人より多くのポジティブな感情が生起されることもあり，それらの特性を理解したうえで生活することで，より豊かな生活を送ることも可能となることが考えられる。美的感受性因子の安定性については，今回対象とした研究はどれもそれぞれの研究データに探索的に因子分析を行って見出したものではなく，美的感受性を「感覚処理感受性」に含めて 3 因子構造として捉えることに対して注視していく必要があるという結果であった。

今後，海外の研究を踏まえて日本の研究についても比較検討していくことが課題であると考える。実際には国外の HSP 研究は日本の研究より多くなされており，それぞれの国における文化による影響も考慮していく必要があるだろう。

創作物の描写に見る解離性同一症イメージの特性
――映画の質的分析と文献研究による検討――

8C22105　小玉 和瑚
（指導教員　石﨑 淳一）

解離性同一性障害を題材とする創作物は後を絶たない。精神疾患については人々が疾患に対して抱くイメージが実際の疾患像とは異なっていることも多い。解離性同一性障害はその傾向が顕著に認められ，創作物においても他の精神疾患と比較すると極端な描写が行われていることが多い。先行研究においても創作物を用いて精神疾患の検討を行ったものは存在するが，実際の精神疾患と人々が抱くイメージの間に生じる矛盾の程度について言及されているものは多くない。また，解離性同一性障害の発症要因として幼少期の被虐待体験があることは周知の事実であるが，それ以外の要因の存在も提唱されている。

これらのことを踏まえ，本研究では解離性同一性障害に対して人々が抱くイメージや創作物における描写の偏りを「解離性同一症イメージの特性」と定義し，これについて明らかにするために「1. 精神疾患の描写と相違点」，「2. 解離性同一性障害の描写の特性」，「3. 映画における解離性同一性障害の発症要因と専門家の見解」の 3 点から検討を行った。研究方法は解離性同一性障害を題材とする映画の質的分析と文献研究を採択し，比較対象としてうつ病と統合失調症を扱った。その結果，1 点目について，解離性同一性障害を題材とする映画では治療としてカウンセリングや催眠暗示が行われるなど現実的な描写も認められる反面，犯罪や人格統合については事実と異なる描写が認められた。その一方で，うつ病や統合失調症では概ね現実に即した描写が行われていた。2 点目については，解離性同一性障害では主治医による不適切行為が描写されており，犯罪についても最も突飛な描写が認められた。3 点目については解離性同一性障害の発症要因として幼少期の被虐待体験以外に対人関係などの要因があることが指摘されており，本研究で用いた映画でも従来考えられていた要因以外によって解離性同一性障害を発症しているものがあることが明らかになった。

解離性同一性障害を題材とする創作物において実際と誤った描写が認められる背景には「描写の可塑性の高さ」という要因があると考えられる。創作物に多重人格者が登場することで自由に描写を行うことが可能となる。停滞していた物語に深みが加わり，人々の関心を集めることができる。そのために事実と異なる描写が繰り返される。犯罪の描写についても，実際の症例など様々な要因が複合的に結合した結果，生じたものであると考えられる。

本研究には創作物の描写を通して人々が精神疾患に対して抱くイメージが明らかになるという研究意義があった。本研究が精神疾患，とりわけ解離性同一性障害に対するバイアスを意識し是正する契機となれば幸いである。

マインドフルネスが SC およびストレス反応に及ぼす影響
――大学生・大学院生を対象としたマインドフルネストレーニングによる検討――

8C22106　佐江 徹

（指導教員　小久保 香江・中川 裕美）

本研究の目的は，マインドフルネストレーニング(以下，MT)を実施し，セルフ・コンパッション(以下，SC)およびストレスなどメンタルヘルスに関連する指標への影響を検討することを目的とした。研究 1 では，MT によって SC の向上を促すという仮説のもと，マインドフルネスが SC およびメンタルヘルスに対して及ぼす影響について検討した。MAAS 得点，SC ポジティブ，SC ネガティブ，ストレス反応を変数として，パス解析を行った。結果，MAAS 得点からストレス反応へ有意なパスは認められなかった。一方で，MAAS 得点からストレス反応へ負の影響，MAAS 得点から SC ネガティブへ負の影響，SC ネガティブからストレス反応へ正の影響が認められた。結果より，マインドフルネスと SC の関連について，SC ポジティブに有意な影響は観察されず，SC ネガティブにおいては有意な影響が認められた。研究 2 では，12 名の学生を対象に，簡便で実施可能かつ短期間の MT を実施し，マインドフルネスと SC の関連およびメンタルヘルスに関連する指標への影響について検討した。測定時期(MT 前 – MT 終了時)を独立変数とし，MAAS 得点，SC ポジティブ，SC ネガティブ，職業性ストレス簡易調査票 57 項目のストレス得点および下位項目，POMS2 の総合気分得点(以下，TMD 得点)および下位項目を従属変数として対応のある t 検定を行った。さらに，マインドフルネス傾向と MT の体験の関連について検討するため，MT の前後 (2) ×初回 MT 参加時のマインドフルネス得点の高低による群分け (MAAS 高群/MAAS 低群) (2) の混合計画の分散分析を行った。結果，MT 期間前後において MAAS 得点および SC ポジティブ，SC ネガティブには有意な変化はみられなかった。ストレス得点については有意な得点の低下が認められたことから，短期間の MT でもストレスを低減した。一方で，マインドフルネスや SC の向上には期間が不足していた可能性がある。TMD 得点においても MT の実施前後で有意な得点の低下が確認された。分散分析では，SC ポジティブは，両群に交互作用や主効果は確認されなかった。SC ネガティブは，MAAS 高群において MT 期間の前後で交互作用がみられ，得点が低下した。つまり日常生活でマインドフルネスを頻繁に体験していた参加者は短期間のＭＴであっても SC ネガティブの影響が低減した。総合考察として，研究 1，2 においてマインドフルネスがストレスを低減させる可能性が示唆された。また研究 2 では，マインドフルネスの高さが SC ネガティブの影響を低減させ，この過程がストレス低減に起因する可能性も示唆された。

スクールカーストの構造と機能

――大学生のインタビュー調査を通して――

8C22107（著者の希望により氏名不掲載）

（指導教員　道城 裕貴）

著者の希望により要旨不掲載

販売スタッフの装いおよび接客態度が対人印象に及ぼす影響

8C22108 成瀬 さくら

（指導教員　毛 新華）

我々は他者と関わる際，相手の断片的な情報を使用して相手の全体像を判断するという対人印象評価を行っており，様々な対人場面において重要な役割を果たしている。それは，消費者行動時においても行うとされ，特に接客業にとっては，良い第一印象が仕事の円滑さへと繋がるため，身だしなみや接客態度等，マニュアルに細かに記載がなされている。

これらを踏まえ，本研究では，販売スタッフの装いと態度の違いが対人印象に及ぼす影響を調べることを目的とし，関西地域に在学している大学生 145 名(男性 65 名，女性 77 名，どちらでもない 3 名；平均年齢 19.5 歳，$SD = 1.66$)を対象に，質問紙による調査を行った。

対人印象評価尺度 18 項目について因子分析を行った結果，真面目さを主とした対人魅力に関する「誠実性」因子，対人距離や社交性に関する「外向性」因子の 2 因子が得られた。次に，対人印象評価尺度の各因子を目的変数，各装いと態度を説明変数とした参加者内の 2 要因の分散分析を行った。その結果，「誠実性」因子においては，装いの主効果と態度の主効果が有意となった。良装いの方が悪装いよりも，良態度の方が悪態度よりも誠実性得点が高かった。また，装いと態度の交互作用も有意傾向となった。「外向性」因子においても装いの主効果と態度の主効果が有意となった。悪装いの方が良装いよりも，良態度の方が悪態度よりも外向性得点が高かった。なお，対人的やりとりには「解読」能力が重要な関わりを持つことから，ソーシャルスキル自己評定尺度の得点をもとに，解読能力高群と低群に分けての検討も行った。結果は，群分けなしの場合と同様の結果が得られた。ただし，「誠実性」因子において，解読能力高群のみ装いと態度の交互作用がみられた。

総括すると，良装いおよび良態度の販売スタッフは誠実な印象が抱かれる上，対人魅力が比較的高く，悪装いおよび良態度の販売スタッフは外向的な印象が抱かれることが明らかとなった。つまり，悪い装いが一概に悪い評価に繋がるわけではなく，それを活かしてポジティブな方向へと繋がる可能性も示唆される知見が得られた。また，解読能力が高い者は，物事の良し悪しだけでなく，細かな部分を含めて弁別することができるといえる。なお，他業務の場面を用いた場合や，男性の販売スタッフの場合，マスクを非着用の場合など，刺激素材の変更によって抱かれる印象が異なる可能性が挙げられる。今後の「販売スタッフの対人印象の形成」に関する研究の精緻化に向けて，これらの点を検討する必要性があるといえよう。

吃音に対する支援の現状と今後の展望
――公認心理師の役割に焦点を当てて――

8C22109　羽賀 大輝

（指導教員　道城 裕貴）

本研究の目的は，吃音に対する文献展望を通して支援の現状を把握し，吃音当事者やその関係者に対する支援の展望について検討することであった。また，吃音臨床の分野における公認心理師の役割に焦点を当てて，吃音当事者やその関係者に対する支援の在り方について検討することも目的とした。コンピューターサーチやハンドサーチにより抽出された 37 編の論文を，研究手法によって 4 つに分類した。分類の結果，面接，質問紙調査，レビューに分類された 22 編の論文を主に用いて，現在の吃音に関する研究知見や支援の現状についてまとめた（分析I）。また，実践研究に分類された 15 編の論文を主に用いて，吃音当事者やその関係者に対する支援の現状や，今後の支援の展望についてまとめた（分析II）。

分析Iの結果，疫学，二次障害の実態，当事者やその関係者が抱える支援ニーズ，支援の現状，吃音のある子どもの親が抱える心情，家庭におけるサポートなどについて，近年の研究知見をまとめることができた。支援の現状として，吃音臨床の分野においては言語聴覚士が主な役割を担っていること，自助グループにより独自の専門性に支えられた支援が行われていること，専門職と自助グループが並列的な位置づけで相互補完する形で存在すること，治療において認知行動療法など心理学の理論が取り入れられつつあることなどが読み取れた。子どもに特化した場合，学校現場における支援の現状として，吃音の理解，対人関係の調整，吃音症状抑制のための配慮，といった支援が担任教師を中心として提供されていること，さらなる支援の充実のために，教師への吃音に関する正しい情報提供や他児への障害理解教育が行われていること，家庭と在籍学級の橋渡しのような役割を担う通級指導教室などにおいて，どもっても元気に生活できることを目指す専門的な吃音指導が行われていることなどが読み取れた。また，分析IIの結果，吃音は低年齢で発症することが大半であること，吃音当事者に対する支援は医療機関において言語聴覚士が担うケースが多いこと，発話へ直接働きかける直接法と発話以外の側面や環境面に焦点を当てる間接法の双方を並行して取り入れながら治療が行われていることが読み取れた。

これらの結果から，吃音臨床の分野における公認心理師の役割として，心理的な安定状態を作り出す心理療法的なアプローチ，二次障害に苦しまないように吃音初期の段階から行うべき予防的支援，認知の変容を促すアプローチ，などが期待されると示唆された。

強みの認識・注目・活用感が自動思考および抑うつに及ぼす影響

8C22110　濱崎 萌果

（指導教員　道城 裕貴）

近年，強みを認識することや，自己や他者の強みに注目すること，強みを活用することが抑うつの低減に有効であることが明らかになっている。阿部他（2021）は，強み介入に不可欠な構成要素として強みの認識・注目・活用感を挙げており，これらを促すことの重要性を指摘している。さらに，こうした強み介入を通し，抑うつを直接引き起こす自動思考の減少が認められた報告もある（末永・山本，2014）。しかしながら，強みの認識・注目・活用感と自動思考の関連については検討が行われてきておらず，強みの認識・注目・活用感の自動思考を含めた抑うつへの効果に関する機序は明らかされていない。そこで本研究は，強みの認識・注目・活用感と自動思考の関連を明らかにし，その結果を踏まえて，強みの認識・注目・活用感が自動思考および抑うつに及ぼす影響について検討を行うことを目的とした。調査は，WEB による質問紙形式で実施し，青年期に属する 259 名を対象とした。調査に使用した質問紙は，自己評価式抑うつ性尺度，自動思考を測る ATQ-R 短縮版，強み認識尺度，自己のポジティブ側面への積極的注目尺度，他者のポジティブ側面への積極的注目尺度，強み活用感尺度によって構成された。

まず，相関分析の結果，強みの認識，自己の強みへの注目，他者の強みへの注目，強みの活用感と自動思考との間に有意な負の相関が示され，強みの認識，自己の強みへの注目，他者の強みへの注目，強みの活用感が高いほど，自動思考が弱いことが推測された。この結果を踏まえ，共分散構造分析を行ったところ，強みの認識・自己の強みへの注目・強みの活用感から自動思考を介した抑うつへの間接効果が認められ，媒介分析によりその有意性が確認された。これらの結果から，強みの認識，自己の強みへの注目，強みの活用感は自動思考を媒介して抑うつに影響を及ぼすことが明らかとなり，強みの認識，自己の強みへの注目，強みの活用感は，自動思考を抑制し，抑うつを低減することが示唆された。一方，他者の強みへの注目については自動思考と抑うつへの影響は認められなかった。

本研究結果から，強みの認識・自己の強みへの注目・強みの活用感を促す介入は，自動思考および抑うつを低減させる可能性があることが推測される。今後は，青年期を対象とした自己の強みの認識・注目・活用感を促す介入プログラムの検討・開発を進め，実践的な介入研究を通して自動思考および抑うつに及ぼす効果を検討し，本研究にて示唆された知見を検証していく必要がある。

大学生の受動的な Instagram 利用により生じる社会的比較が自己肯定感へ及ぼす影響

8C22111（著者の希望により氏名不掲載）

（指導教員　難波 愛）

Instagram の利用率について，ICT 総研（2022）による調査では，10・20 代の利用率が約 7 割と高いことが示されている。新井（2022）では，社会的比較志向性が高く，周りと上方比較を行う傾向が強い人ほど，他者からの評価に敏感で，他者の投稿を見て羨ましいと感じ，その結果自分の評価を下げて落ち込みやすくなることが報告されている。

本研究では，Instagram を受動的に利用することで生じる社会的比較感情が自己肯定感へ及ぼす影響について検討することを目的とし，Instagram を受動的に利用することによって，他者と自分を比較する社会的比較感情が生じ，自己肯定感が低下するという仮説を設定した。本研究では，私立大学の大学生 298 名を対象とし，Qualtrics を用いて web 調査を行った。質問紙は，フェイスシート，Instagram の利用状況に関する質問，Instagram における社会的比較，それに対する自己認知，上方・下方比較の質問項目，大学生版自己肯定感尺度で構成されていた。また，解析には記述統計，相関分析，パス解析を使用した。

「Instagram の利用状況に関する尺度」から「社会的比較に関する尺度」，「社会的比較に関する尺度」から「自己肯定感に関する尺度」へパスを引き，共分散構造分析を行った。その結果，ストーリーに「いいね」をする頻度からステータス比較へ正の影響，ステータス比較から無条件の自己肯定，安定した自己へ負の影響があり，パスの繋がりがみられた。また，ストーリーの閲覧頻度から意見比較へ正の影響，意見比較から無条件の自己肯定へ正の影響があり，パスの繋がりがみられた。検討の結果，ストーリーへ「いいね」をすることで他者と自身のステータスを比較し，それによって自己肯定感が低下するという傾向がみられた。よって，仮説は一部支持されたといえる。

ストーリーへの「いいね」という同じ行為の中でも，ステータス比較，意見比較といった比較の方法が異なることで，自己肯定感への影響が異なることが示された。本研究では「ストーリーへ『いいね』をする」という行為によって，他者に対して上方比較を行い，その結果，自己肯定感が低下するのではないかと結論づけた。

今後の課題として，Instagram の利用の仕方がメンタルヘルスに影響が出る要因となると考える場合，能動的に利用する人と受動的に利用する人を比較して検討することが必要である。また，Instagram のアカウントを複数所有し，用途を分けて使用している人が大半を占めていたため，アカウントの用途別にメンタルヘルスへの影響を検討することが必要と考えられる。

大学生の特性シャイネスおよび社会的スキルがユーモア表出と受け取りに与える影響

8C22112　前阪 隆太

（指導教員　毛 新華）

対面コミュニケーションの中に，ユーモアというコミュニケーションのスタイルがある。ユーモアには，攻撃・遊戯・支援という分類があり，宮戸（2016）は，ユーモア表出行動が対人関係における潤滑油的な機能をもたらすとしている。では，ユーモアを含むコミュニケーションを促進する要因として，どのようなものがあるか。倉元・大坊(2012)によると，コミュニケーションを促進するものとして，社会的スキルがある。この社会的スキルには，記号化と解読スキルがある。一方，コミュニケーションを阻害する要因としてはどのようなものがあるのか。對馬・松田（2012）は，「特定の社会的状況を越えて個人内に存在し，情動的不安と対人的抑制という行動特徴を持つ症候群」として特性シャイネスを言及している。本研究では，この特性シャイネスがユーモア表出と受け取りにどのような影響を与え，社会的スキルとの関連についても研究することを目的とする。

私立大学に在籍する 151 名を対象とし，調査を行った。所要時間は約 15 分で，倫理的配慮についての説明を行い，同意を得た。本研究の質問紙は，フェイスシート・特性シャイネス尺度(16 項目)・内容変更したユーモア態度尺度(38 項目)・ENDE2 尺度(11 項目)で調査を行った。ユーモア態度尺度は授受関係が成立するように内容変更を行なった。

特性シャイネスの高低がユーモアに与える影響を調べるため，対応のない t 検定を行なった。結果は表出される支援的ユーモアのみ有意差が見られた。次に特性シャイネスの高低と記号化・解読能力の組み合わせがユーモアに与える影響について参加者間分散分析を行った。結果は表出される支援的ユーモアのみ影響が見られた。最後に特性シャイネスがユーモアスタイルに与える影響を明らかにするため，記述統計量を示し，相関分析と重回帰分析を行った。結果は表出される遊戯・支援的ユーモアに影響が見られ，支援的ユーモアが最も影響を受けたことが確認された。

これらの結果から，表出される支援的ユーモアは特性シャイネスの影響を受けることが明らかになった。受け取るユーモアに関しては種類に関係なく特性シャイネスの影響はないことが明らかになった。記号化・解読のスキルに関して，ユーモア表出と受け取りに与える影響はないことが明らかになった。研究課題は，受け取るユーモアの調査に用いた質問紙の妥当性を十分に検討できなかったこと，発信者と受信者の関係性を明らかにすることができなかったこと，という 2 点がある。

コロナ禍における労働環境の変化がワーク・ライフ・バランスに与える影響
――量的研究および M-GTA を用いた質的研究による検討――

8C22113　松田 涼

（指導教員　小久保 香江・中川 裕美）

本研究は 2 部構成となっており，研究 1 では，コロナ禍の労働者における仕事と家庭間の PS の決定要因について，探索的に検討することを目的とした。20 から 50 歳代の労働者 613 名を対象に WEB 調査を実施し，4 つの調査項目に回答してもらった。同居世帯のテレワーク経験と，仕事と家庭の境界管理がワーク・ファミリー・ポジティブスピルオーバー（以下，WFPS とする）およびファミリー・ワーク・ポジティブスピルオーバー（以下，FWPS とする）に与える影響について検討するために，WFPS，FWPS を基準変数，性別，年齢，中学生以下の子どもの有無，コロナ禍の仕事と家庭の境界（優先順位，時間管理，物理的環境，職場への希望，家族への希望），自尊感情得点を説明変数とし，コロナ禍のテレワーク経験の有無別に重回帰分析を行った。その結果，中学生以下の子どもがいないことや仕事と家庭の境界における時間管理，自尊感情が関連していることが示された。子どもの有無や仕事と家庭の境界管理における役割の柔軟性が関連しているのではないかと考察された。研究 2 では，研究 1 で行った量的研究では検討できなかったコロナ禍にテレワーク経験のある労働者における WFPS，FWPS が生じた具体的な行動や要因について，世帯，家族構成などの環境面におけるより詳細な特徴なども踏まえて，質的研究を通して明らかにすることを目的とした。また，(a) どのような経験を通して境界やワーク・ライフ・バランス（以下，WLB とする）の変化の再構築に取り組んでいったのか，(b) コロナ禍のテレワークを通じて境界や WLB への影響が大きい世帯の特徴はどのようなものかというリサーチクエスチョンを設定した。対象者はテレワーク経験のある労働者男女 10 名とし，インタビュー調査の逐語記録を基に M-GTA を用いて分析を行った。その結果，3 個の CG，11 個のカテゴリー，27 個の概念が生成され，それに基づきコロナ禍における労働者の WLB への影響プロセスの概念図を作成した。コロナ禍のテレワーク経験のある労働者は，≪仕事・家庭生活双方への影響≫の【境界変化】を中心に≪仕事における変化≫，≪家庭生活における変化≫内の仕事や家庭における生活に影響を与えていることが分かった。コロナ禍のテレワーク経験労働者は境界が変化した環境に時間をかけながらも順応していき，コロナが収束しつつある中でも，コロナ禍のポジティブな経験をライフスタイルに取り入れて WLB を形成していくことが考察された。本研究より，一度は WLB が不安定になったとしても，環境に対する適応的な行動をとることが安定した WLB を継続していくために有効になるのではないかと考えられた。

病弱児とその家族の心理的支援

8C22114（著者の希望により氏名不掲載）
（指導教員　小久保 香江）

令和 4 年度の文部科学省の調査によると，小・中学校を病気を理由に長期欠席している児童生徒は約 7 万 5 千人いると報告されており，その支援の重要性が指摘されている。本研究では，心身が病気のため弱っている状態が継続して起こる，又は繰り返し起こる病弱児を対象とし，病弱児の理解に関する研究，病弱児の家族支援について，親支援ときょうだい支援の観点から文献研究を行い，公認心理師が病弱児とその家族の心理支援においてどのような役割を担うことができるかを考察した。

全体を通して，病弱児の入院中の支援に関する論文は，看護師による研究がほとんどであり，医療現場での心理師の具体的な介入についてまとめた報告はほとんど見当たらなかった。病弱児の病気理解の研究として作文分析の論文を取り上げた。病気の語りは子どもの病気体験を理解するのに有効な方法であると考えられ，子どもの主観的な体験を理解することで，必要な支援を考察できる可能性があると思われる。

病弱児の心理支援の研究についてまとめた結果，病弱児のみでなく母親にも心理支援を行っていること，病気が多岐にわたり個別性が高いため支援の効果を測る難しさがあることが明らかとなった。家族支援の研究の検討から，入院時には家族の身体的・精神的負担が大きいことが明らかとなり，家族が自身の負担を相談できる場をつくることが求められることが分かった。きょうだい児支援の研究は介入研究が 1 件しかなく，入院が必要な病弱児のきょうだいにおいては，家族の関係性を良好に保つことが求められるため，保護者からの情報をもとに絵本を用いた支援が有効であることが明らかとなった。

本研究より，心理師の役割として，病弱児に対しては対象児の発達段階に応じた関わりを行うため，心理検査やカウンセリングなどを通したアセスメントが求められると考えらえる。また，病気の捉え方が健康関連 QOL に関連する傾向（武井他，2013）も示唆されているため，病気を前向きに捉えられるような関わりが必要であり，病弱児が自ら病気体験を想起して直面化することを支える存在（中内，2001）となることも求められるだろう。家族に対しては，家族の理解を深め家族支援ニーズを理解し，家族の希望や意向に沿う家族支援を実践する必要があるといえる（平谷他，2018）。患児の治療にのみ重点を置かず，家族全体を含めた支援の体制を整えていくことが必要であり，きょうだいやその家族が置かれている状況の多様性に合った対応が求められる（永田他，2015）ことから，医師や看護師，ソーシャルワーカーなど多職種と密に連携し，話を聞き助言するなどのコンサルテーションを行うことが重要である。

青年期の友人関係における親和動機と発言抑制が友人満足感に与える影響

8C22115　山根 梨瑚

（指導教員　山本 恭子）

発言の抑制は，友人関係を円満に築くための一種のコミュニケーション方法であると考えられる。本研究の目的は，近年希薄化してきているとされている友人関係において，友好的な関係を維持しようとする気持ちである親和動機が，発言抑制，友人満足感とどのように関連しているのか男女別で検討することであった。発言抑制とは，自発的か他律的に関わらず会話中に自分の意見や気持ちなどについて表出しない行動を指す（畑中，2003）。

私立大学に在籍する男女 94 名を分析対象とし，web 調査を行った。所要時間は約 15 分で，倫理的配慮について説明を行い，同意を得た。本調査の質問紙は，フェイスシート，友人満足感尺度，発言抑制に関する尺度，親和動機尺度で構成されていた。友人満足感尺度は 6 項目で構成，発言抑制に関する尺度は，「相手志向」「自分志向」「関係距離確保」「規範・状況」「スキル不足」の 5 下位尺度，41 項目で構成，親和動機尺度は，「親和傾向」「拒否不安」の 2 下位尺度 18 項目で構成されていた。また，解析には記述統計，相関分析については SPSS，多母集団同時分析によるパス解析については Amos を使用した。

親和動機尺度から，発言抑制に関する尺度，発言抑制に関する尺度から友人満足感尺度にパスを引き多母集団同時分析を行った。その結果，パス全体に総合的な繋がりは見られなかったが，男女間での違いとして，男性の方が女性に比べて，親和傾向からスキル不足に負の影響，拒否不安からスキル不足に正の影響，相手志向から友人満足感に負の影響，関係距離確保から友人満足感に負の影響，規範・状況から友人満足感に正の影響が見られた。

男性の方が女性に比べ，親和傾向が低い，または，拒否不安が高いほどスキル不足により発言抑制をしやすいことに関しては，女性は抑うつや不安な時ほど自己開示を行い，他者に気持ちを伝えコミュニケーションをとり，スキル不足を補っており，男性は不安が高いと弱みを見せることを避けるため，コミュニケーションをとる際の話題が難しくなりスキル不足を感じやすくなるのではないかと推測する。次に，相手志向，関係距離確保による発言の抑制が友人満足感を低めているということに関しては，自己開示の男女差が関係すると考えられる。相手のためを思い発言を抑制することは男性の性役割から反するため，相手志向，関係距離確保が友人満足感を低めるのではないかと考える。しかし，規範・状況による発言抑制は満足感を高めていた。相手志向は，１人や個別を連想させ，規範・状況は大勢やルールなどを連想させるため，個別ではなく，大勢のことを考え対応できたとき，男性は友人満足感を高めているのではないかと推測する。

今後の課題として，ネガティブ感情を表出することを抑制している可能性が高い男性のサポートをどのように行っていくか検討すること，スキル不足を感じやすい女性は精神的に負の影響を受けやすい可能性がみられるため，どのような介入を行っていくべきか検討するという 2 点が挙げられる。

2023 年度　活動報告
（教育・研究・社会貢献・大学運営）（アルファベット順）

土井 晶子（どい あきこ）

【教育活動】

1. 担当科目

［学部］

・心理学実験Ⅰ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅰ（心理学実験））
・心理学的支援法Ⅱ
・専門職心理実習Ⅰ（心理実習）
・心理学基礎ゼミナール（心理学基礎演習Ⅰ）
・心理学発展演習Ⅰ
・心理学発展演習Ⅱ
・卒業論文

［大学院］

・心理実践実習 B
・心理実践実習Ⅰ
・心理実践実習Ⅱ
・心理実践実習Ⅲ
・心理実践実習Ⅳ
・心理学演習Ⅰ
・心理学演習Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動

・臨床心理学系大学院生のスーパーバイザー

3. 学外での教育活動

・神戸女学院大学人間科学部　非常勤講師（「心理行動科学文献講読」）
・臨床心理系大学院修了生（鳴門教育大学大学院・関西国際大学大学院）のスーパーバイザー

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

・土井 晶子・森永 康子・清末 有紀・福留 広大（印刷中）.「フォーカシング的態度」と葛藤場面の対処方略，夫婦関係満足度と職務満足度の関連　人間性心理学研究，*41*
・松島 由美子・村井 佳比子・土井 晶子（印刷中）. 中小企業勤務者のメンタルヘルスに対する新型コロナウイルス感染症の影響　産業ストレス研究，*31*

3. 学会・研究会発表

・土井 晶子・村井 佳比子・中川 裕美・松島 由美子・秋山 学（2023）. 中小企業で有効なメンタルヘルス支援プログラムの開発　日本産業精神保健学会第 30 回大会（8 月 26 日～ 27 日　日本赤十字看護大学にて）
・土井 晶子（座長）（2023）パーソン・センタード・セラピーの臨床観に関する理論的検討――学派内の論争を素材として――（発表者：並木 崇浩・白﨑 愛里）日本人間性心理学会第 42 回大会（9 月 23 日～ 24 日　福井 AOSSA にて）

4. その他

・陸上自衛隊姫路駐屯地　非常勤カウンセラー
・（独）大阪産業保健総合支援センター　産業保健相談員

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

・科学研究費補助金 基盤研究（C）　土井晶子（研究分担者），「中小企業で有効なメンタルヘルス支援プログラムの開発」（研究代表者：松島 由美子，令和 3 ～ 5 年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

・Scientific Committee member for PCE2024
・『人間性心理学研究』論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

・「セルフ・コンパッションで自分をいたわる」（（独）大阪産業保健総合支援センター主催一般産業保健研修　2023 年 4 月 24 日（独）大阪産業保健総合支援センターにて）
・「心のメッセージを聴くフォーカシング」（（独）大阪産業保健総合支援センター主催一般産業保健研修　2023 年 5 月 23 日，6 月 19 日（オンライン），7 月 20 日，7 月 24 日，8 月 29 日）（独）大阪産業

保健総合支援センターにて）
・「ストレスマネジメントに活かすフォーカシング」（（独）兵庫産業保健総合支援センター主催一般産業保健研修　2023 年 10 月 30 日，2024 年 1 月 23 日　兵庫県医師会館にて）
・「心のメッセージを聴くフォーカシング」（大阪府社会保険協会メンタルヘルスセミナー　2023 年 11 月 13 日 大阪府社会福祉会館にて）
・「心のメッセージを聴くフォーカシング」（大阪自転車健康保険組合セミナー　2023 年 11 月 21 日 大阪自転車健康保険組合にて）
・「自分にやさしくするセルフケア」（東洋製罐（株）茨木工場メンタルヘルスセミナー　2024 年 1 月 29 日　東洋製罐（株）茨木工場にて）
・「セルフ・コンパッションにフォーカシングを活かす」（フォーカシング in 甲子園 2023　2024 年 1 月 27 日　甲子園カウンセリング研究所にて）
・「日本フォーカシング協会国際交流グループミーティング with Dr. Doralee Grindler Katonah」（通訳）（日本フォーカシング協会国際交流グループ主催 2024 年 2 月 18 日　オンライン）
・「こどもと共に歩む創造的なプロセス」（通訳）（2023 年度こどもとフォーカシング研究会第 5 回セミナー　2024 年 3 月 20 日　オンライン）
・「PCE-Kansai with Dr. David Murphy」（通訳）（PCE-Kansai 主催研修会　2024 年 3 月 23 日～ 24 日　関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館にて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
・『神戸学院大学心理学研究』論文査読

【大学運営】

1. 学内委員
・男女共同参画委員
・心理臨床カウンセリングセンター長

2. 学部内委員
・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
・心理臨床カウンセリングセンター運営委員

3. その他
なし

道城 裕貴（どうじょう ゆき）

【教育活動】

1. 担当科目
[学部]
・心理学入門実習Ⅲ
・専門職心理演習Ⅰ（心理演習）
・専門職心理演習Ⅱ（心理演習）
・心理学基礎ゼミナール（心理学基礎演習Ⅰ）
・心理学入門ゼミナール（心理学入門演習Ⅰ）
・心理学専門演習Ⅰ
・心理学専門演習Ⅱ
・教育・学校心理学Ⅱ（教育）（教育心理学（教育・学校心理学））
・教育実習事前・事後指導（資格）
・教育心理学（資格）
[大学院]
・教育分野に関する理論と支援の展開
・心理実践実習 A
・心理実践実習 B
・心理学演習Ⅲ
・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動
なし

3. 学外での教育活動
なし

【研究活動】

1. 著書
・道城 裕貴（分担執筆）「教育心理」（項目執筆）古川 治・姫野 完治・西森 章子（編著）　教育用語ハンドブック（2023）一莖書房

2. 論文
なし

3. 学会・研究会発表
なし

4. その他
・「神戸学院大学心理学研究」　論文査読

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
・神戸市校区調整審議会委員
・神戸市教育委員会　巡回相談員
・明石市教育委員会　巡回指導員
・神戸市すこやか保育支援事業巡回指導アドバイザー

2. 講演など
なし

3. セミナー・研修会等の講師など
・明石市令和 5 年度特別支援教育研修会「特性に合わせた支援について
～クラスで活かすために～」（明石の会主催　8 月 22 日　明石養護学校にて）
・神戸市小学校教育実践研修特別支援教育グループ研修「他害のある児童への支援のあり方」（神戸市小学校教育実践研修特別支援教育グループ　2 月 20 日予定　灘さくら支援学校にて）

4. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

5. その他
なし

【大学運営】

1. 学内委員
・学生委員
・教職教育センター委員
・教職課程小委員

2. 学部内委員
・卒論委員
・教育・研究委員
・学部内自己点検評価委員
・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員

3. その他
なし

長谷川 千洋（はせがわ ちひろ）

【教育活動】

1. 担当科目
［学部］
・心理学概論
・神経心理学（神経・生理心理学）
・心理学実験Ⅰ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅰ（心理学実験））
・心理学実験Ⅱ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅱ（心理学実験））
・心理学専門演習Ⅰ
・心理学専門演習Ⅱ
・専門職心理演習Ⅰ（心理演習）
・専門職心理演習Ⅱ（心理演習）
・多職種連携実践 D
［大学院］
・心理実践実習 A
・心理実践実習 B
・心理実践実習 C
・心理実践実習 D
・心理学演習Ⅰ
・心理学演習Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動
・大学院進学希望者のための英語論文講読会

3. 学外での教育活動
なし

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
・長谷川 千洋，斎藤 朋子，三和 千徳，博野 信次（2023）．幻視と Feeling of Presence が異なる経過を示した Parkinson's Disease Psychosis の 1 症例 神経心理学，*39*，165-174.
・福井 優哉・水野 悠斗・長谷川 千洋（2023）．大学生における新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響による強迫傾向の変化　神戸学院大学心理臨床カウンセリングセンター紀要，*17*，29-37.

3. 学会・研究会発表
・齋藤 朋子・山寺 みさき・長谷川 千洋・博野 信次（2023）．病理学的にアルツハイマー型認知症と LATE（辺縁系優位型加齢性 TDP-43 脳症）を合併した症例の神経心理学的検討　日本神経心理学会第 47 回大会（9 月 8 日　高知県民文化ホールにて）

・水野 悠斗・福井 優哉・長谷 和久・長谷川 千洋（2023）．集団意思決定状況におけるリーダーの役割がコントロール感及び後悔に与える影響　日本心理学会第 87 回大会（9 月 17 日　神戸国際展示場にて）

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
・日本神経心理学会　評議員
・日本高次脳機能障害学会　代議員
・臨床神経心理士資格認定・カリキュラム委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
なし

【大学運営】

1. 学内委員
・内部質保証推進委員
・評議員
・大学院委員
・研究助成金審査委員
・賞罰委員
・国際交流支援委員

2. 学部内委員
・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
・心理臨床カウンセリングセンター運営委員
・研究科実習運営委員

3. その他
なし

博野 信次（ひろの のぶつぐ）

【教育活動】

1. 担当科目
［学部］
・人体の構造と機能（人体の構造と機能及び疾病）
・神経・生理心理学Ⅰ（生理）（生理心理学（神経・生理心理学））
・行動神経学
・高齢者心理学
・心理学実験Ⅰ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅰ）
・心理学実験Ⅱ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅱ）
・専門職心理実習Ⅰ（心理実習）
・専門職心理実習Ⅱ（心理実習）
・専門職心理演習Ⅲ（心理演習）
［大学院］
・心理実践実習Ⅲ
・心理実践実習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動
なし

3. 学外での教育活動
なし

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
・長谷川 千洋・斎藤 朋子・三和 千徳・博野 信次（2023）．幻視と Feeling of Presence が異なる経過を示した Parkinson's Disease Psychosis の 1 症例 神経心理学，*39*，165-174.

3. 学会・研究会発表
・齋藤 朋子・山寺 みさき・長谷川 千洋・博野 信次（2023）. 病理学的にアルツハイマー型認知症と LATE（辺縁系優位型加齢性 TDP-43 脳症）を合併した症例の神経心理学的検討　日本神経心理学会学術集会　第 47 回大会（9 月 8 日　高知県立県民文化ホールにて）

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
なし

【大学運営】

1. 学内委員
なし

2. 学部内委員
・心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員会委員長

3. その他
なし

広沢 俊宗（ひろさわ としむね）

【教育活動】

1. 担当科目
[学部]
・社会・集団・家族心理学Ⅰ（社会・集団）（社会心理学（社会・集団・家族心理学））
・消費者心理学
・心理学統計法Ⅱ（心理統計法（心理学統計法））
・心理学実験Ⅱ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅱ（心理学実験））
・心理学専門実習Ⅰ
・心理学専門実習Ⅱ
・心理学入門実習C（心理学入門実習Ⅳ）
・社会の中の心理学Ⅲ
・社会の中の心理学Ⅳ（心理学基礎演習Ⅱ）
・心理学専門演習Ⅰ
・心理学専門演習Ⅱ
・こころの科学

2. 大学内でのその他の教育活動
なし

3. 学外での教育活動
・関西国際大学経営学部　非常勤講師（「ビジネス統計学」「産業心理学」他）

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
・越山 泰子・伊藤 創・飯島 有美子・広沢 俊宗（2024）．活動型短期海外派遣プログラムにおける「外国語学習観」「学習行動」の変化―「外国語学習トリガー」の観点から―　関西国際大学研究紀要，*25*，49-64.

3. 学会・研究会発表
なし

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

・関西国際大学より「名誉教授」の称号を授与

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
・「ダメ虎好き」はもはや過去？　心理学からひも解く阪神ファン気質　「アレ」でいよいよ新時代か（『神戸新聞 NEXT』2023 年 9 月 12 日）
・穏やかだった少年が闘将に　アレ導いた自慢の「おっかん」　同級生が明かす岡田監督の変化と面影（『神戸新聞 NEXT』2023 年 9 月 15 日）

4. その他
・『神戸学院大学心理学研究』　論文査読

【大学運営】

1. 学内委員
なし

2. 学部内委員
なし

3. その他
なし

石﨑 淳一（いしざき じゅんいち）

【教育活動】

1. 担当科目
[学部]
・公認心理師の職責（心理専門職入門（公認心理師の職責）
・心理学入門実習 A（心理学入門実習Ⅰ）
・専門職心理実習Ⅰ（心理実習）
・専門職心理実習Ⅱ
・心理学発展演習Ⅰ
・心理学発展演習Ⅱ
・卒業論文
[大学院]
・家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践
・心理実践実習Ⅰ
・心理実践実習Ⅱ
・心理実践実習 A
・心理実践実習 B
・心理実践実習 C
・心理学演習Ⅲ
・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動
・神戸学院大学美術部鷗風會・顧問
・人間文化学研究科心理学専攻臨床心理学系修了生（公認心理師等）のスーパービジョン

3. 学外での教育活動
なし

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
なし

3. 学会・研究会発表
なし

4. その他

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
・「コミュニケーション演習」（神戸市シルバーカレッジ　健康福祉 / ライフ　講師　9 月 11 日　シルバーカレッジにて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
・明石市教育委員会（2022 年度）明石市特別支援教育巡回指導員
・『神戸学院大学心理学研究』の査読者
・山上 榮子、赤堀 富子、陶山 和美らとアートセラピー等に関する研究会を実施した。

【大学運営】

1. 学内委員
・学部自己点検評価委員
・研究科自己点検評価委員
・入学センター委員
・法人設置学校連絡調整会議委員
・就職委員
・研究支援委員
・キャリア教育センター委員

2. 学部内委員
・教育・研究委員
・研究倫理審査委員
・心理臨床カウンセリングセンター運営委員
・学部・研究科実習運営委員
・大学院実習マニュアル委員
・国家試験対策委員

3. その他
なし

河瀬 諭（かわせ さとし）

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

・行動科学概論
・心理学特論Ⅱ
・心理学専門実習Ⅰ
・心理学専門実習Ⅱ
・心理学実験Ⅰ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅰ（心理学実験））
・心理学入門ゼミナール（心理学入門演習Ⅰ）
・心理学専門演習Ⅰ
・心理学専門演習Ⅱ

[大学院]

なし

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

・相愛大学音楽学部　非常勤講師（「音楽心理学」）

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

・Kawase, S. (2023). Is happier music groovier? The influence of emotional characteristics of musical chord progressions on groove. *Psychological Research*. https://doi.org/10.1007/s00426-023-01869-x
・Kawase, S., & Kitabayashi, Y. (2023). Perspectives of Teachers at Music Schools Toward Children's Extra-Musical Abilities promoted by Music Lessons. *Frontiers in Psychology, 14*, 1190731. https://doi.org/10.3389/fpsyg.2023.1190731
・Etani, T., Miura, A., Kawase, S., Fujii, S., Keller, P.E., Vuust, P., & Kudo, K. (2024). A review of psychological and neuroscientific research on musical groove. *Neuroscience & Biobehavioral Reviews*. https://doi.org/10.1016/j.neubiorev.2023.105522
・Fukuie, T., Suwabe, K., Kawase, S., Shimizu, T., Ochi, G., Kuwamizu, R., Sakairi Y., & Soya, H. (2023). Groove rhythm enhances exercise impact on prefrontal cortex function in groove enjoyers. *Neuroscience, 531*, 117-129. https://doi.org/10.1016/j.neuroscience.2023.08.039
・惠谷 隆英・三浦 哲都・河瀬 諭・工藤 和俊・藤井 進也(2023). マイクロタイミングに着目したグルーヴ研究の展望　心理学評論, *66*, 37–49.
・河瀬 諭（2024）. 合奏の同期―身体・グルーヴ・社会的絆― 日本音響学会誌

3. 学会・研究会発表

・Kawase, S., Kashio I., Morizumi, K., & Matsumoto, S. (2023). Individual Differences in Tempo of Groovy Music. ICMPC17-APSCOM7（8 月 26 日　日本大学にて（オンライン））
・Kawase, S., Ogawa, J., Umata, I., & Komeda, H. (2023). Effects of Early Childhood Group Music Lessons on Children's Non-Cognitive Skills. ICMPC17-APSCOM7（8 月 26 日　日本大学にて（オンライン））
・Kawase, S., & Shoda, H. (2023). Effects of supplementary information about the human versus artificial performer on the listener's psychological responses to music performance. ICMPC17-APSCOM7（8 月 26 日　日本大学にて（オンライン））
・Hirota, Y., Suwabe, K., Otsuki, T., & Kawase, S. (2023). High-groove music boosts self-selected jogging speed and positive mood in university students. The 28th Annual Congress of the European College of Sport Science.（7 月 5 日　Palais des Congrès にて）
・河瀬 諭（2023）. 音楽聴取前の感情状態によるグルーヴの変化 .　日本心理学会第 87 回大会（9 月 15 日　神戸国際会議場にて）
・小島 理永・河瀬 諭・伊藤 京子（2023）. 現代的なリズムのダンスにおけるリズム表現の再考 日本体育科教育学会第 28 回大会（7 月 9 日　順天堂大学にて）
・河瀬 諭（2024）. 合奏の同期―身体・グルーヴ・社会的絆― 日本音響学会第 151 回（2024 年春季）研究発表会（3 月 8 日　拓殖大学にて）

4. その他

・河瀬 諭（2023）. 編集後記　音楽知覚認知研究, *29*, 60.

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

・科学研究費補助金 基盤研究（B）「音楽に同期した身体運動よる社会的な絆の形成プロセスの解明」（研究代表者：河瀬 諭, 2023 ～ 2025 年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

・日本音楽知覚認知学会　編集委員
・電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎研究会　専門委員
・Frontiers in Psychology　査読
・Poetics　査読

・Psychology of Music　査読
・The 18th International Conference on Knowledge, Information and Creativity Support Systems. Program committee

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
・すいエンス！吹奏楽を科学する「一体感、起源は毛づくろい？考え共有・役割理解、上達のこつ」（『朝日新聞』（夕刊（全国版））　10 月 10 日）
・すいエンス！吹奏楽を科学する「吹奏楽は、霊長類の社会の縮図？　研究者が行き着いたグルーヴの深み」（『朝日新聞デジタル』　8 月 25 日）
・「音楽と運動の融合は人と人との絆をつくる」（『音遊人』（2023 年夏号 特集～オトと舞う～　ヤマハミュージックジャパン）　6 月）

4. その他
・NHK 総合「あさイチ」
・東海テレビ「アスリートの魔曲 ～あの勝利にはあの音楽があった～」
・フジテレビ「アゲジェネ！」
・『神戸学院大学心理学研究』論文査読

【大学運営】

1. 学内委員
なし

2. 学部内委員
なし

3. その他
・ゼミ紹介　神戸学院大学大学案内
・研究活動「科学研究費助成事業」　神戸学院大学総合案内

小久保 香江（こくぼ かえ）

【教育活動】

1. 担当科目
[学部]
・心理検査法Ⅰ（心理的アセスメント）
・多職種連携実践 A
・専門職心理実習Ⅱ（心理実習）
・心理学入門実習Ⅴ
・心理学専門演習Ⅰ
・心理学専門演習Ⅱ
・心理学専門演習Ⅱ（専攻演習Ⅲ）
・専門職心理演習Ⅲ（心理演習）
[大学院]
・心理的アセスメントに関する理論と実践
・心理実践実習 C
・心理学演習Ⅲ
・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動
なし

3. 学外での教育活動
・森之宮病院　診療部　公認心理師

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
なし

3. 学会・研究会発表
なし

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
なし

【大学運営】

1. 学内委員
・心理学研究科長
・総合企画会議委員

・大学院委員会委員
・危機管理委員
・全学研究推進委員
・全学教育推進機構会議委員

2. 学部内委員
・教育・研究委員
・学部内自己点検評価委員
・心理臨床カウンセリングセンター運営委員
・実習運営委員

3. その他
なし

小山 正（こやま ただし）

【教育活動】

1. 担当科目
[学部]
・言語心理学（学習・言語心理学）
・特別支援教育概論（発達障害学）
・心理学特論Ⅰ
・心理学入門ゼミナール（心理学入門演習Ⅰ）
・心理学基礎ゼミナール（心理学基礎演習Ⅰ）
・心理学専門演習Ⅰ
・心理学専門演習Ⅱ
[大学院]
・福祉分野に関する理論と支援の展開
・心理学演習Ⅰ
・心理学演習Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動
なし

3. 学外での教育活動
・甲南女子大学大学院人文科学総合研究科心理教育学専攻　非常勤講師（「言語発達心理学特論」）
・京都医健専門学校　言語聴覚士学科　非常勤講師（言語発達障害Ⅳ）

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
・小山 正（2023）. 定型発達の子どもの初期の時間，位置，場所を表示する語の広がりと動作語の獲得――家庭での認知・遊びの発達との関連――　音声言語医学，*64*，237-243.

3. 学会・研究会発表
・小山 正（2023）．知的発達症をもつ子どもの指さし行動の出現と対物行動との発達的関連性第 68 回日本音声言語医学会総会・学術講演会　一般演題 108（10 月 6 日　倉敷市民会館にて）

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
・日本臨床発達心理士会　『臨床発達心理実践研究誌』編集委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
・京都国際社会福祉センター治療教育講座 :「知的発達症をもつ子どもの早期療育」講師
・新版 K 式発達検査中級講習会講師

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
なし

【大学運営】

1. 学内委員
・学部長
・評議員
・自己点検評価委員
・大学院委員会委員

2. 学部内委員
・広報活動委員
・教育・研究委員

3. その他
なし

松島 由美子（まつしま ゆみこ）

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

・健康科学入門
・社会の中の心理学Ⅰ
・社会の中の心理学Ⅲ
・心理学基礎ゼミナール（心理学基礎演習Ⅰ）
・心理学専門演習Ⅰ
・卒業論文【前卒対応】
・心理学発展演習Ⅱ【前卒対応】

[大学院]

なし

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動

なし

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

・松島 由美子・村井 佳比子・土井 晶子（印刷中）. 中小企業勤務者のメンタルヘルスに対する新型コロナウイルス感染症の影響　産業ストレス研究, *31*

3. 学会・研究会発表

・土井 晶子・村井 佳比子・中川 裕美・松島 由美子・秋山 学（2023）. 中小企業で有効なメンタルヘルス支援プログラムの開発 日本産業精神保健学会第 30 回大会（8 月 26 日 日本赤十字看護大学にて）

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

・科学研究費補助金 基盤研究（C）「中小企業で有効なメンタルヘルス支援プログラムの開発」（研究代表者：松島 由美子，2021 年～ 2023 年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

・日本産業ストレス学会　評議員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

・模擬授業「発達心理学 入門編」（2023 年 5 月 23 日 兵庫県立三田西陵高等学校）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

なし

道重 さおり（みちしげ さおり）

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

・心理調査概論
・心理学概論（資格）
・現代社会と心理学
・健康心理学（健康・医療心理学）
・司法犯罪心理学（司法・犯罪心理学）
・心理学入門実習 D（心理学入門実習Ⅵ）
・心理学実験Ⅰ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅰ（心理学実験））
・心理学実験Ⅱ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅱ（心理学実験））
・心理学入門ゼミナール（心理学入門演習Ⅰ）
・心理学基礎ゼミナール（心理学基礎演習Ⅰ）
・心理学専門演習Ⅰ
・心理学専門演習Ⅱ

[大学院]

・司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開

2. 大学内でのその他の教育活動

・第 1 回社会と矯正・更生をつなぐ心理学研究会開催
（教員および大学院生とともに松山刑務所見学と刑務所内で実施されている改善指導に関する講話を聴講）

3. 学外での教育活動
・松山刑務所改善指導（詐欺・ギャンブル問題）アドバイザー

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
・岡村 心平・道重 さおり（2024）．反転理論によるクラウニング講座の教育的意義と臨床的可能性の検討――矯正教育における身体性をめぐって――神戸学院大学心理学研究，*6*(1)，57-66.

3. 学会・研究会発表
・清水 翼・野口 剛・道重 さおり（2023）．刑事施設における特殊詐欺事犯を対象とした改善指導の実践――罪障感及び出所後の就労意識に焦点を当てた検討――　日本犯罪心理学会第 61 回大会（9 月 23 日オンライン開催）
・道重 さおり・大宮 宗一郎・山田 理絵・森田 展彰（2023）．更生保護施設を利用する薬物事犯者への地域支援に関する一考察――地域の支援機関から見た課題と工夫点――　2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会（10 月 13 日　岡山コンベンションセンターにて）

4. その他
・厚生労働省依存に関する調査研究事業（令和 5 年度）における分担研究「更生保護施設における薬物依存症者支援の課題と地域連携体制のあり方に関する研究」令和 5 度薬物依存者の回復支援における地域連携に関する意見交換会の実施（筑波大学医学医療系　森田 展彰主催　第 1 回 7 月 21 日，第 2 回 9 月 29 日，第 3 回 11 月 24 日 オンライン開催）
・UTCP Series Second View #02 だますことの背景 ～受け子・掛け子の実際を手がかりに～　話題提供（東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター（UTCP）上廣共生哲学講座主催　10 月 29 日　東京大学駒場 I キャンパス 21KOMCEE West K303 にて開催）
・初学者・若手心理職向け研修会「公認心理師の活動の実際と必要な知識と技能」――医療・教育・福祉・司法犯罪の領域から――　話題提供（兵庫県公認心理師主催　2024 年 1 月 7 日　オンライン開催）

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
・模擬授業「犯罪心理学の視点から依存の問題を考える」（7 月 18 日，兵庫県立生野高等学校大学見学会，有瀬キャンパスにて）
・模擬授業「ストレスと上手に付き合おう」（2024 年 3 月 4 日，兵庫県立明石清水高等学校にて）
・模擬授業「実践！司法犯罪心理学～犯罪の背景にアプローチする～」（2024 年 3 月 4 日，兵庫県立明石清水高等学校にて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
・『神戸学院大学心理学研究』論文査読

【大学運営】

1. 学内委員
なし

2. 学部内委員
なし

3. その他
・夢ナビ講義 Video 講師

三和 千徳（みわ ちとく）

【教育活動】

1. 担当科目
[学部]
・精神疾患とその治療
・心理学的支援法 I
・専門職心理実習 I（心理実習）
・専門職心理実習 II（心理実習）
[大学院]
・保健医療分野に関する理論と支援の展開
・心理実践実習 III
・心理実践実習 IV
・心理実践実習 D

2. 大学内でのその他の教育活動
・心理学研究科大学院生のスーパーバイザー

3. 学外での教育活動
なし

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
・長谷川 千洋・斎藤 朋子・三和 千徳・博野 信次（2023）．幻視と Feeling of Presence が異なる経過を示した Parkinson's Disease Psychosis の 1 例　神経心理学，*39*，165-174.

3. 学会・研究会発表
なし

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
なし

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
・「こころの病を知る―精神医学入門―」（神戸学院大学高大連携授業　2022 年 6 月 7 日　兵庫県立明石南高等学校にて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
・みわ心療クリニック　院長
・神戸精神分析研究所　監事
・NPO 法人コミュニティーカウンセリング協会　理事

【大学運営】

1. 学内委員
なし

2. 学部内委員
・心理臨床カウンセリングセンター運営委員

3. その他
なし

毛 新華（もう しんか）

【教育活動】

1. 担当科目
［学部］
・対人心理学
・心理学統計法Ⅰ（心理統計入門（心理学統計法））
・心理学専門実習Ⅰ
・心理学専門実習Ⅱ
・心理学入門ゼミナール（心理学入門演習Ⅰ）
・心理学発展演習Ⅰ
・心理学発展演習Ⅱ
・卒業論文
・卒業論文（前卒対応）
・社会の中の心理学Ⅰ
・社会の中の心理学Ⅱ（心理学入門演習Ⅱ）
・社会の中の心理学Ⅲ
・社会の中の心理学Ⅳ（心理学基礎演習Ⅱ）
［大学院］
・心理学演習Ⅲ
・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動
・高大連携部派遣
　兵庫県立伊川谷高等学校 R5 年度異文化交流授業講師（6 月 8 日）

3. 学外での教育活動
・大阪公立大学生活科学部　非常勤講師（「心理学統計法」）

【研究活動】

1. 著書
・毛 新華（2023）．第 6 章多文化共生のコミュニケーション　大坊 郁夫（編）コミュニケーション・デザインのこころ戦略――対人コミュニケーションの最適化――　（pp.79-94）ナカニシヤ出版

2. 論文
・成瀬 さくら・毛 新華・中村 珍晴（2023）．女性の指の形がその持ち主の対人印象に及ぼす影響――指の細さと長さの観点から――　神戸学院大学心理学研究，*6*，11–20.

3. 学会・研究会発表

・毛 新華（2023）．日本心理学会大会企画シンポジウム（IS-010 一般公開）：Where former international graduate students are currently working and how they decided to remain in Japan or go back to their home country. 企画代表者：日本心理学会国際委員会　企画者：毛 新華・佐藤 徹男・家島 明彦・山本 真也　司会：毛 新華　話題提供者：王 瑋・春原 桃佳・林 萍萍・ウィルソン ダンカン　指定討論者：佐藤 徹男・家島 明彦・山本 真也　日本心理学会第 87 回大会　（9 月 15 ～ 17 日 神戸国際会議場にて　対面・オンライン）

4. その他

なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

・科学研究費補助金 基盤研究（C）「中国の在留邦人の文化適応支援に関する心理学的研究（研究代表者：毛 新華，2021 ～ 2024 年度）
・科学研究費補助金 基盤研究（C）「日本人と中国人の異文化コミュニケーションに関する実験社会心理学的研究」（研究代表者：木村 昌紀，2016 ～ 2023 年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

・日本心理学会　国際委員
・関西心理学会　常任委員
・「日中韓三カ国国際会議」2023 年中国シンポジウム日本側担当
・阪南大学留学生 OB・OG 会会長

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

・「基于中国文化要素的社会技能训练方案及其效果（日本語訳：中国文化の要素に基づいた社会スキル・トレーニング・プログラムとその効果）」（中国・錦州医科大学主催　2023 年儿童青少年积极心理健康教育国际学术研讨会（日本語訳：2023 年子どもと青少年のためのポジティブ・メンタルヘルス教育に関する国際シンポジウム）　11 月 18 日　オンライン登壇）
・「経験の共有が協力行動に及ぼす影響」（通訳）（神戸学院大学 2023 年度第 2 回心理学部学術講演会　11 月 1 日　神戸学院大学 14 号館にて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

なし

【大学運営】

1. 学内委員

・教務委員（学部担当・研究科担当）
・共通教育等運営委員
・学部 FD 部会委員
・カリキュラム・アセスメント・チェックリスト委員

2. 学部内委員

・学部内自己点検評価委員
・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
・教育・研究委員

3. その他

・心理学部と学術提携関係にある中国・遼寧師範大学心理学院を訪問し，胡金生院長の大学院ゼミを見学するとともに両学部のポストコロナ時代の交流について話し合った（2023 年 8 月）。

村井 佳比子（むらい けいこ）

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]
・健康科学入門
・専門職心理実習Ⅰ（心理実習）
・専門職心理実習Ⅱ（心理実習）
・専門職心理演習Ⅰ（心理演習）
・専門職心理演習Ⅱ（心理演習）
・心理学入門ゼミナール（心理学入門演習Ⅰ）
・心理学基礎ゼミナール（心理学基礎演習Ⅰ）
・心理学発展演習Ⅰ（専攻演習Ⅳ）
・心理学発展演習Ⅱ
・心理学発展演習Ⅱ（前卒対応）
・卒業論文（卒業論文）
[大学院]
・心理実践実習Ⅲ
・心理実践実習Ⅳ
・心理学演習Ⅰ
・心理学演習Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動

なし

3. 学外での教育活動
なし

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
・村井 佳比子（2023）．自己ルール影響下における言語刺激の提示が反応変動性におよぼす効果：マインドフルネスを手掛かりにした個人差の検討 神戸学院大学心理学研究，*6*，1-9.
・松島 由美子・村井 佳比子・土井 晶子（印刷中）．中小企業勤務者のメンタルヘルスに対する新型コロナウイルス感染症の影響　産業ストレス研究，*31*.
・岡本 光里・村井 佳比子（2024）．小学校における発達障害児の支援に関する研究のレビュー――2006 ～ 2023――　神戸学院大学心理学研究，*6*，印刷中.

3. 学会・研究会発表
・土井 晶子・村井 佳比子・中川 裕美・松島 由美子・秋山 学（2023）．中小企業で有効なメンタルヘルス支援プログラムの開発 産業精神保健学会第 30 回大会（8 月 26 日　日本赤十字看護大学にて）
・中村 敏・清水 寛之・村井 佳比子（2023）．自由遊び場面での幼児の行動軌跡の分析　日本心理学会第 87 回大会（9 月 16 日，神戸国際会議場にて）
・武藤 崇・鈴木 華子・佐々木 銀河・村井 佳比子・下山 真衣（2023）．多様性を尊重する行動とは何か 日本行動分析学会第 41 回大会　公募シンポジウム（9 月 3 日　立命館大学にて）
・杉本 任士・榊原 岳・河村 優詞・上運天 美都子・中村 敏・福田 実奈・村井 佳比子（2023）．学校現場で行動分析家は仮説的構成概念をいかに翻訳するべきか 日本行動分析学会第 41 回大会　自主シンポジウム（9 月 1 日　立命館大学にて）

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

・科学研究費補助金 若手研究「セラピストの面接技術がクライエントの行動変化をもたらすメカニズムの実験的検討」（研究代表者：村井 佳比子，2020 年度～ 2023 年度）
・科学研究費補助金 基盤（C）「中小企業で有効なメンタルヘルス支援プログラムの開発」（研究代表者：松島 由美子，2021 年度～ 2023 年度）
・心理学部社会貢献・地域連携プロジェクト助成金「神戸学院大学『子育てサロン まなびー』の社会的・教育的意義に関する心理学的研究」（研究代表者：村井 佳比子，2023 年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
・日本行動分析学会 理事（事務局長）
・日本動機づけ面接学会 理事

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
・大阪市心の健康センター精神保健福祉相談員業務検討会「動機づけ面接について」講師（2023 年 10 月 31 日 大阪市こころの健康センターにて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
なし

【大学運営】

1. 学内委員
・研究科自己点検評価委員
・教務委員

2. 学部内委員
・教育・研究委員会委員
・研究倫理審査委員
・心理臨床カウンセリングセンター運営委員
・学部・研究科実習運営委員

3. その他
なし

中川 裕美（なかがわ ひろみ）

【教育活動】

1. 担当科目
[学部]
・産業・組織心理学
・専門職心理演習Ⅰ（心理演習）
・心理学発展演習Ⅰ
[大学院]
・産業・労働分野に関する理論と支援の展開
・心理実践実習Ⅲ
・心理学演習Ⅰ

・心理学演習Ⅲ

2. 大学内でのその他の教育活動
なし

3. 学外での教育活動
なし

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
・中川 裕美（2023）．うつ病による休職経験がある労働者のプレゼンティーイズムと関連要因の検討 神戸学院大学心理学研究，*6*，21-28.
・松田 涼・中川 裕美（2023）．コロナ禍におけるワーク・ファミリー・バランスの決定要因の検討　神戸学院大学心理学研究，*6*，49-56.

3. 学会・研究会発表
・土井 晶子・村井 佳比子・中川 裕美・松島 由美子・秋山 学（2023）．中小企業で有効なメンタルヘルス支援プログラムの開発　日本産業精神保健学会第 30 回大会（8 月 26 日・27 日　日本赤十字看護大学にて）

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

・科学研究費補助金　若手研究　うつ病休職者に対するワーク・ライフ・バランス支援プログラムの開発（研究代表者：中川 裕美　2019~2023 年度）
・科学研究費補助金　基盤研究（C）中小企業で有効なメンタルヘルス支援プログラムの開発（研究代表者：松島 由美子　2021~2023 年度）
・科学研究費補助金　基盤研究（C）小規模法人の健康経営における阻害要因の解明および支援プログラムの開発（研究代表者：中川 裕美　2023~2025 年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
・『産業・組織心理学研究』論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
・パナソニック株式会社　エレクトリックワークス社　カウンセリングルーム　公認心理師／臨床心理士

【大学運営】

1. 学内委員
なし

2. 学部内委員
・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
・心理臨床カウンセリングセンター運営委員

3. その他
なし

難波 愛（なんば あい）

【教育活動】

1. 担当科目
[学部]
・心理検査法Ⅱ（心理的アセスメント）
・教育・学校心理学Ⅰ（学校心理学）（学校心理学（教育・学校心理学））
・心理学基礎ゼミナール（心理学基礎演習Ⅰ）
・心理学入門実習 C（心理学入門実習Ⅳ）
・心理学専門演習Ⅰ
・心理学専門演習Ⅱ
・心理学発展演習Ⅰ
・心理学発展演習Ⅱ
・卒業論文
・専門職心理演習Ⅰ（心理演習）
・専門職心理演習Ⅱ（心理演習）
・多職種連携実践 B
[大学院]
・心理実践実習Ⅰ
・心理実践実習Ⅱ
・心理実践実習 A
・心理実践実習 B
・心理学演習Ⅲ
・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動
・臨床心理学系大学院生のスーパーヴィジョン

3. 学外での教育活動

・本学修了生 9 人との子ども心理臨床に関する継続勉強会（オンライン 2 時間 × 7 回：5 月 13 日，6 月 10 日，7 月 8 日，9 月 9 日，10 月 14 日，11 月 11 日，2024 年 01 月 13 日，2024 年 02 月 10 日，対面 5 時間 1 回：8 月 6 日）
・臨床心理士／公認心理師のスーパーヴィジョン

【研究活動】

1. 著書

なし

2. 論文

・難波 愛（2024）．コミュニティカフェの心理支援に関する一考察――居ること、聞くこと、見立てること――　神戸学院大学心理臨床カウンセリングセンター紀要（印刷中）
・關川 ひより・難波 愛・竹田 剛（2024）．支援者側から見た通級指導教室の役割と今後の課題について 神戸学院大学心理学研究，*6*，印刷中.

3. 学会・研究会発表

・難波 愛・河村 有紀・観音堂 千仁・髙谷 尚也・林 昌範・三木 詩織・前田 志壽代（2023）．子ども支援の現場で心理職はどのように専門性を発揮するのか――医療，教育，福祉，各領域の実践から――　日本心理臨床学会第 42 回大会自主シンポジウム（10 月 1 日　オンライン）
・難波 愛（2023）．不登校中学生女子との学校での面接過程――母子密着と破壊的なイメージを巡って――　日本遊戯療法学会第 28 回大会（10 月 22 日　大阪公立大学にて）

4. その他

・AJAJ（日本ユング派分析家協会）主催 春学期ワークショップ 209 講師　江崎 隆志「小児の心理療法の実際」における事例提供「SC で出会った小 2 男子の学校での遊戯療法のケース」（9 月 24 日 連合会館にて）
・AJAJ（日本ユング派分析家協会）グループスーパーヴィジョンでのケース発表（2024 年 1 月 6 日）

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

なし

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

・日本遊戯療法学会　編集委員
・『遊戯療法学研究』論文査読
・『心理臨床学研究』論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

・「体験から学ぶ遊戯療法の基礎――プレイルームでの立ち居振る舞いと応答――」講師（岡山県総合教育センター主催　5 月 30 日　岡山県総合教育センターにて）
・「いきいき職場サポーター研修」ファシリテータ（明石市総務局職員室主催　8 月 24 日・25 日 明石市市役所にて）・「さわやかな自己表現を目指して――アサーションを学ぼう――」講師（神戸学院大学附属高等学校・高大連携授業　9 月 25 日　ポートアイランドキャンパスにて）
・「2 年次総合的な探究の時間『中間発表会』」コメンテータ（加古川南高等学校主催　10 月 10 日 加古川南高校にて）
・「さわやかな自己表現を目指して――アサーションを学ぼう――」講師（神戸市立須磨翔風高等学校大学見学会　11 月 8 日　有瀬キャンパスにて）
・「グループ相談のファシリテートを学ぶ」講師（あかし男女共同参画センター主催　12 月 27 日　アスピア明石にて）
・「絵本を作ってみよう！"何に見えるかな ... ？"で始まる親子の物語づくり」講師（神戸学院大学 / こども本の森 神戸 共催　2 月 12 日　こども本の森 神戸にて）
・「発達障がいグレーゾーンの就学前支援（仮）」講師（明石市こども局子育て支援室こども健康課主催　2 月 27 日　パピオス明石にて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

・「生きるのヘタ会？わたし当事者です 子ども生きヘタ特集」専門家のアドバイス（『神戸新聞』8 月 7 日朝刊）

4. その他

・『神戸学院大学心理学研究』論文査読
・（財）こどもサポート財団　コミュニティカフェ嘱託心理士
・明石市支援対象児童見守り強化事業 支援員
・神戸市中学校生徒不登校事案に関するいじめ問題追加調査委員会 委員
・明石市健康管理委員会 委員
・明石みもざ心理相談室 代表

【大学運営】

1. 学内委員

・入試総務委員
・同和問題部会委員
・教職課程小委員会委員
・IPE 運営委員
・図書館運営委員

2. 学部内委員
・教育・研究委員
・研究倫理審査委員
・心理臨床カウンセリングセンター運営委員
・子育てサロン運営
・明石市との連携調整
・公認心理師養成チーム
・広報委員（特別予算関係：重点広報）
・入学前課題担当
・学部・研究科実習運営委員

3. その他
なし

岡村 心平（おかむら しんぺい）

【教育活動】

1. 担当科目
[学部]
・感情・人格心理学Ⅰ（人格）（人格心理学（感情・人格心理学））
・社会・集団・家族心理学Ⅱ（家族）（家族心理学（社会・集団・家族心理学））
・健康科学入門
・現代社会と心理学
・心理学入門ゼミナール（心理学入門演習Ⅰ）
・心理学専門演習Ⅰ
・心理学専門演習Ⅱ
・心理学発展演習Ⅰ
・心理学発展演習Ⅱ
・卒業論文
[大学院]
・心理学研究法Ⅱ
・心理実践実習Ⅰ
・心理実践実習Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動
・臨床心理学系大学院生のスーパーバイザー
・岡村ゼミ学生対象の大学院入試対策勉強会（定期）
・岡村ゼミ学生対象のフォーカシング体験会（2023年8月8日/2024年2月21日　有瀬キャンパスにて）
・岡村ゼミ学生対象の学外研修・体験学習（2023年11月2日 養老公園・養老天命反転地にて）
・岡村ゼミ学生対象の学外研修・体験学習（2024年1月13日 神戸市立王子動物園・有瀬キャンパスにて）

3. 学外での教育活動
・関西大学 教育推進部 非常勤講師（「プロジェクト学習Ⅰ」）
・関西大学 人間健康学部 非常勤講師（「導入演習」）

【研究活動】

1. 著書
・Ikemi,A., Okamura, S. & Tanaka, H. (2023). The experiencing model. In E. R. Severson, & K. C. Krycka (Eds.), *The Psychology and Philosophy of Eugene Gendlin* (pp.44-62). Routledge.

2. 論文
・岡村 心平・道重 さおり（2024）．反転理論によるクラウニング講座の教育的意義と臨床的可能性の検討――矯正教育における身体性をめぐって――神戸学院大学心理学研究，*6*(1)，57-66.

3. 学会・研究会発表
・岡村 心平・古井戸 祐樹・田中 秀男・小室 弘毅（2023）．教育思想としてのジェンドリン哲学：その展開の可能性 日本人間性心理学会第42回大会自主シンポジウム（9月22日～24日　福井AOSSAにて）
・内田 利広・河﨑 俊博・星加 博之・岡村 心平・小松 貴弘（2023）．フォーカシング指向心理療法における体験の取り扱いについて～体験過程における過去・現在・未来～　日本心理臨床学会 第42回大会（10月7日　オンライン開催・リアルタイム配信）

4. その他
・岡村 心平（2023）．日本フォーカシング協会の広報のあり方について考える～海外組織との比較をふまえて～（話題提供）　日本フォーカシング協会年次大会 in 福岡（8月19日　九州大学西新プラザにて）
・岡村 心平（2023）．ボタニカル・クロッシング～植物好きフォーカサーのためのワーク～（ワークショップ提供）　日本フォーカシング協会年次大会 in 福岡（8月20日 九州大学西新プラザにて）

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

・学術研究助成基金助成金　基盤研究（B）「荒川修作＋マドリン・ギンズ映画資料アーカイブ構築による映画制作過程と身体論の研究」（研究代表者：三村 尚彦　2022年度～2024年度）
・関西大学研究拠点形成支援経費「空間と身体感覚の相互作用に基づく空間デザインの研究―荒川修作＋マドリン・ギンズ「手続き型建築」の形態を探る―」（研究代表者：三村 尚彦　2023～2024年度）
・学外共同研究「矯正教育におけるクラウニング講

座の効果とその意義に関する探索的研究」（研究代表者：岡村 心平　2023 年 10 月～ 2024 年 3 月）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など

・日本人間性心理学会常任理事（国際交流委員会委員長，研修委員会委員兼務）
・日本人間性心理学会第 42 会大会（2023 年 9 月 22 ～ 24 日 福井 AOSSA）　準備委員
・日本フォーカシング協会　国際交流グループ　グループリーダー

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など

・「もっと『ぐずぐず』する力～マインドフルネスとフォーカシングからみた“うるうとき”～」（毎日文化センター 対談企画（小室マイケル弘毅・岡村心平）4 月 8 日　毎日文化センター大阪にて）
・「『からだ』の心理学」（毎日文化センター常設講座 4 月 22 日，5 月 27 日，6 月 24 日，7 月 29 日，8 月 26 日，9 月 30 日毎日文化センター大阪にて・全 6 回）
・「『ユーモア』の心理学」（毎日文化センター常設講座 10 月 28 日，11 月 25 日，12 月 23 日，1 月 27 日，2 月 24 日，3 月 23 日毎日文化センター大阪にて・全 6 回）
・「Zen Meets Focusing ワークショップ」（Zen Meets Focusing 主催 5 月 20 日，10 月 8 日　姫路・常福寺にて）
・「臨床身体学ウェブセミナー」（臨床身体学ゼミ主催 6月10日　オンライン開催・リアルタイム配信）
・「個人尊重の人間性心理学～学びあいで進める自己探究」（宇都宮大学公開講座 7 月 1 日，7 月 15 日オンライン開催・リアルタイム配信）
・「ネガティブって、悪くない！『くよくよ・ぐずぐず』する力」（岸和田市立公民館主催 7 月 8 日　岸和田市立公民館にて）
・「ボタニカル・クロッシング体験会」（focusing living labo 主催 10 月 14 日, 11 月 19 日, 12 月 10 日, 1 月 21 日, 2 月 11 日, 3 月 10 日　オンライン開催・リアルタイム配信）
・「臨床身体学ラボ・オープニングイベント」（臨床身体学ゼミ主催　10 月 15 日　ハイブリット開催・鎌倉・ワークスペースにて）
・「心理職のための『体験過程』理論入門～感性へのリテラシーを育むために～」（大阪・京都こころの発達研究所葉主催 2023 年度オンライン研修年間動画パック　11 月 1 日配信　オンデマンド配信）
・「健康づくりサポートプログラム course03【心の健康講座】ストレスとの上手な付き合い方～フォーカシングを用いて、うまく悩むコツを学ぼう～」（社会連携部主催　11 月 12 日 三宮サテライトキャンパスにて）
・「メンタルヘルスとフォーカシング：うまく悩むコツは“実感”にある」（堺市生涯学習課 11 月 18 日関西大学堺キャンパスにて）
・「学び舎ゼミ『逃げられない人間関係』心理学入門・『嫉妬』の心理学」（岸和田市立公民館主催　12 月 2 日，1 月 20 日　岸和田市立公民館にて）
・「フォーカシング・マルシェ in 神戸」（フォーカシング若手の会主催　2 月 7 日　神戸市中央区文化センターにて）
・「障害を有する受刑者に対するクラウニング講座の意義について」（第 1 回　社会と矯正・構成をつなぐ心理学研究会 2 月 29 日　松山市総合コミュニティセンターにて）
・「『身体性とは何だろう？』ボディワーク・瞑想・環世界・フォーカシングの探究者が考える臨床身体学クロッシング vol.2」（臨床身体学ゼミ主催 2024 年 3 月 17 日　ハイブリット開催・鎌倉・ワークスペースにて）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など

なし

4. その他

・『神戸学院大学心理学研究』論文査読
・神戸学院大学　心理臨床カウンセリングセンターカウンセリング担当教育職員
・focusing living labo 主宰・運営

【大学運営】

1. 学内委員

なし

2. 学部内委員

なし

3. その他

なし

定政 由里子（さだまさ ゆりこ）

【教育活動】

1. 担当科目

[学部]

・現代社会と心理学
・臨床心理学概論
・心理学専門実習Ⅰ
・心理学専門実習Ⅱ

・心理学基礎実験実習Ⅱ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅱ）
・社会の中の心理学Ⅲ
・社会の中の心理学Ⅳ（心理学基礎演習Ⅱ）
・講読演習Ⅰ
・講読演習Ⅱ
・心理学専門演習Ⅰ
・心理学発展演習Ⅰ
・心理学発展演習Ⅱ
・卒業論文

［大学院］
なし

2. 大学内でのその他の教育活動
・大学院受験を目指す学部生たちと英語についての勉強会

3. 学外での教育活動
・臨床心理学系大学院生のスーパーバイザー
・神戸市医師会看護専門学校　非常勤講師（「人間と癒し」）

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
なし

3. 学会・研究会発表
・第 13 回コンプリヘンシブ・リハビリテーション懇話会　シンポジウム発表「『居る』を支える関わり」

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

・科学研究費補助金 基盤研究（C）一般「大学生の不適応症状軽減に資する NET の効果検証を踏まえた NET 活用 Exchange Model の構築」（研究代表者：道免 逸子，研究分担者：定政 由里子，令和 5 年～9 年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
・兵庫県公認心理師会　研修委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
・『神戸学院大学心理学研究』査読
・神戸市教育委員会　第三者委員会委員
・医療法人 篤友会 関西リハビリテーション病院　非常勤臨床心理士

【大学運営】

1. 学内委員
なし

2. 学部内委員
なし

3. その他
なし

清水 寛之（しみず ひろゆき）

【教育活動】

1. 担当科目
［学部］
・認知心理学（知覚・認知心理学）
・専門職心理実習Ⅰ（心理実習）
・専門職心理実習Ⅱ（心理実習）
・心理学実験Ⅰ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅰ（心理学実験））
・心理学実験Ⅱ（実習）（心理学基礎実験実習Ⅱ（心理学実験））
・心理学基礎ゼミナール（心理学基礎演習Ⅰ）
・心理学発展演習Ⅰ
・心理学発展演習Ⅱ
・専門職心理演習Ⅲ（心理演習）
・卒業論文

［大学院］
・心理学研究法Ⅱ
・心理実践実習 A
・心理実践実習 B
・心理学演習Ⅰ
・心理学演習Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動
・4 年次生 5 名との心理学勉強会の開催（隔週に 1 度の割合で 90 分程度、主に大学院進学に向けた心理学の学修に関する情報交換と補習を定期的に行っている）

3. 学外での教育活動
なし

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
なし

3. 学会・研究会発表
・清水 寛之（2023）．自由再生における自己の成績と一般的他者の成績に関する予測　日本認知心理学会第 21 回大会（7 月 1 日，東京都立大学にて）
・中田 英利子・向居 暁・富高 智成・清水 寛之（2023）．自己と他者における失敗エピソードの記憶（16）―失敗の生起頻度、統制感，時間的展望からみた失敗の捉え直しに関する検討― 日本教育心理学会第 65 回総会（8 月 10 日～ 9 月 10 日，オンライン開催）
・中田 英利子・向居 暁・富高 智成・清水 寛之（2023）．自己と他者における失敗エピソードの記憶（17）―行為者と社会との関係に基づく失敗の教訓に関する検討― 日本心理学会第 87 回大会（9 月 15 日，神戸国際会議場・神戸国際展示場にて）
・富高 智成・向居 暁・中田 英利子・清水 寛之（2023）．自己と他者における失敗エピソードの記憶（18）―失敗の教訓に関する対応分析を用いた検討― 日本心理学会第 87 回大会（9 月 15 日，神戸国際会議場・神戸国際展示場にて）
・清水 寛之（2023）．記憶課題における成績予測と自己意識の関係：自由再生課題，自意識尺度，および状況的自己気づき尺度を用いた検討　日本心理学会第 87 回大会（9 月 15 日，神戸国際会議場・神戸国際展示場にて）
・長谷 和久・清水 寛之（2023）．アイコンアレイは確率の伝達に有効なのか？
―アイコンアレイがもたらす確率評価の系統的な歪み―　日本心理学会第 87 回大会（9 月 16 日，神戸国際会議場・神戸国際展示場にて）
・中村 敏・清水 寛之・村井 佳比子（2023）．自由遊び場面における乳幼児の移動軌跡の分析　日本心理学会第 87 回大会（9 月 16 日，神戸国際会議場・神戸国際展示場にて）
・長谷 和久・清水 寛之（2023）．条件付き確率の理解を促す視覚的補助の探索的検討　日本リスク学会第 36 回年次大会（11 月 11 日，北海道大学にて）
・清水 寛之・田中 駿・清水 里美・足立 絵美・郷間 英世（2024）．人間の精神発達曲線への多項式のあてはめ：新版 K 式発達検査 2020 の認知・適応領域の標準化資料の分析から　日本発達心理学会第 35 回大会（2024 年 3 月 8 日，大阪国際交流センターにて）（予定）
・田中 駿・清水 寛之・清水 里美・足立 絵美・郷間 英世（2024）．人間の精神発達曲線への多項式のあてはめ：新版 K 式発達検査 2020 の言語・社会領域の標準化資料の分析から　日本発達心理学会第 35 回大会（2024 年 3 月 8 日，大阪国際交流センターにて）（予定）

4. その他
・ファン・デル・スティッヘル，S.（清水 寛之・井上 智義（監訳）藤井 良江（訳））（2023）．知覚と注意の心理学　ニュートンプレス（『注意を操る心理学―気が散ることだらけの現代で自分を保つには―』を改題のうえ新書化）

【受賞・外部資金および助成金の獲得】
・科学研究費補助金 基盤研究（C）「企業博物館の多様なステークホルダーにおける博物館体験の長期記憶に関する研究」（研究代表者：湯浅 万紀子，平成 31 ～令和 5 年度）
・科学研究費補助金 基盤研究（C）「中国の在留邦人の文化適応支援に関する心理学的研究」（研究代表者：毛 新華，令和 3 ～ 6 年度）
・科学研究費補助金 基盤研究（C）「加齢に伴う失敗の認知と時間的展望との関係の変化に関する心理学的研究」（研究代表者：中田 英利子，令和 4 ～ 6 年度）
・科学研究費補助金 基盤研究（C）「子どもの発達の時代的変遷に影響を与える環境・養育要因の解明と子育て施策への提言」（研究代表者：郷間 英世，令和 5 ～ 8 年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
・日本認知心理学会 理事
・関西心理学会 顧問
・『認知心理学研究』論文査読

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
・日本発達心理学会第 35 回大会・会員企画ラウンドテーブル「ビデオ・アナログゲームの教育，発達への利活用を考える」（指定討論者，2024 年 3 月 7 日，大阪国際交流センターにて）（予定）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
なし

【大学運営】

1. 学内委員
・学部自己点検評価委員
・研究科自己点検評価委員
・環境保全委員
・7 条委員会委員

2. 学部内委員
・研究倫理審査委員
・紀要委員（「神戸学院大学心理学研究」編集委員）
・「心理学マニュアル」編集委員

3. その他
なし

竹田 剛（たけだ つよし）

【教育活動】

1. 担当科目
［学部］
・健康・医療心理学Ⅰ（健康）
・専門職心理実習Ⅱ（心理実習）
・他職種連携実践 C
・心理学入門ゼミナール（心理学入門演習Ⅰ）
・専門職心理演習Ⅰ（心理演習）
・専門職心理演習Ⅱ（心理演習）
・社会の中の心理学Ⅲ
・社会の中の心理学Ⅳ（心理学基礎演習Ⅱ）
・心理学発展演習Ⅰ
・心理学発展演習Ⅱ
・卒業論文
［大学院］
・心理実践実習Ⅲ
・心理実践実習Ⅳ
・心理実践実習 D
・心理学演習Ⅰ
・心理学演習Ⅱ

2. 大学内でのその他の教育活動
・４年次生との大学院入試対策勉強会の開催
・質的研究勉強会の開催

3. 学外での教育活動
・社会医療法人弘道会なにわ生野病院心療内科　研究員
・社会医療法人弘道会なにわ生野病院心療内科　登録カウンセラー
・名古屋学芸大学大学院栄養科学研究科　非常勤講師（「臨床心理学特論」「臨床心理学演習」）
・臨床心理学系大学院修了生のスーパーバイザー

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
・Takeda, T. (2023). Qualitative analysis of communication to improve self-esteem in group therapy for patients with bulimia nervosa. *Kobe Gakuin University Journal of Psychology, 6*, 39-48.
・關川 ひより・難波 愛・竹田 剛（2024）．支援者側から見た通級指導教室の役割と今後の課題について 神戸学院大学心理学研究，*6*，印刷中 .
・竹田 剛（2024）．摂食障害予防教育のさらなる発展に向けたシリアスゲーム活用の可能性　神戸学院大学心理学研究，*6*，印刷中.

3. 学会・研究会発表
・三井 知代・藤本 麻起子・竹田 剛・武久 千夏・中村 このゆ（2023）．摂食障害治療「初心者にこれだけは伝えたいこと」 日本心理臨床学会第 42 回大会（10 月 1 日　オンライン）

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

・科学研究費補助金　若手研究「摂食障害予防教育に関するゲーミング教材の開発と評価」（研究代表者：竹田 剛，2020 ～ 2023 年度）
・竹田 剛・おちゃずけ・大下 修央　第 2 回 Board Game Japan カップ　入賞

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
・日本認知療法・認知行動療法学会 『認知療法研究』非常勤編集委員
・日本摂食障害学会　評議員
・日本摂食障害協会　フェロー
・日本心理学会第 88 回大会　実行委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
・「もっと伝わる！心理教育の組み立て方―摂食障害を抱えるクライアントと家族への実施を題材に―」（こころの発達研究所 葉主催　2 月　オンライン）

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
・『認知療法研究』論文査読
・『神戸学院大学心理学研究』論文査読
・『京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要』論文査読
・世界摂食障害アクションデイ 2023　運営スタッフ

【大学運営】

1. 学内委員
・広報委員
・IPE 運営委員
・入試総務委員
・情報支援センター運営委員
・生涯学習委員

2. 学部内委員
・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員
・卒論委員

3. その他
・心理学検定
・学部実習運営委員

山本 恭子（やまもと きょうこ）

【教育活動】

1. 担当科目
[学部]
・感情・人格心理学Ⅱ（感情）（感情心理学（感情・人格心理学））
・心理学入門実習 D（心理学入門実習Ⅵ）
・心理学専門実習Ⅰ
・心理学専門実習Ⅱ
・社会の中の心理学Ⅰ
・社会の中の心理学Ⅱ（心理学入門演習Ⅱ）
・社会の中の心理学Ⅲ
・社会の中の心理学Ⅵ（心理学基礎演習Ⅱ）
・心理学発展演習Ⅰ
・心理学発展演習Ⅱ
・卒業論文
[大学院]
・心理学研究法Ⅰ
・心理学演習Ⅲ
・心理学演習Ⅳ

2. 大学内でのその他の教育活動
なし

3. 学外での教育活動
なし

【研究活動】

1. 著書
なし

2. 論文
・黒川 優美子・山本 恭子・秋山 学（2023）．嘘をつくことに対する認識が不正行為に及ぼす影響　神戸学院大学心理学研究，*6*，29-37.

3. 学会・研究会発表
・山本 恭子・木村 昌紀（2023）．今ここで，他者の感情をいかに制御するのか？――短期的相互作用における対人感情制御方略と非言語行動の検討――　日本心理学会第 87 回大会（9 月 16 日　神戸国際展示場 3 号館にて）
・黒川 優美子・山本 恭子・秋山 学（2023）．不正行為に対する認識が不正表出に及ぼす影響――利己的誤りに着目して―― 日本心理学会第 87 回大会（9 月 17 日　神戸国際展示場 3 号館にて）

4. その他
なし

【受賞・外部資金および助成金の獲得】

・科学研究費補助金 基盤研究（C）「対人感情制御における感情表出の機能的役割の解明」（研究代表者：山本 恭子，2021 ～ 2024 年度）

【学会活動・社会貢献活動】

1. 学会等での委員など
・日本感情心理学会『Emotion Studies』編集委員長
・『心理学研究』論文査読
・関西心理学会　委員
・明石市ホテル等建築審査会　委員

2. 講演・セミナー・研修会等の講師など
なし

3. 新聞・雑誌・インターネット記事の執筆など
なし

4. その他
なし

【大学運営】

1. 学内委員

・学生委員
・ハラスメント防止委員
・大学院奨学金返還免除候補者学内選考委員

2. 学部内委員

・神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理
　審査委員
・『神戸学院大学心理学研究』編集委員長
・教育・研究委員

3. その他

なし

「神戸学院大学心理学研究」投稿規程

2018年4月1日
制定
改正　2018年12月5日
改正　2019年 6 月5日
改正　2023年 9 月6日

第1条（目的）
神戸学院大学心理学部における教育・研究成果の発表を目的として，「神戸学院大学心理学研究」（以下「心理学研究」という）を発行する。

第2条（編集等の機関・原稿の採択）
1.「神戸学院大学心理学研究」の企画，原稿の募集及び編集は，神戸学院大学心理学研究編集委員会（以下「委員会」）が行い，掲載可否の権限および編集責任をもつ。
2. 委員会は，心理学部教授会の議を経て構成され，委員長は互選とする。

第3条（執筆者の資格）
1. 本誌に論文を投稿できる者は以下の通りとする。
（1）心理学部専任教員
（2）心理学部実習助手
（3）心理臨床カウンセリングセンター職員（インテークワーカー・心理カウンセラー）
（4）心理学研究科の学生
（5）心理学部教授会の承認を得た者
2. 共著執筆論文の投稿については，筆頭執筆者が（1）～（5）のいずれかである場合に限る。（1）~（5）以外の者も，第2著者以下であれば，共著者となれる。（5）については，専任教員を共著者に含める。

第4条（原稿の要件）
「神戸学院大学心理学研究」に執筆する原稿の要件は，次の各号のとおりとする。
（1）他誌に未掲載であり，かつ本誌以外に投稿をしていない論文であること。
（2）完成原稿であること。
（3）原稿の種類は次のいずれかに該当するものであること。
①原著論文：原則として，問題提起と実験，調査，事例などに基づく研究成果，理論的考察と明確な結論をそなえた研究。査読有。
②研究報告：すでに公刊された研究成果に対する追加，吟味，新事実の発見，興味ある観察，少数の事例についての研究報告，速報性を重視した研究報告，萌芽的発想に立つ報告。査読無。
③海外研究・国内研究報告
④心理学研究科の修士・博士論文の要約
⑤心理学部優秀卒業論文
⑥教員の活動実績（研究実績，教育実績，社会貢献，競争的研究資金獲得実績，大学運営）
⑦今年の主な行事
⑧その他，紀要の編集上必要と認められるもので，心理学部教授会の承認を得たもの

第5条（審査）
原著論文は，専門家による3人（神戸学院大学心理学部専任教員より1人以上，学外より1人以上）のレフェリーを設け，その査読の結果をもとに，委員会において採否を決定する。

第6条（倫理的配慮）
論文の内容は，研究対象者や被験体の保護を含め，倫理的配慮が必要である。原稿は，神戸学院大学研究倫理綱領および公益社団法人日本心理学会倫理規程に則ること。

第7条（原稿の形式）
原稿は，別に定める「神戸学院大学心理学研究投稿細則」によるものとする。

第8条（発行）
「神戸学院大学心理学研究」は，年２回の発行とし，各年度の原稿募集・投稿期限・発行日は委員会が決定し，公表する。

第9条（校正）
校正は，2校までとする。その際，大幅な修正は原則として認めない。

第10条（公開方法）
「神戸学院大学心理学研究」の目次および掲載論文等は，原則として心理学部のホームページ及び神戸学院大学機関リポジトリで公開する。

第11条（著作権）
掲載された論文の著作権は神戸学院大学心理学部に帰属する。

第12条（改廃）
この規程は，心理学部教授会の議を経て改正することができる。

【附則】
本規程は2018年4月1日から施行する。
【附則】
本規程は2018年12月5日から施行する。
【附則】
本規程は2019年6月5日から施行する。
【附則】

本規程は 2023 年 9 月 6 日から施行する。

「神戸学院大学心理学研究」投稿細則

2018年4月1日
制定
改正　2020年 2 月21日
改正　2021年10月27日
改正　2022年12月 7 日
改正　2023年 6 月14日
改正　2023年 9 月 6 日

第1条

投稿を希望するものは以下の諸要項にそって，MS Word で作成した原稿を電子メールで「神戸学院大学心理学研究」編集委員会（以下，「委員会」という）に送付すること。

第2条　論文の種類と原稿枚数

1. 原著論文：原則として，問題提起と実験，調査，事例などに基づく研究成果，理論的考察と明確な結論をそなえた研究。査読有。掲載時，A4 ダブル・カラム約 20 ページ以内。
2. 研究報告：すでに公刊された研究成果に対する追加，吟味，新事実の発見，興味ある観察，少数の事例についての研究報告，速報性を重視した研究報告，萌芽的発想に立つ報告。査読無。掲載時，A4 ダブル・カラム約 20 ページ以内。

原稿枚数は，表題，著者名，所属機関名，要約とキーワード，本文，引用文献，脚注，図表，付録などすべてを含め，論文種類ごとの規定ページ内におさめる必要がある。

第3条　論文の形式

1. 提出原稿は A4 用紙を縦に用い，各ページは，上下，左右に 3 cm 以上の余白を取り，40 文字×30 行（1200 字）とし，10.5 ポイント以上のサイズの文字を用いる。
2. 英文は，一般的フォントおよび 10.5 ポイント以上のサイズの文字を使用し，行間はダブルスペースとする。1 ページに入る行数はフォント，サイズにより異なるが，20 ～ 23 行を目安とする。
3. 原稿には通しページを付ける。
4. 要約は日本語，英語どちらでも構わない。和文は 400 字程度，英文は 100 ～ 200 語とする。
5. 原稿作成上の規定や表記法，文献の引用などについては，日本心理学会の「執筆・投稿の手びき（2022 年版）」を参照のこと。

第4条　提出様式

投稿にあたっては，以下のものを委員会に電子メールで送付する。

1. 表紙（投稿区分，表題，著者名，連絡先，3 ないし 5 つのキーワード）
   和文原稿の場合は，論文題目の欧文訳と著者名のローマ字表記を併記すること。
2. 本文
3. 引用文献
4. 要約
5. 表・図
6. 図のキャプション
7. 倫理チェックリスト：「神戸学院大学心理学研究」ホームページよりダウンロードし，記入の上，提出すること。
8. 承諾書：教員が指導学生の卒業論文などのデータをもとに論文を作成し，その学生が共著者に含まれない場合は，学生からの承諾書を提出する。

第5条　査読の手続き

1. 査読者の選定
   委員会は査読者 3 名を選定する。
2. 査読者による査読
   受稿論文は査読者 3 名に，著者情報を伏せて依頼され，査読される。査読者名は著者には公表されない。
3. 査読者による判定
   査読者による評価に基づき，判定が行われる。
   ⅰ）このままで掲載してよい
   ⅱ）掲載してよいが，意見を助言する
   ⅲ）意見に基づき訂正すれば，掲載する
   ⅳ）掲載しない
4. 論文の改稿
   受稿論文は，査読者のコメントを付けて，期限つきで改稿を求められる。
5. 改稿論文の確認
   著者によって修正・加筆され再提出された改稿論文は，委員会が確認する。論文によっては，再度査読され，修正が求められる場合もあり得る。
6. 掲載，不掲載の決定
   掲載，不掲載は，すべての査読者からの評価が得られた後，委員会が掲載，不掲載を判定する。

第6条

この投稿細則は，心理学部教授会の議を経て改正することができる。

附則
この投稿細則は，2018 年 4 月 1 日から施行する。
附則
この投稿細則は，2020 年 2 月 21 日から施行する。
附則
この投稿細則は，2021 年 10 月 27 日から施行する。
附則
この投稿細則は，2022 年 12 月 7 日から施行する。
附則

この投稿細則は，2023 年 6 月 14 日から施行する。
附則
この投稿細則は，2023 年 9 月 6 日から施行する。

神戸学院大学心理学研究　第 6 巻　第 2 号
Kobe Gakuin University Journal of Psychology,
Volume 6, Number 2

発　行　日	2024 年 3 月 21 日
編 集 委 員	山本 恭子　清水 寛之
編 集 事 務	心理学部長室・心理学部実習助手
発　行　者	神戸学院大学心理学部
所　在　地	〒 651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬 518 TEL：078-974-1551 URL：https://kobegakuin-psy.jp/
制　　作	交友印刷株式会社 〒 650-0047 神戸市中央区港島南町 5 丁目 4-5